

特 116

172

石黑觀道著

定善義私考

深草叢書刊行會



始



~~33~~

特116

172



三、	三、	六、	十、	九、	八、	七、	六、	五、	四、	三、	二、	一、	◎題	○觀經正宗分定善義卷第三	淨土宗西山禪林寺派管長
雜	普	勢	觀	真	像	華	寶	寶	寶	地	水	日	字	觀	一
想	至	音	身	座	樓	池	樹	想	觀	觀	觀	觀	觀	觀	觀
觀	觀	觀	觀	觀	觀	觀	觀	觀	觀	觀	觀	觀	觀	觀	觀
百六十五	百五十八	百五十一	百四十三	百廿四	百八	八十五	八十	七十五	六十	四十八	廿九	五	一	一	一

目次

大正
14. 9. 26
内交

簡在明



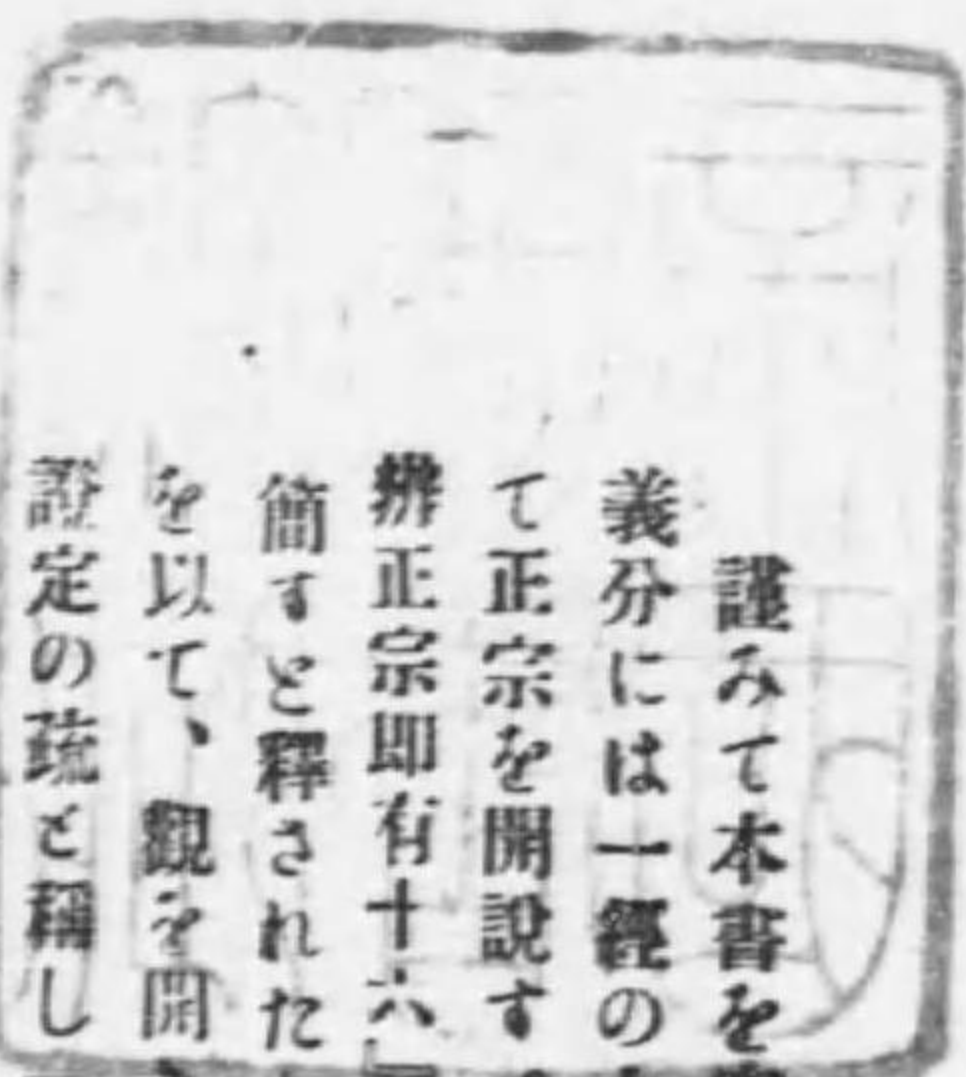
得本まろ

大傳の義山



定善義私考

石 黒 観 道



謹みて本書を窺ふに、導師今此觀經に就て、四帖の疏を造り給ふに、玄義依文と大別し、第一玄義分には一經の大意一部の奥旨を釋し「先作七門」と料簡し、第二序分義には此の經の機を發起して正宗を開説すべき緣起由來を序し「就此已下就文料簡等」と示し、第三定善義には「從此已下次辨正宗即有十六」と釋し、正宗には十六觀定散の二法あるも、觀が正宗の體なれば一々觀に就て料簡すと釋されたり。然れば上の十三には定善一門の義を以て觀を開き、次の三輩には散善一門の義を以て、觀を開きて九品を釋し給ひたる一帖なり。總じて四帖の疏は通途人師の註釋に異り、已に證定の疏と稱し一僧指授の感得に依りて、經意を顯はし給ふ釋文なれば、傳説直說國中入天の法門と仰ぐべき選述なり。斯る尊き巧妙なる一帖容易く窺ふべきにあらずと雖も、當五三の末釋を參照し精義と信する箇處を記して備忘とし、且つ又、初學者の階梯たらんとする微意に外ならず。尙は玄談等は拙著玄義分綱要に譲り、直ちに入文解釋す。

○觀經正宗分定善義卷第三

觀經の二字は所釋の經名、正宗分の三字は序分を簡びて、正しく一經の正説たることを顯はす。

一經の正説は定散の二法なれば、定善義散善義に通ずる名稱なり。今は定善を釋せば定善義と題す。卷第三の三字は常の如し、四家疏各題號異なるは一經に四卷具する意なり。

○沙門善導集記
立義分綱要の如し。一義に曰く善は佛名にして釋尊の觀門なり、導は能引來迎の如來なり。集記は、兩宗釋迦彌陀二尊にて導師が兩宗を集記に給ふなり。

入文大分三

- 一、標起總釋二
 - (一)、先標起——從此已下次辨正宗即有十六
 - (二)、總釋——還就一々——應知
- 二、隨標別釋——十六大分二
 - (一)、定善十三
 - (二)、散善三
- 三、惣結成義

○從此已下次辨正宗即有十六 入門三、一標起總釋二、一先標起

從此已下とは、正宗分中定善即ち日觀已下を云ふ。次は序分に對す。正宗とは觀念兩宗を正宗分と説く。即有十六とは、定善に十六あるに非ず、日觀已下下輩觀に至り觀門の正宗即有十六なり。而して正宗分は觀を宗體とす。

同散善義に準せば、次辨正宗定善一門之義即有十三と云べし爾ざるは如何。答互顯とす。定善義には標文無くて結文あり。廣明定善一門義竟(四三丁)散善義には次解三輩散善一門之義の標文あるも結文無し、爲に互顯とすべし。されど亦意味あり曰く、今定善義に標文無きは定散等生自開の本意を明す。若し標舉して定善一門とせば能請定善教に局て諸師と同じく自力に墮して他力の本意顯れざれば、今は散善自開の本意を示して、即有十六と云て、示觀開示の智より明す正宗なれば、

定散無差別、定善即散善にて、諸師と意味を異にしたる義を明さん爲に標文を出さざるなり。又散善に標文を置くは、自開散善を示す。曰く散善一門と云て、散善を門とし定善と等しく入る義とす、定善に結文あるは能請と自開とを差別す、散善に結文無きは定散等しき義を示す。若し散善一門義竟と結文を置かば、又散善一門に局る。故に定散等しふして散善一門の標文に定善をも收め、亦得益段も收む。爲に結文あれば此等を收む事不能となる。得益を散善に收むとは、即ち定善の第七觀に收むる意を云ふ。

○還就一觀中對文科簡不勞預顯 次惣釋二 一簡諸師

還就等諸師多く文前に十六觀名列す今は下の觀々に譲り標列せず。勞は煩也 預は兼也豫也 秘決云 即有十六と云ふ所に自ら列る義顯れたるも、十六觀に歸託し、一一觀中に就て、教内の文に對し教外の深義を料簡するに離言絶相なれば言論に叙し難し。其義は勞しく預じめ不顯となり全書一 二三四 云能請自開、教内教外機佛各別たり之を等しからしむる事最も勞しかるべしと云云事相の妙釋可仰

○今定立正宗與諸師不同

嘉祥時章提希已下。淨影唯願廣説已下。天台爾時世尊已下を各正宗分とす。(參照觀門義一ノ一丁他) 不同は文と義の不同と見よ。義不同とは諸師は、思惟正受を定善と釋し十六定善とす、今師は思惟正受は定善 三輩散善と釋し、十六觀は凡夫出離の義と執る。此等文義意の不同とす。秘決全書一 諸師在世爲本、今師滅後爲體、是慈悲智慧不同也と、又他筆三問答參照。

○今直以就法定者一由序也應知

二正顯自義

四

就法定 觀門の法に就て正宗を定む、諸師は機を面とし章提に蒙らしむ、今師は法を體とし機に依らず。されど諸師今師俱に法に就き機に就て定むとは云へ、諸師は機を面とし兼て法を顯し、今師は法を面とし通じて又機を顯す故就法定と示された(參照他筆) 日記云 序は機法あるも機を面とし正宗に機法あり法を面とす。諸師の義一義成せざるにはあらざるも今義に及ばずと云云
從日觀初句 佛告韋提希文 他筆云示觀開悟は欣淨別所求の土に還て領解すと日觀にて顯也と云云參照

多義不同 二序三序六緣七段等と他義不同あるも、一經の正宗は未來の爲め、日觀已前は在世章提の爲にて未來の爲たる文無くば由序とす。秘決五義可見

應知 前來の宗義の如く深思應知事相上にては能請自開、教内教外、機法との義をば深思すべきを應知也

- 二隨標別釋 十六大分二(一、定善十三大科四)
- 一、正釋十三、一日觀(通科三(舉辨結))
- 二、總結成 上從日觀 四二丁右末二
- 三、總讚 總讚云 四二丁左一
- 四、結成 又就前請中四二丁右六

『通科とは總科にて即ち一觀を三分し觀々に序正流ある義を舉示す。別科とは一觀一觀を委釋す』

總は十六に通じ別は總の三義を分別す。例せば序分義に三段を開て五義とするが如く、總は別を別は總を互顯す。○日觀

日觀來意、先正宗の説に入るには、當觀は總じて依正の光明を標す故に第一に來る。又淨土の方向を指示し、業障を知らしむる義より見ても最初にあるべき義とす。國師指南の如く(他) 暗去明來の自力の情を去りたる他力の領解は日輪の如し日は彌陀の慈悲なり、衆生は慈悲に依て往生す。欣淨にて我今樂生と別選するも西方と定めず、今方所識知にて日没の所と定む。光明識知と欣淨に光明を選定するも、自力なれば攝取の體を知らず、今正しく日輪光明の攝取を知る業障識知にて、我等業障あるに依り、三雲未だ晴れずして煩惱具足の機と知りて歸命の心發る也、是日輪は衆譬の體なる故、先づ第一に舉る也

○就初日觀中先舉次辨後結即有其五 日觀三 一標

問 第二觀已下に準せば初就と云べし如何、答此下具には正宗分中有二一定二散初定中就日觀と云べし。定散は大段の科、十三觀と分つは子段なり。散善義の次解の次は大段の科にて上の十三定善に對する次である。以て見るに今此初字は下の散善に對する大段の科にて、定善中の日觀なることを顯す故就初と云ふ。秘決云 初字在上者日觀限干一 初字在下者日觀通十六、今爲令通十五

○一從佛告韋提下至想於西方已來 二釋五 一總告總勸三、一牒文 他筆云 示觀領解の謂を當日觀にて方處業障光明とを定め光臺の領解と正宗の領解と、一同を日

五

觀に始て説顯すと云云

○正明總告總勸

二標科

總告とは十方衆生を指す、惣勸は念佛の行者を指す。一經但此二の法門あるのみ（秘決）
法事讚云釋迦如來告身子即是苦衆生と、汝及の文無きすら普告と釋された。今此文あるに於てをや。他筆云 欣淨の章提は未來を隔つ、示觀は章提未來一同の上、章提に告るは即未來に告る也と、要するに示觀領解は十六觀に互るを總告總勸と云ふ

觀門義に十一門の告命に同すと、上輩の佛告阿難及章提希は十六衆生なり。章提は未來の機、阿難は未來の導師、在家の弟子と出家の弟子の二人を代表的に擧げ上六下三の機とす。今は章提と未來とを擧ぐ、阿難は示觀にて告命せり。示觀全く日觀なれば特に擧ぐとも、俱に惣告の中にあるなり。故に十一門中の告命に同すと示されたのであらう。

○此明章提前請一廣令開悟

三釋二 一惣釋

前請彌陀佛國又請止受之行とは、別所求別去行の二を釋す、されど

（經文若佛滅後の請に答て）

依文

經顯

私記五左參考

問前請等の文は欣淨縁の文なり 觀門義左前請彌陀佛國は厭苦縁中唯願世尊無憂惱處の文とあるは如何 答山師は導師の本意を取り通請の文を引き、通別一體所求去行一體と云ふ義を顯す、曰く章提の無憂惱處たる通請に、佛は其に相違し行體を現するは、所求も去行も同の意とす。何とな

らば我今樂生の別も、元來通請離れて無くば、章提の通請の底意は別請より外は無い、爲に今章提前請彌陀佛國も標擧するは、示觀開示の上より振り歸りて通所求の本意を汲み取り、所求去行通別一體の見地より以て、通請の文を別所求の文に準例とし給へるなり。山師此意を體得し、導師の文に達して通請の文を引き以て、所求去行一體を成せられた。若し別所求の我今樂生の文を引かば、唯別に局る。此例は導師の釋にも通所求の文を引て開佛說淨土無生と釋せられてある。

又問欣淨の文なるに山師厭苦縁とあるは如何 答無憂惱處の文は厭苦の行き詰りにて見佛開法の不能と自力難成の苦なれば、欣淨の上の厭苦とも見られて、全く欣淨を離れたる厭苦にあらざれば厭苦縁中と仰せられたのか。此れ亦、又の一字に着目してか曰く同じく欣淨の文ならば又の字の隔てあるべからずとの意か。

如來當時即許爲說等 已下顯行示觀の意 示觀開悟の上で四縁相續の方を云ふ。章提領解の上は顯行示觀は全く十六觀にて、顯行とは欣淨所現の行體、示觀は欣淨領解の體なれば、欣淨を離れて顯示二縁無く、此の領解の上は四縁相續し全分欣淨の體とす。即ち顯行にて調機し示觀にて開悟すれば、已能向見の自力固執も破せらる。爰に於て機縁時至りて許説し給ふ。當時とは領解の時、章提開悟の時、未來に及ぶ時に許説せらる即領解の時なり。

但以機縁等 但は前文を抑す、立佑不離で六縁相續を以て四縁を成じて正宗を開説す、是れ文相は章提の二請に依て如來許説と云へば 散善の三福は章提の請に非すと疑問起らば、請に非ずして説くべき理由を釋明せんとして但と云ふ。機縁未備、章提は請法の人なるも顯行當時には機縁未備

なり。

顯行未周。隨緣の行にて一切を收めざるなり。

更開三福之因。因は正因。三世諸佛淨業正因の因とす。未聞之益。定散等生善惡得生なれば未聞の益とす。又如來重告勸發等。已下示觀緣の釋意とす。又は對顯行。重は他筆示觀の佛告阿難に對し、阿難汝等受持と云ふ故重告。云ふ。觀門義は示觀の阿難汝等受持に對し今佛告韋提と云ふ故重と云ふ。意は示觀は阿難の未來流通にて香山の流通、今は在家の流通にて兩會一の義とす。他筆は教相釋で示觀と序分の位にて釋明し、觀門義は正宗の位にて日觀と示觀とを釋しての釋意で一文の二義と見るべし。

此法。示觀開悟の法、事相上では正宗衆營の法と見よ。原は汝及衆生にて未來に通ず。開悟。佛意開悟なり。上來總告總勸の下に顯示二緣を釋するは、欣淨を十六觀と開說するものなれば、顯示二緣何の要あるかの不審あれば、顯行は衆機を調査し未聞の益を教へ(總告)、示觀は此法をば勸發流通すとの意なる故。第二義は廣令開悟よりかへりて讀む。第三義可知。

○言佛告韋提希汝及衆生等。次別釋二。一明告勸。上標右丁には、想於西方迄を總告總勸と科す、今二句を告勸とするは、上は廣く取る。今佛告韋提は總告、汝及衆生は勸の體にて相違せず、即ち應當專心已下は能觀の教なるも機に對して、勸修

すれば機教不離で相違せず、唯廣狹の意のみ。

若は不定の辭、汝及衆生の中に韋提は能請定善の方なれば正行の方面で定善を擧ぐ。然るに告勸とは觀門他力を示す方なれども、若と不定の言を置くは、若も一分定善の機あらば此の觀を修すべし、今は他力の觀なれば定機も修せらる、又今日の我等も修せらる、楷記には定善勸修の義と云ふは此意なり。

等とは、定善の機を叙すれども佛の本意は散善も漏さざれば等と云ふ。

問示觀には二人に告命し今は韋提のみに告命するは如何、答楷丁三義。一前兼勸說故通阿難、今勸修但命韋提、二前在念佛今在觀門、偏告能請。三前意在傳說、今直觀故不命也。此說是非可考。今正義云汝及衆生と說て阿難を除くは、顯示二緣は欣淨所見の釋明にて、其體全く十六觀なれば、示觀の阿難に對する勸持流通は全く日觀已下十六觀の流通なり。前に阿難を擧たれば今殊更に擧ずして二緣全く正宗の體なりと顯す也。問爾らば再び韋提に告命するは、答我は見つ未來の衆生は如何と請する請法の人なれば、特に擧て欣淨所見を説明する正宗と知らしめん爲なり。塵勞。見思塵沙八万四千の煩惱は塵の如く衆生をして勞せしむ。出塵。厭離穢土。佛國は欣求淨土。宜須勵意也。經に勵意の言無くも下の應當專心の文より勵意の義あり。即ち所求に向て意を勵す也、曰く繫念一處想於西方の状態を聞て誠知領納する位にて自力修行の勵意に非ず。○言應當專心已下。隨心解脫也。二明心行。應。即便往生。當。當得往生。專心は三心。繫念已下は住行を勸む、又云專心と繫念とは安心、

想は注想なれば即住行也、住行とは起行也、觀想の時は住行といひ念佛の時は起行と云ふ。安心とは他力の心に安住す、其を相續するを住行と云ひ、起行と云ふ。自力の心行に非ず。衆生一、然由暫息、應當專心の定機の下に、散心の至極を説くは、定を説くも散機を捨てず、散を説くも定機を兼る意ありて、今定を説くに散機に蒙らしめて、定善の成すべき所以を釋顯したる也。即此一節は散亂粗動の散機の相を釋された。楷記左文亂脫と云て訂正し釋明されてあるが、一句一字不可加減の文に對して如何かと思ふ。

六塵 色聲等の六塵で、眼に色を見、乃至意に法を緣す、六根を以て六境を緣するも、遂には第六の意識に轉入して正しく善惡を分別し、惡には瞋を起し、善には貪着し、善惡俱に生死の業を結ぶが故に、心徧六塵と云ふ。塵は六境界に穢されて生死に流轉するを云ふ。但以、散動の機相(韋提)は正受三昧不同と示し、上を押へて但以と云ふ。境緣非一 六塵の境六識の因緣 此根境識の因緣に依て、輪廻の業を造る。其數廣ければ非一とす。此一句は所緣の境也。

觸目起貪能緣心を明す。具には六根を擧るも今は初を擧て後を攝す。起は發起、貪は貪欲。亂想安心 心徧六塵觸目起貪の心にて安心せんとせば即亂想安心也と、暗に自力の安心を嫌ふ。此自力亂想の安心を以て、三昧何ぞ得べけんやと知らしめて他力の安心を勸む。自非捨緣託靜等、他力の安心は我等其分あれば此れに歸せよと。捨緣 緣は前の境緣にて即六根等を指すなれば厭離穢土の意也。託靜 閑靜で欣求淨土なり、此厭欣に依らざれば凡夫の三昧正受

に入ることを不能とす

相續注心 自力は相續難し 他力に歸入せば煩惱賊害の凡夫も能く一生相續注心して三昧成すと直指西方一、九域 經文は懸念一處想於西方なり、直は眞實の義、正直の意、佛所說の如く正直に想を繋るを直と云ふ。西方 經は一處とあるも西方より凡夫の想念する處無ければ西方と釋す。一切佛土皆嚴淨乃至如來別指西方國の意とす。西方は成就の方と決定し餘の九域は左に非すと示された。

是以一身等 已下八箇の一がある、一は西方一處にて八箇の方法を出し其の一を專ばらにする意で、八を以て餘を攝す。謂ゆる西方三昧に住し正受を體得するを云ふ。

「八一」一身 身業の勤唯西方一道に住す。一心 意業。一廻向 三業所修の善根を彌陀佛に廻入す(廻善向)。一處 西方極樂の處。一境界 處は總 境界は別。五塵俱に極樂の境界を一にし餘の境界に心を交へざるを云ふ。曰く極樂の色を見るが如く乃至極樂の法を緣して他事勿れと也。一相續 上の上は横、下は縦、又一形相續也、一歸依は歸依歸託、上來の横豎俱に歸依を一にす。一正念 正念は妄念に對す。

私記云

經文の懸念一處は合したる位、一念佛三昧釋は八一と開したる位、一觀佛三昧とし次の如く配釋してある。
(私云八一は結歸、願行具足の南無阿彌陀佛とす。開合の妙釋巧妙なり。)

一身……至誠心

一 心……深 心

一 廻向……廻向心

一 處……別所求

一 境界……極樂境

一 相續……願行具足

一 歸依……南無……者發願

一 正念……阿彌陀佛……者即是其行

「此八一を知るを識知定善とし三昧成就すと」

他筆抄は私記と意同じ。秘決は第八觀迄に配するは、十六觀に配する意。即ち第八觀觀成は第九の眞假一體なれば、十六觀に互り此世後生等の下下の文を引上げて釋するは即十六觀に配する意と知るべし。

想成就得正受 今日の凡夫心を一處に止め他方觀門に歸すれば正受三昧を得るなり。

此世後生隨心解脫也 正受の利益を明す。解脫は出離の異名也。

此世……念々深罪

後生……捨身證彼

當得

即便

現證無生

當生佛家

此釋は下下を引上げて釋し給ふ。下品の見金蓮華は欣淨の見を成する義也。猶如日輪は今の汝及衆

(楷記配當)

正座

專心

西向

一處

日等

堅住

不移

惡念

生也、下釋は平生臨終に約す。第四科の如此愚人乃至生死之罪を得蒙現益と科し、第五科に華開渾疾として臨終に約す。

今此文此世後生と釋して平生臨終を擧るは、下輩を引上げたる意とす。爲に八箇の一に十六觀を收る意も之に依て知るべし。此れ導師と山師意一同とす。故に楷記云 問假依日觀初句に那忽に作如此過分解耶 答義意日觀に局らざる故也と、又觀々横豎の意あれば、一觀成すれば諸觀成すの故、又眞假一體の義の故と云云可見。問想於西方の句を釋せざるは如何。答此句は總て十六觀に互る故釋せざるなり。又繫念一處の句は想の一字に收めれば別釋の用無し。問應當の二字を出すは如何。答自開の本意を顯す。謂く散善九品の初に三心を説は即便往生の安心、第五の機を擧るは、正行當得なれば、即當は自開の本意なれば、先日觀に其本意を顯すのである。

○二從云何作想一正明牒所觀事 二釋牒所觀事二、一標科

云何作想は自問、凡作想者も自問、皆見日沒は欣淨現土 當起想念は説を領解する處なれば、日沒を見て先づ想念を起すと、章提の欣淨に先づ土を見て後に説を聞に達せすと知ると同意也

所觀事とは、皆見日沒の句也、正しく所觀の體なる故、おもに牒する也 楷記(十一)雖牒能觀微釋の意、在所觀事云云とは云何作想の句に着眼せられた故に、能觀なるも意は所觀とす。山師及び立信上人は、皆見日沒の所觀に着目し給ふ。深草抄云 凡作想者の句を牒するに非ず。上の繫念一處の文を指て、皆見日沒と説くが故に、當文段是牒の義に當れり。此意を顯して如是釋し給ふと云云 ○此明諸衆生一以正念之方 二釋二、一總釋

諸衆生 經文の一切衆生にて即常没の凡夫とす、故に久流と云ふ。一代化前自力に住して他力安心不解の故、曠劫已來迷ひ來る也。

離指西方等 西方を指定するも、作意すべき方法を教へざれば未悟の位也。作意は安心の異名、序分に於て光臺を見るも已能向見(自方)の情にて、思惟正受と請し淨土往生の安心を知らざる也、即ち序分至誠心を位で云ふ。法華讀下 專々指授歸西路、爲他破壞還如故云云の意で、至誠心位は不決定なれば、雖指西方、他の爲に破壞せられて淨土他力の安心とならず。一分の其機なるも不堅固とす。此下は云何作想已下の大意を述るなり。

故使如來爲生反問等 正しく云何作想の一句を釋す。反問とは講師が問者に反て問也、今は佛が衆生に問ふ義也、其故は云何作想の問は衆生の致すべき問也、然を佛遮て衆生に對し云何作想と云て凡作想者、結するは衆生に問給へる義なれば斯く釋す。即ち經文の自問自答の義に當る。これ佛先に想於西方と説給へば、次に韋提が云何作想と問べきに、佛反て自問したれば反問と云ふ。楷記、三義佛自ら反問し自ら答釋して疑問を除く、次に夫人能請の情反問し自答して佛力觀成の義を顯すと云云。

遣除疑執は云何當見極樂世界の疑執とす。正念之方は極樂也。方は方法方軌にて下の跏趺正座等の意。方は日没の方也。楷記 正念を極樂とするを破するは不當か、安心と極樂と共通と見るべし。問云何作想の文を別牒して釋せざるは如何、答云何作想は能觀、皆見日没は所觀なれば、能所一致の義を顯はされた。又云此一句は廣く前六觀に通ず、何以得知とならば、第八觀の所以者何の一

句、不入科文して諸觀に通ずる事を顯さんとするが如く、依報觀亦爾なる故に。

○言凡作想者 次別釋二、一微問

○此明總牒前意——入觀之方便 二答釋三、一牒前生後。

總とは日觀に局らず觀觀に互て、結前生後入觀方便の義あるべき故總牒前意と云ふ。つまり總は化前一代を叙する意なり、曰く凡作想者とは、韋提欣淨現土を見て、思惟正受と請せしも、一代行門にては、難成と示さん爲に、欣淨所現を總牒前意とす。即ち化前一代の行相を作すものは總じて自力と知らしむ。

後入觀之方便 下の當起想念の他力觀門を顯して、一切汝の行相は他力なりと示す、爲に私記、諸教對判の方便眞實の權方便に非ず。異方便と云て方便即眞實と云ふ。諸佛の誠實言といふ方便也。○言一切衆生者總舉得生之類 二總舉生類

總は又一經に互り定散平等に得生す。即ち佛語の定散にて聞て證知する定善なれば、一切衆生已今當の別はあれど、皆得生之類にて一門中第三有緣の類を指て、一切衆生と云ふ。

○言自非生旨——不堪 三明機堪不二、初直釋二、一略釋 機は可發、堪は如說修行にて日觀に堪應の機、不堪は其反對也。堪は有目、不堪は無目にて、安心の領未領の別とす。未領者も安心すれば有目者となる。上六品は堪、下三品は不堪。堪は觀門、不堪は弘願、觀門を擧て弘願を顯す。十一門中第五簡機と見るべし。而し私記は此十一門に配するを否定す。觀門義、他筆抄、楷記等は十一門の因行に配す。意を得れば一同か。又三心の有目無目

の釋は秘決の委釋を見るべし

○言生盲者——不限時節必得成就 次廣釋

生盲 顯密の二意あり 密の意は不發三心者を生盲と云ふ。母胎中 密の邊は母胎は世間。出等とは出世に遇ふも智慧有りて自力修行するを云ふ。故に母胎中とは知恵中なり。不見物 慈悲の覺體を物と云ふ、一切萬像を見て慈悲の體と知らざるを生盲とは云ふ。又生盲とは玄義四種非機の如し云元私記及觀門義參照。

不識日輪光相 特に識の字を用ふるは、生盲者安心未領の人也、若し唯の盲人を云ふならば、不知と云べし。今は日輪光相を識知する也、生盲者も安心領解すれば有目となして、日輪光相を識知す。光相とは他力なり。同生盲を簡ふ事は日觀に局ちや餘觀に通ずるか、若し日觀に局らば、水觀も亦生盲の可見に非ず。若し餘觀に通ずとせば、經釋俱に日觀の機に非すと簡ふか。答餘觀に通ず、經釋は日觀中にて示し餘は皆例して知るべしと。

同生盲及覺障等數ふる事得べきや若し得と云はば彼既に不聞不解何ぞ受領せん。若し否と云はば經釋俱に生盲の機を簡で彼等を論せず。答彼皆非機也、玄義の八難は不受云云經釋は見を論じて旨のみを簡ひ、一を挙げ諸を例す要するに非機を舉て得受の廣きを明したるもの。私記十觀門義「參照遇緣患者 密意は序分至誠の位、未堅固の故、他の爲に破壞せられて自力に還れども、一度至誠を發したものは再度教えて、日觀を作せば深心位に至り破壊せられずして、悉く成就し得る也。顯の意は生盲ならざるものは厭欣の相を知りて修し得べし、此を正念と云ひ、二度不改を堅持と

云ふ。不照時節は、上盡一形下至十念必得成就、一形一念悉く往生する故必得と結す

正念 堅持……聞說阿彌陀佛執持名號〔私記云〕
不限時節……不問罪福多少時節久近 如此識知する人を三昧發得とす
必得成就……現身念佛三昧 (識知とは信仰の意)

○問曰章提上請願見極樂——何意也 次問答二、一問

此問は皆見日沒の句より起る、曰章提上請は見極樂土の請なるに 今觀日と教ふ。佛答に相違すれば此問起る。上請者楷記一十三義、第一義は他筆と同じ、第二は非とす、第三義可取。他筆抄は示觀の云何當見を指すと意は未來の爲の正宗なれば、示觀の未來の請と云へり。其未來請とは全く欣浮にあれば楷記と同義となる。

許說 楷記三義あるも理未盡、今謂許說とは皆見日沒の句とす。顯行緣の廣說衆譬は許說也、皆見日沒も許說なり。日は衆譬也、顯行の廣說衆譬も未說なれば許說也、皆見日沒は許說にて未正說、正說は當起想念の句よりなり。故に皆見日沒の句の中に三識知を明せり。其中第二業障識中に一代觀法を明すは欣淨所現の十方淨土と同義とす。皆見日沒の句の中に後に説べき法を引上て先づ顯示し、後説を成するは章提の欣淨所現と未來、日沒の見と同とす。然らば許說とは皆見日沒の句と知るべし。

○答曰此有三義 二答三一、標
觀日に三義あり、一知方、二知障、三知光也

○一者欲令衆生一一超過十萬億刹即是 二釋三、一方處識知

第一方處識知は、第二重通別廢立の義にて、一代諸經所讚多在彌陀故西方をくくも初重にて通十方、今は爾らず、通別の上に西方の一土を指す。即ち極樂の一土を知らしむ、此に於て日没を觀せしむ。文章知るべし。唯取春秋 春秋の日を取るに非ず、直西を知らん爲也、日没は假の能譬なれば其に依て眞の西方を知らしむ、故に淨穢二土を隔て、超過十萬億と釋す。

○二者欲令衆生識知自業障有輕重、二業障識知二、一標義門

業障の輕重を擧て此上に自力懺悔を出し、之に堪へざる位に他力の懺悔と云ふ色を顯すは、亂想の心想に入て眞假の隔て無き有様を識知するを業障識知とす

○云何得知 二釋二、一自問

云何得知とは、經文 云何作想の自問也、正く日觀の義相を釋せんとして問返す。今特に起問するは、他力歸入は業障識知を所詮とするが故なり。

○由教住心觀日一一氣道宣通故 二釋八、一明住心威儀。

心を一境に止て觀日の方法を明す。此日に就て私記一廿二定中假日か、定外空觀日かと問答し、二義俱に得たりと結す。可見。か跌正坐等は其方法なり。右脚着左膝上與外齊等は座法とす。其座法觀念法門と反對するは、觀門義の説に依れば行人の任意、他筆抄十三左は東方、右は西方也、上は先にして下は後にす。【東方の衆生が西方へ生ずる次第と云云】

深草抄云左右は定惠二法にて、左は惠右は定、觀念法門は助業なれば惠を以てす、故に惠【左】を

定【右】の上に安す。今は觀門は定を所詮とすれば是を上に安すと云云又私記廿三二義可見。

○又令觀身四大内外一一五大皆空 二五大皆空觀、

上來座儀畢り已下入觀の法とす。其中四大皆空を明す。上の釋は身の威儀を調へ、今は調心方儀也、四大を標し五大を明すは、四大を空する能空の空も、身中空隙の空も同一なれば、四大を觀じ空する時、五大皆空の儀具足すれば五大皆空觀と科判す。私記一廿六四五六大は粗細の二義に約す。秘決(全書一)四五六大の秘釋あり参照せよ

觀身四大内外俱空等 内は堅濕軟動外は色聲香味等の四大にて、即自己身體皆空、無一物と觀す、私記一廿四 此觀法有二道理、障所緣境方一、障能緣心方一と云云可見 曰く法界常じうにて本來無一物なるが父母の因縁にて 五大所成の身體を成立す。今其を法界へ散向すれば元の無一物也云云 身之地大皮肉筋骨等、内四大を擧て、外四大を等す 四大は堅濕軟動を性とす。一切色法此法を以て合成し、共性は十方法界に周遍する故大と名づく、見よ法界の全體四大合成し依正俱に相依して住す。今は四塵を觀じて四方に散向す、散とは四大を分折し極微に至る迄分散す。向は本方へ向て滅却す。

身之地大一一散向西方等

木東	火南	土中	金西	水北	【普通配當】
地北	水東	火南	風西	空中	【法界五輪】
西地	北水	東風	南火	【今疏】	

本疏は中央は當體、自身居て四方へ四大を空する作法とす。此東西の二方打違へたるは。相尅

相生の義とす。

相尅	木尅土	土尅水	水尅火	火尅金	金尅木
相生	木生水	火生土	土生金	金生水	水生木

相尅とは西方は金東方は木、尅尅木也。西方の金【佛】を以て東方の木【衆生】を尅す。

相生とは西方は金中央は土、土生金也。土は父母の如し（能生）此より生ずる金は子の如し（私記廿三参照）

楷記は相生に約し、觀門義は相生と決断とに約せり。又西方を初位とするは觀門の方便西方を本とするなりと、曰く（觀門義）問所途に異し地大西方、風大東方散向と釋するは如何、答示觀の上は通別一體とは西方別所求土に顯れば十方合用の土を以て、散向西方して別所求の土體を顯し、風大を散向東方して、西方風大の佛體、東方の機乃第九門の境と顯れたる意を示す也、此に依て下中品には、地獄猛火化爲清涼風と説く、涼風とは今佛體口稱の南無阿彌陀佛とす。見よ世界は聲塵國なり。能居の衆生は耳根最利なれば、聲に正覺を成じて稱名爲本とす。亦能化の佛は風大を種子として、言語に南無阿彌陀佛の德を備へ、所化の衆生は耳に聞き音聲に智を生ずる故、稱名を即言語とす。言語は即發聲也。發聲は風大、風大は即命根也、命根は無量壽佛なれば、聲中に不可思議の功德顯れて、生佛一如名體不二を成ずる也。

問地大離散する時餘大も即ちり散すべし今何ぞ此次第觀を作すや。答法在一心 說必次第とす。又俱合には是解作意の攝とす。問五大中初二大は體用を出す。後三大に是れ無きは如何、答初二は有體故之を出す。後三は無體なればなり。曰く風大は息の出入を以て名之別體無し火大はだん氣を

以て之を名くる故無體空大は亦教經を以て之を名く故不出文也。風大に不見一塵の相とは、見は懸著に名く眼見と云ふにはあらず。

○唯有識大湛然凝住猶如圓鏡内外明照朗然清淨 三明唯有識大觀。

前は所變の五大皆空を觀じ、今は能變の識大獨り存すと觀す。何故識大不空とならば識大は能觀の心にて、即定善示觀の貌にて、聖道淨土を淨土の機とす。秘決云（全書）能譬は影なれば之を空す。所譬は體なれば湛然凝住也と、圓鏡は如執明鏡なり、要するに五大を空する時、識大のみ残り雲晴れて太陽の明了なる如く、圓鏡にして内身外（器世）明照朗然清淨なる也。

○作此想時——如鏡面大 四明轉心觀日

前に識大を觀するは能く心性を觀す。自の心性を觀する事は、觀心に住せん爲なれば、次に轉心觀日と云ふ。意は内に白識を觀する心を轉じて前所見の欲没の日を觀す。されど前の識大を即ち日輪とするには非ず。作此想時 上の空觀を指す、凝定 心一境に住し他事を緣せざるを云ふ。

其利根者等、前に識大を觀するに如鏡と云ふも、但是觀解にして觀見では無い。今轉心觀日する時明相現前す。此日髮髻として如鏡大等と云ふ。故知前には淨心の體を觀す、今は淨心相似の境を觀す、又云觀門を得て弘願に歸するものは、正しく定中に明相現前せざるも、空日を明相現前と知れ、日光は衆譬の上よりは成等の黑暗を除くもの、爲に觀日すれば明相を得たるものを業障を知りたる者とし是を利根者とす。觀門義（十六）參照。又秘決云三心を發得すれば、明相現前する也、相似とは法界を皆衆譬と見る也。鏡大 遇緣患者の見、鏡面大、常途人の見、今は生旨を除く故二人の見

を擧ぐ。

○於此明上——不能合心明照

五明見業相輕重

上來は識知業障の方便、此文は正しく業障識知を明す。明上とは上の發鏡を指す。安心領解の上に我業障を知て無有出離之縁と信するを、見業障輕重の相と釋す。輕重 下の三障を指す。即ち下三品の輕次重の惡業也。

【重次經……黑黃白……遇貧賤】

此日猶雲障等、の意を結釋す。即ち總結合譬とす。雲障は上の三障也。

不得朗然顯照 三障の過失を明す。衆生業障等 譬に寄せて、我等の業障を知らしむ。日を日と見る人、光明と見る人、來迎と見る人あり。是れ業障の輕重に依るも衆譬の體を領解すれば、その儘一同とす。淨心之境等、淨心は三心、境は阿彌陀佛の行體にて、今衆生は自力に依て、此淨境を障蔽し明照ならしむる也。又三心は能緣の心、境は日也と他筆抄^{十四}參照。日月の光を障るは黑雲に過たるは無し、我等業障の雲に覆れて來迎の佛日を見ざるに譬ふ。三雲を祕決は三毒と配し、觀門義は痴貪に配す。三毒に配するは下三品の機、痴貪に配するは發起に約す。閻王之貪、韋提の痴、所望不同にて韋提未來一同と云ふ時、兩釋相違せず。

○行者若西此相——向佛形像 六明淨除方法

除業障と科すは即懺悔なり。先懺悔を明さんとして其方式を示す。見此相 上の業障の相を云ふ、見とは國師が觀門の見と仰せられたは、無有出離之縁の上に成する見なるが故なり。祕決^(全書 二四)云信心增長せずして疑心ある者は懺悔念佛し冥加を求むべし、念佛は懺悔滅罪の方

法なる故也。私記には自力の懺悔を引て、他力懺悔念佛を明すと、意味同一なり。形像 未來の懺悔なれば像と云ふ。律の法なれば戒師と云ふ。道場嚴飾等の方法は他筆抄に引證あり見よ。○現在一生懺悔——不名頓滅也 七明淨業成就相

此下楷記文亂脱とし訂正しある師一流の義とすべし。一家には所用すべからず。現在一生 慇懃に懺悔を修するを明す。觀念門の畢此一生等の如し、現在は對過去、一生は對他生、曰く無始の罪を懺し其罪を滅し淨土往生す。二生三生を経べからず故一生と云ふ。即決定往生の懺悔とす。

懺悔 梵漢相稱 乃身口意業等、新記^{廿六}至今生の三字を加へて禮讚の從無始已來乃至今身、法事讚曠劫已來乃至今身、散善義曠劫已來及以今生等の如しと引例す。楷記は文を前後に讀じ、皆非正義とす。觀門義は無始已來は横に約し、身口意は豎に約し、體別なりとして及の字と見られてゐる、是れ及に相違合集の二義ある内、相違の及と見られぬか、されど合準と見ては如何一考すべし。十惡等は如常。悲涕雨淚 禮讚に三品の懺悔あり、上は身毛孔及眼より血を出す。中は通身熱汗を流し眼より血を出す。下は徧身熱し眼より流涕す、又異説には、上は五體投地し大山の崩るが如くし通身汗を流し眼より涙を出す。中は身心徹倒し眼より涙を出す。下は自ら所犯を顯して口に懺悔の文を唱ふる也、今此處は上品の懺悔を明しして中下懺悔に通せしむるか。

如前座法 上に雲障現じたれば直に座を立ち懺悔し、懺悔已らば又本座に還て修觀す。故に安心取境と釋す、安心は觀門、境は淨土の境、觀門に依て極樂の境を解する也。境若現時 若とは他力觀門の意を明す。現は見の意で現不現を簡ばず皆佛恩とす。不現は領解の

位、現は開悟の位。不現が領解の位とは、法界衆譬と領解すれど鈍根なれば未だ其覺體を見ずして、松は松、梅は梅と見る位を云ふ。現は開悟位とは、法界の現像即ち法界身の覺體と見て、松竹の影を失し唯來迎と見る也、是れ利根者領解の位即ち開悟する也。三障盡除 他力懺悔を明す。若し自力ならば一障尙除き難しと知れ、謂ゆる正因一位にて現不現の機を簡ばざるのである。

所觀淨境 當觀で云へば日輪也、約法 依正二報。此に三重あり、自力位は日觀、佛力位は佛語即日觀、弘願位は來迎也。此名頓滅障也、頓滅漸滅は正因正行と見よ、正行の機に利鈍あれば此別がある。新記此下十四類に差別す可見

○既自識業相是——方始除也 八明示觀之意義。

既決定義、上の決定領解者も、決定開悟者も前の教に依て自己の業障を識知せば勤心に懺悔せよ、觀見を宗要とするに非ずと。懺悔とは、示觀縁の依下觀門專心念佛を云ふ。觀門義一ノ行門觀門二の懺悔を明す、可見。但憶の下を觀門の懺悔と科す。日夜等 禮讚の如し、等は一切の時を攝し時節を簡ばざる義で心に浮ぶ毎に、發三心の初より臨終捨命迄修するを上根上行人とす。唯觀門に依て他力念佛を修するを云ふ。但憶得等、正しく他力觀門の懺悔にて上に日夜三時等と教ふと云へど、自己に有罪と憶得して懺すれば上根上行人と讚す、序分義四十依下觀門專心念佛注想西方念々罪除故清淨也とは此の意である。

深草抄(一四三)付之二義あり 一義云上は觀佛懺悔なり、故に三時六時等の時節を出す。但憶己下念佛懺悔也意は解の位に念佛に歸して懺悔を用る事を顯す也 又義云憶得して即懺する者はと讀

むべし、謂く律に憶罪懺悔と云ふ事あり此を指す也、二義中後義正とすべし、云云

譬如湯火等、借譬曉示す、曰く今此經を鏡とし自の機分を識らば罪の重きを憶得して即時懺すべく、豈徒らに觀成の時を待て始て懺悔すべけんや、如是の行者を淨業成者と名づけ、佛本心に相應したるものと爲す。豈容徒の三字は下の諸句に冠らしめよ。待時、上の日夜等。待處、嚴飾道場を指す。待緣、安置佛像等を指す。待人、表白諸佛等を指す。始除 懺悔無始已來を指す。今は已上の方法を廢し、他力觀門の懺悔とは時處諸緣を待たず、專心念佛すれば佛力に依て念々に罪滅し、淨土の業を成就すと曉示された。

○三者欲令衆生——百千万倍 三光明識知三、一正釋

日觀の成不を論せず、彌陀の依正二報を知らんと念願するを光明識知とす。彌陀の依正は光明爲體なればなり。即欣淨縁の別選の體にて、光明名號攝化十方の意也、私記三十委釋、依正等當觀は依正二報莊嚴の總假觀なる事を顯示す。内外、表裏映徹也。百千等 超日月光佛の意。

○行者等若——快樂莊嚴 二勸觀解

眞假各別を顯して還て一體を成す。彌陀止覺は光明爲體なれば、眞身觀の體を光明遍照等とは説けり、觀門義云彼光明心に浮ばば、必ず日觀を修すべからず 諸觀皆如此。 處念憶想 三業に配すべし、定心とは行門に似たれど解の字に着目すれば觀門の定心也。解は領解とす。

○爲此義故世尊先教作日想觀也 三結

三識知の次第は方處を知て日輪を觀せば、三雲覆て業障有るを識らば即彌陀の光明を知得る也。

○三從當起想念一 所期皆應 三明正教觀察

先の所觀に對し今は能觀を釋明す。正教觀察とは、韋提の思惟正受の請に對し、佛は見極樂を教へ給へる意也、そこで經文を見るに、皆見日没一諦觀於日等は思惟の形也。見日欲没一既見日已等は行成也、若佛滅後の上に説く行成の思惟觀、云ふ定善と知るべきなり。正身威儀 先の正座跏趺の威儀で第二業障識知とす。面向西方 前識境住心にて方處識知とす。守境住心 繫念一處の意堅執不移 他力に依て定心立れば其心不動にて闇黑等の障無ければ觀の過無と示す。所期皆應 如此すれば日觀成するのみならず十六觀相應すと也。

「狀如懸鼓 楷記諸釋を引 秘決云日所譬 鼓能譬也 今初觀故能所不離の喩を顯さんとし

て此觀に之を説く、鼓は無表裏體圓滿、是日形也云云」

○四從既見日已一了然而現 四觀成相三、一直釋

上の見日は成相なるも、未だ説て明了と云はざれば今觀成相と科す。又觀成とは、能所一體、眞假一同、生佛一如の南無阿彌陀佛を指す。秘決云日觀觀成は閉目開目皆令明了とは、具三心者は往生す、此を有目之徒とす云云。標心見日 文相は上の徐轉心等の定心とす。其故は下に制想除縁等と云て淨相現すと結すればなり。若し觀法成就の上の見ならば制想除縁の上に見日すべし。されば見日は能請定善教の方は定中の日なるも、上を三心と見る故に、今は三心を標して「標心」來迎の日を見る「見日」が即ち假の日觀とす。衆譬と見る故に。然し釋の標心とは有目に局らず生盲者も觀門の上に成する義を顯して有目無目等しく攝する義意を以て單に標心と云ふ

自力亂想を制し、觸目起貪の縁を除き、念々相續して他境に不^レ移れば日輪の淨相了然として現する也、念念不移は親縁にて不相捨離の義。淨相了然^レは近縁の義、曰く無有出離之縁の義の前には三雲を隔て淨相了然として現じ給ふ也、現の字近縁の釋と同じ。制想、定善教の方は亂想の安心を制す、自開散善の方は自力の想ひを制す。此制想に就て楷記一^二思惟正受の問答二解^一云可見 ○又行者初在定中一^レ故名邪也 二示用心

觀門の道理を得れば定善も修し得べし、機進まば定心を得て淨土の境界をも見らるべしと、定心の功能を出す。縦ひ有るとも眞極と思ふべからず、故に又と云ふ。定中とは、楷記思惟と云ふ。見此日は淨相了然の日。三昧は正受三昧とす。下に不思議とある故。定樂、輕安の心にて只受樂のみ有るを云ふ。内外融液等 諸佛の境と我三心と相應して心境並亡し凡聖一如にて、我動作も來迎と顯はれ、行住座臥他力に顯はる不思議の境なり、好須攝心等 行門の貪取を生ず可らずと識むる也、自力の法を愛して貪取すれば 退慢の心起ればなり。若起貪心楷記の邊に水觀に通ずとは他筆抄と同意也、日水面觀は一分の譬喩なれば能詮所詮を叫す義にて、舉て日水を等しからしむ、曰く日水の假が能詮と成て所詮を顯す。又觀門の定散の法が能詮と成て、所詮日水衆譬の覺體を成する義也、淨境即失、心境不相應なれば攝取不捨の利益を失す。或動或闇等 已下は貪取の過にて失定の先相とす。或動已下は煩惱を嫌ふ方。或青黃等は善を嫌ひたる也。見此事 若し自力なり煩惱なり起らば即時懺悔せよと勸め給ふ。自念言 向佛念言して即懺すべしと也。即自力安心等貪心に依て淨境動滅すと知らば、自力の心を捨て觀門に住せよ、觀門を離れ

ては凡夫の安心正念無れば也と云云 既知此等自力行門に依て此過起ると知らば其を捨よと更に初心者を誡む、私記抑攝二門にて辨す可見、已下諸觀等、後の諸觀に例す、曰く前に得失を辨するも未だ邪止を明さず今は諸の邪正得失に例して其を示された、問邪止を辨する經文は地觀にあり何故今此下に釋するか、答經は眞觀に従ふ。釋は義通なれば不相違云云 楷記一廿五參照。

私記意云一丁十三觀具足觀にて眞假一同なれば地觀を引上げて釋す。此れ日觀の下に十五觀を收むる意と見られた。即ち法界を衆譬の體と語れば假に至極すれば也、又觀念にも配し得る委は私記可見觀日見日 觀門義一廿五 四句分別

一、觀日不見日 住自力心 修日觀人 盡千年眞境不成若し現するも魔の所現 遂に貪心を起して失境す。

二、不觀日見日 得他力 不修定人 聞見一同の故不修日觀なるも見の分ある也

三、觀日見日 得他力 修日觀人 觀日見日の人

四、不觀日不見日 前項已外人 不修不見也

要するに觀日とは極樂瑠璃地たる光明等の相を知る事なれば、たとひ觀日して見日すども日觀は慈悲の境、所詮來迎の覺體と知らざれば見日せざるに等しく、心境相應せざる也 餘雜境等 觀日見日の後に 日觀成就の力を以て餘境を見るは邪に非ず、今邪と簡ぶは觀日不見日の前に餘境を見るを邪とす。又自力の心にて觀日するは經意に叶はざれば邪とす。

三總結示

上來日觀に三識知あるも第三を正意として結成す、私記に惣讚とは使人欣慕の故亦得たり。問三義中第三釋を以て結するは如何。答第三義日觀の本なる故、第一は只指方のみ、第二は彼土の眞相を觀す。第三釋正しく彼土の光相等を知るは當觀の本意なるが故也、又云方處を知り業障の三雲晴れて所詮の光明顯る。今邪正を差別して他力に歸するは所詮の光明ある故光明識知を出して結釋す斯とは日觀を指す。娑婆之閻宅等 業障識知とす。無明所感にて生死閻宅也。此方 譬喻の異名朗日等 光明識知の意、當觀は眞假中假を表面す、遠標於極樂 方處識知の意、遠標 日を以て娑婆の能譬を造り、彌陀を以て極樂の所譬を造り淨穢を分別して遠標極樂と云ふ。

○五從是爲已下總結 五總結

○上來雖有五句不同廣明日觀竟 三結 日水滅罪の有無に就て楷記新記等委說す。主點は日水の依正は總假觀なれば有を正義とす。第三實地に義罪を説て眞觀にあらしむるは全く假觀にもある義、若し無くば日觀を説いて何の益かある。日觀は諸觀の標的なるが故。

◎水 觀

日觀は指方なれば義依正に通ず、當水觀は依報の總假觀を説明すれば名の次第ある。前は指方今は表記の方處次第、前は深昏暗今は亂想を止む明靜次第、前は知業障今は知惑障の粗細次第、前は空日今は池水にて天地上下陰陽次第とす 『楷記』 約教相、能人所入次第 日觀は能入の機相を明す(自身業障輕重等) 水觀は所入身土の體(彌陀能觀地輪等)

約安心、能信所信次第、日觀は信機、自身業障等、水觀は信法、曠劫等行。『新記』
山師觀門義に約理智、日觀は彌陀の智門、水觀は理にて此の理智の二に一切の法門を攝す。智は
報身日觀、理は法身水觀、法報次第と示された此説に依るべし。

問然らば法報と次第して水觀の理を先に説べし如何、答水觀の理法身を觀せば、能證の智を以て
直に悟るべし、今家他力は爾らず、理を直覺せず、報身始覺の智は我等の上に證得すれば、其報身
他力の智に依て理内の佛性は我等の力を須ひず、唯彌陀報身の智に歸入して不覺轉入真如門と、唯
我等の爲に報身始覺所成の智を以て本覺の理を顯し給ふ也、然らば此彌陀始覺の智無くば我等本覺
の理も顯れず往生も不成とす。故に法身の理體の上に報身能證の智を發し、法身の鏡裡に波浪（煩
惱）起る、其に依て後得大悲を發して、頓入火宅應化の慈悲を垂る故、日觀を先に説きたるなり、
是三心は報身の智に依て（日觀）成立すと顯示する意と可知。

問日觀は依正の總け觀、水觀は依報の總け觀とは如何、答日觀の依正とは我等已開の日は穢土の
無量壽佛の體である。是れ依正具足したる平生の信仰とす、即ち至心信樂の機の上に成する佛なれ
ば、領解の當時我等の心想に入り給ふ。爰に於て平生我等能證の智と所證の佛と一致融合したる佛
なれば我等も即佛體とす、其體より顯れて南無阿彌陀佛の名號となる、之を依報とす、法體より云
へば正報とす、されば極樂の依正は南無阿彌陀佛より外無しとするを水觀とは云ふ。日觀は我等の
體、水觀は我等の爲の依報、依報は我等の平生を助るもの、助は慈悲なれば、即彌陀は平生に大悲
を以て依報と成り、我等を助け給ふ。是水觀を依報の總け觀とは云ふのである。

○二就水觀中亦先舉次辨後結即有其六 二水觀三

一標

亦日觀に對す。即有其六、水觀依報總假觀と云ふ時智惠とす、前六觀を水觀の智に收む。單に
水と云へば局れど、假と云へば一切万像皆假に收まる也。

經文は辨結の二あるも先舉は有無不定、釋に舉辨結の三悉くあるは十一門料簡の如しと知れ。

○一從次作水想——總標地體、二釋六、一總標地體三、一標

當觀別に告命無きは日觀の告命に合す（亦私記^廿參照）故に當觀にて繫念一處想於西方の意あ
り、日水地は具足觀なれば日觀の告命を下二觀に冠らしむ。先舉は新記の釋可見

總標地體 上來水水瑠璃の三の觀想を取て總標地體と科名す。就之不審あり、水觀なれば水體と
標すべし地體とは如何、亦假日の次に真觀を説べし、正報の説明の下には第八假、第九真と次第す
亦水觀中に三種莊嚴を説き是爲水想と結するに、釋には娑婆の假水と瑠璃の實地とを合し、總標地
體とする等、幾多の不審あり。

此等に對し深草抄三義、楷二義、秘決二義、私記觀門義等委釋あるも、要點は真け一同を明すは
ありとす。而し一同と云ふも、西方不遠眼前境界、彌陀在近我性之心蓮等と云ふに非ず。淨穢真け
各立し、彌陀願力の故に眞の功德が我等亂想の凡夫の爲に假に近く成らせられてあるを真け一同と
す。故に同じ假と云ふも日觀の下には真け各別し、假（娑婆）を以て、真（極樂）を示し、水觀は
假を以て真けを示すにあれば、真け一同は全く水觀の所成と知れ、爲に觀門義^{二初}水水瑠璃ともに
地體なりと釋されたれば、地は佛の所居、衆生を指して地と云ふ。謂く佛は十方衆生と誓ひ、至心

信樂の心水の土に正覺成し給ふ故、佛は我等の心水が悟の場所（所居）である。然らば佛所居の地其地は平等にて穢土の如く高下無しと知らしむるが水觀にて、水は衆生の心（信仰） 水は佛正覺を成じ給ふ所居の土なる故總標地體と科名して、我等の心水を平等に觀する處を、佛の方より地と云て平等の理體を地體とは云ふ。今其平等の地體を顯すが水觀なれば、眞假不離生佛一如して標地體とし、是爲水想名第二觀と結す。爰に於て衆生の心水と、佛正覺の地體と内外映徹するをば、水想を以て示し、佛慈悲の平等たる事をば水觀を以て示されたるものなれば、地體と科名された深意可仰。

○問曰前教觀曰一瑠璃之地也 二釋二、一直問答標地體三、一觀水所以

已下三問答、第一觀水所以、第二相似分齊、第三修觀方法とす。第一問答の大要を辨せず、問意は先の日觀三識知で依正具足して不足無し、今水觀中に又教て依報ばかりを觀せしむるは何等の理由なるか、又譬は多々あるに水を指定するは如何と問へり。答意は先に依正具足して觀日せしむるは他方大悲の義、亦方處光明の義顯れて、其上に彼土は穢土の如く不平等かと疑問あらば、平等也と水觀を以て答へたる也。又無盡の喻中特に水と指定したは、日は智、水は理なれば此理智の二で一切を收むる意とす、即ち一切の觀門を眞假俱に譬喩の法として弘願に歸せしむる意である。業相等、問は業障識知、答は光明識知。答曰等、文意可見。日輪常照等、日觀も極樂を標す、水觀も彼地を標す、此を譬喩とし弘願を顯示する觀門の法と可知。但以已下、日水の二を以て唯觀門とする所以を明す、先難意の如く、單に此二喩を執るは、是れで過不及無し、一清淨光明、二堪然平

等の二にて、（光明の智）報身。平等の理（法身）理は智に依て顯る故、光明を先に表して報身を明す。此報身の智は理を顯示す、此理湛然平等也、此を水を以て説明された。

丘陀 問凸にて入天 丘三惡（陀）を表す。

高下 六道差別。馬牛 水は動なれば高下差別あり、靜なれば能平なり 己下知るべし。

○又問曰此界水一輪之映徹 二結相似分齊

問は全喩、答は分喩也 又問中遮情（全喩情）表德（心水佛因地）の二あり措記三見よ。

未審の二字義多含、水は全喩ならば、水に濕もあり且つ軟もある。又水が氷るも解くれば元の水此等を喩とするか未審し、水想のみ取るべし水想を取は如何、又彼地は能同、此水は所同か、此水能同にて彼地所同かと重々不審ある故、此二字を置く。

又秘決 二義、極樂寶地を娑婆水と作す意と、娑婆の水を極樂地と爲す意と云云可見

要するに水觀は眞假一同を説て假を以て極樂を示す故、穢土の地と水との二つの假を以て眞假一同して極樂を顯す。先の問答に水にて可平を示したり。今問答は地と水の功徳を比較すとは、娑婆の地は高下の失あり、彼岸は平等慈念なれば能平也、此界の水は濕軟がある。彼岸は常住不退堅固也、又地は載養、水は生潤の徳ある、極樂寶地も此に等しと眞假等しき理由を識知せしむ

答曰一無高下 水の無高下を以て、寶地の生佛一如万機攝化し給ふに喩ふ。

又轉水成氷等は、映徹の喩なり。水の波浪起らば映徹の義無れば、氷想をして其を喩ふ。

此明彌陀等 前水氷釋成す。無偏 自利利他平等。正習俱亡 二障垢盡心明淨也 此所感の寶

地なれば内外映徹也、穢土は業所感なれば此義無し。地輪。即佛の心地にて、其地體は本凡夫の心水なれば、其水氷を騰して標地と科す、然に其心水動靜隨緣不定也、今此心を轉じて即佛心と成するは、水氷を轉じて瑠璃地と成するが如し。

○又問曰既教想水以住心——而令境現 三辨修觀方法二 初問

三問答中上來は總顯成就自正覺の方、今第三問答は別顯成就の位とす。第一能平、第二映徹は色相莊嚴、第三は自力の心に寄託して住身成儀を問ふ、答は其住心の法は日觀に説畢ると譲つて正しく譬喩の相を顯す也。

問水氷瑠璃の三觀法は同時異時が、答他流は異時とす、經に既見水已等と説く故云云。今家は觀想の實義に約すれば異時なるも、真假一同を示す咨嗟の説なれば同時異時の穿鑿無用とす。

○答曰若住心威儀前日觀中法 次答二 一明住心威儀

住心の方法は日觀の正座西向想於西方等の説に同すとす、而し日觀は業障等を知る。今は能觀の心地が亂想するは如何と當觀にて説明す 日記二七參照

○又欲觀水以取定心——即易可得定 二明觀水作法二 一略標

取定心とは觀門に依て行門を修すれば、機進まば今生にても定心を得るものあり、されど見不見皆佛恩、信じて見るとも憍らず不見にても恨まず、只觀門譬喩の法は弘願に歸して往生するを佛恩と信ずべき也。還は行門より觀門に還る。相似約機 此土の海水と彼土の地水と能似たる故。觀門に約すれば碗水と面鏡と相似故。約來迎 至心信樂の機の上に成する正覺の體にて生佛不離にて

相似也、一代定心では水觀は不成、觀門に歸して易成。易可得定 易中の易とす。又相似の境に就て秘決二五二七義可見

○行者等於靜處 二顯釋一 一先教事儀七 一居靜室

○取一碗水著牀前地上好滿盛之 二置碗水

一碗水。能緣心に喩ふ。碗は衆生。水は心水。取とは説を聞く意で、佛の水觀を説給ふを聞く事也。著牀前地上。當座道場の極樂也、即第七觀の華座で佛正覺の處、三心たる我等の願心とす、是我心即極樂とも云ひ得らる。地上とは我等三心の念佛にて即説を聞て我三心の地上に著く。滿盛は水邊無陰の婆、是亦自己無有出離之緣と信する姿にて、自力の陰無、佛體に投入する意とす。又私記 八丁右參照

○自身た牀上座 三座牀上

牀は華座にて報佛酬因の床と拜すべし

○當自眉間著一白物等 四著白物

自眉間。來迎佛也。韋提の接足作禮の頭上に住立佛現し給ふが如し。著一白物如豆許入。白物は住立佛。豆許は定散の除苦惱法、除苦惱法は我なりと現れ給へば、我等稱名すれば常に來迎は我身に著也。低頭。無有出離之緣の機也

○臨面水上一心照看此白處更莫異緣 五臨水觀二 一總勸誡

一節は一心に看る事を勸めて異緣を誡む。面は來迎、水は三心で我等三心の上に来迎を臨む。

二心とは三心の心と來迎の體と一致するを云ふ、生佛一如して白處の來迎を照し見よ、唯他力に歸して稱名し更莫異縁と云云

○又水初在地——乍見不見 二別指示三 一示初用心

水動く故面現せざるも現不現を念頭にかけず熱心に觀じて不休ならば動水中に面現すと、是散心中觀門成する意とす。初地面相不住等 觀門の心に住すとも初心ならば長短不定とす。事相上では長短等々五義三段に配し弘明他力に住するも、自力も爲に動亂せらるるに對すと云云

○此相現時——面相漸得明現 二示中用心

如上の現不を念にかけず。極細に要用し稱名相續し他力を可仰、之に依て水波微細になり、面相の來迎明現すると、是を散心中の行成とす。若し定心ならば水靜を待つべし、以て知れ散心中行成なる事を。

○雖見面上眼耳——水性湛然也 三示後用心

縱令水波は微細に爲り漸々に其を見とも貪取すべからずと用心を叙せられた。但縱身心已下は未須取、不須妨の二句を結成す。

○又行者等——不現明闇之相也 六明知心水

觀水を喻として自心の境現不を知る。行者とは觀門の行者を云ふ。椀水の動不動の相を觀し心水明闇の相を比知す。

○又待水靜時——水動故也 七投塵水

米豆東東 大中小、塵の相續に隨て心の動搖亦爾り、境の現不奉知せよ。又一義云自力門に依らば横は一時的に疑一心 亂想煩惱を沈定するも、縦に縁に遇へば又起る事ありと知らしめて、米豆等の縁に遇ふて更に波浪立つ事を舉示されたと知れ。

○言椀者——一同前日觀也 次合法喻

法は行門、喻は觀門、行門は難成、觀門の喻は弘願に歸して成立す。即ち水靜かに境現する事は凡夫の自力にては不成なるも佛力に依れば一に成すと合法す。身心水は法也 亂想煩惱、亂想は自力、煩惱は貪等也。細分すれば水起波は喻煩惱障、心日雲翳は喻業障、惑は内心にあれば心中の波に喻よ。業は身口に通ず日の外の雲に喻よ。前には五大を觀じ今は身器を觀ず、惑業所成若果の體なれば也。制捨は自力を制し煩惱を捨す。内外 内は迷障の心、外は諸佛の境界、又上の身心内外融液等も同也。恬怡は安堵の姿、能所不動寂靜也。又細想及等 上の知自心中水の意に合す。細塵等は上の米豆等に喻よ。

又行者等 示觀の意とす。何とならば上來の難成を示して觀門他力に歸せしむる故。

又境現不失等 邪止を辨じ前觀に同ず、然し假に眞を收むと、眞に假を收むとの別あり可知 水觀に就て 水結で水と成り瑠璃地を表す、今椀水は初心の方便にて亦大水に通ず、變相亦爾なり難想には池水を以て地を表す。されどこは一往の義、今水とは實は河水椀水等にて觀想するに非ず、今は水觀の說に依て誠知する分齊を云ふ。曰く我等能觀の心は我より起さず佛より發さしめ給ふ。見水澄明 本合明了の說を聞て、佛の大慈は平等にて水の如しと信知し、我心水（信仰）に、

本願所成の大悲水を與へ給ふ。我身の椀器に大悲水を收て他方に歸すと、想念するを水觀とは云ふ鏡と云ひ椀といふも無有出離の喻にて鏡椀其物は無分別、これ無有出離之縁の機とす。而し此中に入る水は平等大悲の覺體より成せられたる水と信仰すべきなり。

○又天親讚云——無邊際 三引論二 一偈示分量
引論文は總標地體と體の義あるも量の義無くば論文を引て助成し以て酬因の報土たるを辨明す。今廿九種の莊嚴は一法句の念佛より開く、地體衆生の心水が佛正覺の地體なれば念佛に廿九種の莊嚴を收むるべきである。

觀彼世界相 彌陀無漏身所成を觀す。勝過三界道 三界の果報を超越す。究竟は無數量、如虛空無體と云に非ず無所得無戲論言語同斷の無生界なれば遍分無しとす。觀門義は縱の功德、廣大等は横の功德と釋す。他筆抄は諸佛即彌陀通別一體とす。楷記は十八圓淨を明し通別眞假一體、形體性を釋明す二六丁參照

○此即總明彼國地分量也 二學論文結成土體
總は廣大無邊際に對し、娑婆極樂通別一體を總とす。即ち無邊際也。淨穢各別せば有邊際也、而し各別とは凡情のみ

○二從下有金剛——地下莊嚴即有其七 二地下莊嚴三 一舉科
○一明幢體等は無漏金剛 二釋義細分七可知
此界に三輪地下にある如く彼界亦寶幢（地下）を以て寶地を繋けたり。而し其體報佛の無漏智よ

り成するが故體亦無漏也、經文下有金剛七寶金幢の文を釋す。金剛の辨明楷記二丁一の如し。

二明敬地相顯映莊嚴 經文敬瑠璃地を釋す。華藏世界は蓮華にて佑止し、極樂世界は寶幢を以て佑止す。華藏と極樂と同異あるも實は同也楷記二丁三參照

三四方稜具足表非圓相、八方八稜（角）具足し八葉蓮華の如しと。
四明百寶合成量莊嚴沙、下贊云地下莊嚴七寶幢、無量無邊無數億の意、經文一一方面と云ふ。
一一の字の意味で無量を示す。

五明寶出千光周無邊之際 經文有千光明無邊之際は廣大無邊際の句を出す。
六明光多異色照他方隨機變現無時不益也 異色は八万八千色。照他方は通照十方也。變現とは經說無くも攝化十方は常に變現の意ある也。

七明衆光等 衆光は八万四千色。散彩 映瑠璃地如億千日。映絕億千の日なれば言語に絶す。
新往者 念佛の行者也。今日の凡夫今知識の讚勸に逢て領解する分齊なれば不可具見也。經文は觀者に約す。釋は往者に約す。觀者即往者なれば經釋同也、又見益は生後と見る義もある。二義併用せよ。

○讚云地下莊嚴——入西方 三說讚三 一讚現益 文解可知
○又讚云西方寂靜——罪皆除 二讚當益
西方は前勝神所入の西方とす。寂靜無爲は涅槃の異名。畢竟は究竟の異名。逍遙は遊戯の異名。離有無は凡夫生死の有に住せず二乘涅槃の無（沈空）に住せざる中道第一義諦無住涅槃也。大悲は

利他。薰心は自利、互に薰じて遊法界す。分身利物等、此土出現利生は俱に凡夫の出離にありて等無殊云云。或現神通已下、利物の相を釋するに三乘利他を擧ぐ、神通は獨覺の利他、說法は聲聞利物、或現相好は佛の利物、是れ一往の配當で實は互通す。群生三義、一他方衆生、二本國同往生、三觀行者減罪

○又讚云歸去來——涅槃城 三讚勸歸

晋朝陶淵明の古事を引て諸子を勸誘し共に本家に歸るの辭也。魔郷等、魔は障者と譯し能く出離の道ヲ障る也。陰病死の三は自身に具足し天魔は外に在て障惱す、五欲の網を張て四生の類を覆ふ故總じて魔郷と云ふ。此魔網を出るに自ら制する能はず、聖者冥資に依らざれば六塵の妄境出ること能はず。畢此牛平等 專心念佛畢命爲期、捨此穢身即證彼法性之常樂すべき意と可知 他筆抄二十丁私記二、十三丁等參照

○三從瑠璃地上——顯殊殊勝 三地上莊嚴二 一舉科

總じて淨土莊嚴の殊勝を顯示す、此一句中間に在て地下虛空の上下に通ず。三種は此地上莊嚴より殊勝となる。地上は彌陀報身の體なればなり。

○此明依持圓淨——無漏爲體也 二釋義二 一總釋二 一釋義

問依持圓淨を先地下金幢の下にせず、此下に釋明するは如何 答地下虛空は依持の義あるも圓淨の義なし、今地上の莊嚴を明せる故依持圓淨の義具足すれば顯殊殊勝と擧げ其を委釋せんと四分類す。曰く 依二義 一能依（七寶池林等）二所依（瑠璃地等） 持二義 一能持（地是能持）

二所持（池臺樹等） 圓は圓滿にて因果具足の義、上來能持の法は法藏比丘の修因圓滿、此に依て彌陀の能依所依能持所持の果報を具足し得らる、次下に此由彌陀因行周備致使感報圓明と云是也。淨は清淨、依持圓の義悉く清淨無漏なればなり。七寶 經の以七寶界。池林等 下四觀を指す。寶池所依とは一切寶幢等の莊嚴の所依となる。地是能持 寶地が一切莊嚴の能持なればなり。池臺等 惣じて依報を擧ぐ。此由彌陀已下圓淨を明す即ち圓滿の義。因行周備 因行圓滿。致使等果報圓滿。この圓滿にして有無を離れたる圓明明淨の義は唯佛與佛の境界にて、これを即無漏爲體と示された措記二十七は願心莊嚴の義を明すとし、上は標地體、等行障盡し瑠璃地映徹を感ず、今は莊嚴の萬行圓滿の報なることを感ずと示し、涅槃經を引釋す可見

○讚云寶地——讚善味 二說讚

寶地莊嚴無比量 總じて地上莊嚴を明す。上の廣大無邊際に對し地下虛空を攝して無比量と云ふ。處處光明照十方 經文に此文無きも光明名號で照十方の義ある。これ觀門を領解すれば文々句々攝取の意あれば、地上功德の下に遍照の義を述ぶ。寶閣華臺皆遍滿 六七八觀の意、經は光明臺の文とす。雜色令麗雜可量 經其光相好不可具見の意とす。觀門義二十一 玲瓏と玉漏にするは誤か、經文如華又似星月と云ふ故令麗と云ふ也。難可量は不可具說の文を釋す。寶雲寶蓋臨空覆兼て虛空莊嚴を出す。聖衆飛通百往來 正報の功德を擧ぐ、大經に依れば三輩化生の衆譬也。寶幢寶蓋隨風轉 再び地上莊嚴を明す。經の百億華幢の文を釋す。寶樂含輝應念迴 含輝は光明を含む即ち變化莊嚴にて此莊嚴も光明有て化導すること彌陀の如しと。帶惑疑々華未發 帶惑者を九品に攝するか

攝せざるか古來の一論である。鎮西は邊地胎生を立し經文の如く釋し諸行念佛二往生と立すれば九品攝不の論無し。山師の義は九品に攝するを正義とす。楷記二丁一等は攝不未決定、今は秘決他筆私記等を以て辨すべし。

觀門義云、疑心は往生の障也、其を今往生すと説は反て疑心を除くべし。往生極樂は五濁五苦罪惡衆生の爲なれば他力を以て一切の惡を滅し、一切の善を成すれば聞信者悉く往生す。此故に疑心不信者は不往生也、然るに疑心者邊地胎生等の往生すと説くと領解すれば、唯此法を聞くは悉く往生を成す、これ疑心往生と説は反て其を除く爲めと云。

他筆抄等は因行に約して一層明瞭に示されてある。他筆上二十丁曰疑心不生の三證文(三經文)を以て問ひ、答は本願に於て疑心不生 正因位とす。正因の上には疑心あるべからず。正行而、機相上に於て煩惱厚薄淺深ありて機を疑ふも悉く往生は決定すと云。又五智は本願かと問て、正因にては本願、正行は諸經に同す、大經は此因行を分別せず、總じて五智を疑ふ者は胎に處すと云。秘決は(全書一)觀門義の如く、此句は地觀の心得無疑の句を釋し眞假一同、地水平等と云。又他筆の如く因行を今生後生に區別し、今生は智惠(機)なる故心に疑あり。後生は慈悲(法)なる故無疑無慮也、今帶惑疑生は今生智惠なれば疑ひあり、即ち華未發は、亦今生にて不得往生の位を釋すと云。私記二十六委釋す。曰く是は無信にて生すと云事には非ず、無疑無慮の疑で疑惑の疑とは別なりと。彼は願力を信じて不疑無疑也、此は煩惱具足しながら生すと云ふことなりと云て次に惑疑を説明して曰く、惑疑は十煩惱中の疑煩惱にて往生する障礙の第一義諦である。此を出して餘

の輕き障礙をも具足し乍ら往生すと示すは、生すべからざる者の生ずるは願力の廣大を顯示されたるものと信すべし。

煩惱具足して往生する方面を——帶惑疑生華未發……………正行
本願を信じて不疑の方面を——無疑……………正因

後に多念義の邊地報十諸行念佛二往生を以て大經を根底とし觀經を會し、九品邊地と主張するを破し一家の正義を明す可見。並に深草義は要弘二教に約し、惑疑とは或信不信の機とし、要門教の所攝とする立義なり。是非は知らず後學一考すべし。

已上要するに本願に疑無くも機を願れば吾人在來の習慣上、過去に犯せし罪惡が念頭に浮び三伏尙寒の感がある、此時斯る造罪の我等たやすく往生し得らるやと一時的疑惑心生するは理の當然ならん。されど此疑惑たるや罪を恐れ還て自己の價値を自覺するものにて、此人こそ眞に佛陀に歸依信頼する者で、益々罪を恐れ他力の境地に到達したる人と云ふべし。山師の正因の疑は不許、正行の疑は一分許すと仰せられたも此意味であらう。此を法相上では何類異類の助業の疑ひ、或は五智を疑ふとも云ふのである。五智とは即報身如來の智で小乘持戒の功德、法華論誦等は合掌籠々位である。されど深心の位では無い、此深心に至て無疑無慮と成する故、先の疑は還て攝する也。此疑心者を大經には邊地胎生と云ひ、今は噓處胎と釋す。三心の位に華開、正行は華合、即便は一度華開すらも根根に上中下の別あれば、一小劫十二大劫等の華合ある。亦我等安心領解するも眞の見佛開法不能なるは今日の貌である。是を大經に邊地胎生と説きて因位を示し、觀經には蓮華化生

と説て、外相に約されたと知るべし

合掌籠々——身金色 淨土に生れ華に含まれて不開の姿を娑婆世界と云ふ大なる胎中に處するに
 喩ふ、華内に六劫十二大劫の時間あるも微苦無しと云ふ。見佛開法歴聖供養不能なる含華中の三障
 はあるも超過色界三千の樂也。亦淨土は微塵故樂隨智滅——大小僧祇恒沙劫、亦如彈指須臾間で、
 無量無邊の長時間も、亦如須臾と一瞬間に經過し即時華開て見佛開法し、三明六通具足して成佛す
 ること易々たり、合掌籠々喩處胎 蓮華内受生の貌、合掌は身業。籠々は閉目。喩處胎は穢土託
 胎の相を以て彼土蓮胎の相を示す。内受法樂無微苦 當得往生とす、曰く彼界に生れて觀音大士華
 開三昧を説き給ふ。内は外に對す。前句は外相を示す。今は内心の受相とす。法樂は世間の色聲香
 味等の樂に對す。此等に超過する故無微苦。合掌するも弘願に歸して往生無障なれば法樂とす。
 秘決には次の如く配當してある。合掌 悲智一體。籠々 慈悲未開。喩胎 未往生。内受 今生
 法樂 出離生死。見よ胞胎は今生にて立することを。又次に上々に三重生ありとし帶惑疑生は即便
 往生の三心、内受法機は當得往生の念佛。障盡——自開は即便往生の來迎。此三を知るを安心とし
 自開とは臨終來迎 (全書二六二) 參照「娑婆にて在住は喩處胎とす生身の見佛開法不能なれば」
 障盡須臾華自開 障盡は下品に約すれば十二大劫にて晝夜十二時なれば須臾と云ふ。又華台する
 も實に往生の時不合なれば須臾とも云ふ。自開觀音開花三昧の力用にて他力を示す。耳目精妙紫
 金色 天耳天眼を得て精明となる。而して第三願に酬ふて身金色なり。菩薩徐々授法衣 自然得衣
 の願意を示す。光觸體得成三忍 得三法忍の願意を示す。即欲見佛等 成三忍の所得を明す。

法侶は二菩薩。入大會は見佛開法自在の姿

○言金繩已下——餘寶作道也 二別釋

以黃の二字を略すは繩を以て體とすれば也、黃金作道狀似金繩也正しく金繩界道を釋す。是れ道
 と地との説明で、道は出離の大道、地は四十八願所成の地、金繩を以て道を作るとは地體を明す。
 即ち道とは娑婆より淨土に通ずる道で、娑婆の水を以て總標地體と明せり。此道は無上道に至る易
 行の道で其を繩にて明すとすは、慈悲智慧をヨリ合して作りたる表示にて、衆生念佛の願と、佛臨終
 來迎の行と不相捨離を成じて往生の大道を作る。又娑婆の水と極樂の地とをヨリ合し眞假一體明表
 す。或以雜寶爲地——三寶作道 或は多含の義で以黃金繩の經文無量の義あるを明す。雜寶爲地
 瑠璃作道等、是れ種々ある意、觀門義は繩相多き事を釋すと科す。

如是轉相已下 寶珠道其相無盡なるも雜亂無きを表す。經文の分齊分明の意。

行者等莫言——作道也 上來莊嚴の相を結し行者の徧執を除く、曰經文以黃金繩と説て文の如く
 ならば六八願所成の土に非ず、されば我等得生の土にあらざるかど固執するも、今經の意を得れば
 悉く願力の土にて往生の土なること疑ふべからずと。

○四從一一——止明空裏莊嚴 四明空裏莊嚴三 一標科
 ○即有其六一明——六明——寶樂之音 二分文釋

莊嚴無邊なれば今虛空莊嚴を明す。秘決事相釋は、裏は表に對す。表は來迎、此を示さんと虚空
 の莊嚴を明すと。一明寶出多光 幾多無盡の莊嚴も根源は光明(念佛)より出すと。多光は經文五百

色光也。二明喻顯其相。經文其光如華又似星月の文、光空中に昇、紛れたるこ。花の如く又星月の如し。楷記二廿二元照疏引云 其光從地 昇空故如花 從上照下 故如星月文
三明明光變或臺 經文懸處虛空成光明臺也。四明明光變或於樓閣 樓閣千五百寶台成の文五明明光變成臺於華幢 幢は幢柱で華を以て莊りたる幢也、於臺兩邊各有百億幢の文、變相中央段參照。
六明 經文無量樂器以爲莊嚴也、光變樂音は經文無きも寶樂には必ず説法の音聲あれば下の經意を示す。

(一)又明地上——常作此想 三總合釋

此下にて總じて前六義を述する故又と云ふ、曰く虚空莊嚴は寶地より空中に昇りて種々の虚空莊嚴となる。變相中央參照せよ。佛以慈悲等、上來喻の本意他無く唯凡夫救済にあれば慈悲を以て説くなり。寶地衆多等 再び無邊莊嚴の相を釋す文意可知。

(二)五從八種清風——説法之相 五樂音説法三 一標科

○即有其三一明——恒沙等法 二釋義

八風とは他筆抄楷記可見 他筆は不寒不熱等の八徳の義とす。觀門義は四倒四眞とし、天台の八方風と云ふを破して、導師の本意四倒四眞の八風とす。四倒(常樂我淨)は能斷、四眞は所斷にて能所並舉す。又秘決は初觀より八觀までに配し念佛の一法を成すと云云。(全書一 二六二)
一明八風從光而上 光は光明にて即念佛なれば念佛より八風を出す。經文八種清風從光明出なり。
二明風光——發音 經文鼓此樂器等 禮讚には八種清風尋光出、隨時鼓樂應機音、風光とは風は

光より出れば風即光也。三明明顯說四倒四眞等 經文演說苦空無常無我之音也。四倒(有爲)外道の常樂我淨。無爲(小乘)の苦空無常無我、今は無爲四倒とす。四眞(小乘)の苦空無常無我。大乘の常樂我淨(四徳)を四眞とす。秘決は定善教散善教に配す可見。恒沙等法 萬法を此内に收む、又寶地觀に波羅密を説く、眞假一同の取意せられたとも見らる。

○讚云安樂國清淨——大寶海 三引論讚

無垢輪は説法の異名、一念及一時等極樂は見色聞香悉く増進佛道利益衆生也、讚佛の佛は阿彌陀佛也、諸佛とも云ふ。諸佛同體の功德は彌陀眞實功德の所顯なれば像觀の如くに見るべし、私記二丁右論に讚諸佛功德、今は讚佛諸功德と諸字上下あるは如何と問て、答に諸佛とある時は諸佛、佛諸とある時は別所求彌陀一佛にて論は通別不分して廣く諸佛功德を讚じ、導師は別所求面、論は總願の方 疏は別願方と云云 先の觀門義は傍正の意と可見。大寶海は福智圓滿の義也。

當觀に局り讚文多大なるは欣淨の土を示觀に領解し、其極樂をば當觀に瑠璃地と説て三種莊嚴を明す。今其を見て歡喜するを無生と云ふ、歡喜とは讚歎の義なれば當觀には讚文多し、又三種の莊嚴は觀々にある意なれば當觀のみの歡喜讚歎にはあらざれば次に廣明水觀とありて、廣の字は觀々に通じたる言と可見

○六從是爲下總結 六 總結

○上來雖有六句不同廣明水觀竟 三結

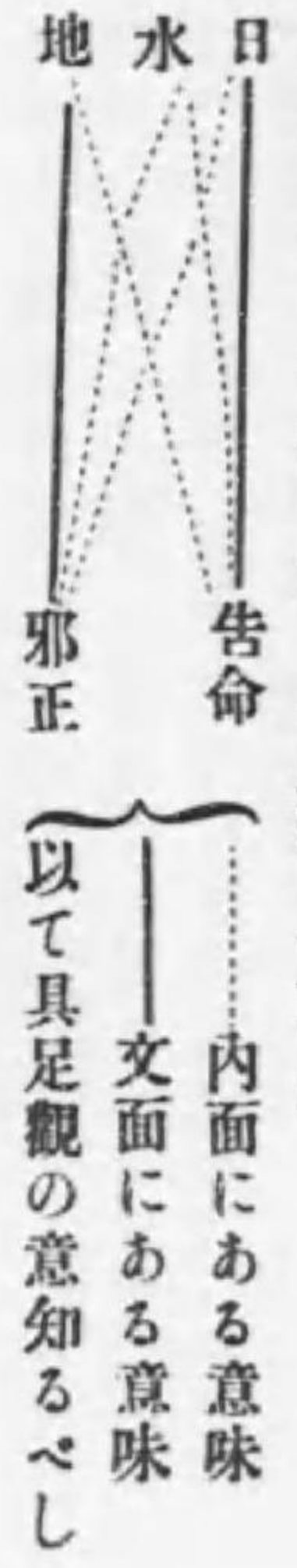
三種莊嚴を説已て水觀を結するは、無漏所成の三種を水觀に收て、極樂を娑婆とし、娑婆即極樂

と結する意である。秘決(全書一 二六四)云第一科の總標地體は、娑婆の水全分を極樂地と云ふ、是爲水想は極樂の地全分娑婆の水と爲る應知云云 以て知るべきなり

◎地 想 觀

寶地とは別願所成の極樂寶地で、欣淨縁に於て我今樂生と別選したる土體を開顯するを寶地觀とは申す。此體をば水觀には無漏の眞水及び亂想の心水に説き入て眞假一體の義を明し、眞と云ふも假と云ふも俱に平等なりと結し、而も其平等觀より差別觀に移て寶地と説く、此寶地觀たるや別願所成の寶地にて、觀行成就したる眞假一同の寶地なりと釋明するを當觀の大要とす。是れ水觀に説明したる地の外、別に極樂の寶地無くば水觀に其觀成を明さずして、當地觀に到て其を説明し、而して眞假一同を以て地觀觀成の意味とす。爰に於て水觀觀成の外別に地觀ありや、答無しと云ふ一論あり 論義抄委可見、又一家に日水地の三觀は具足觀と相傳すそは

日 寶地の光明を説く 體 別所求 所觀 能所一 所求
水 寶地の體を説く 用 地 思惟正受の見を明す 別去行 能 觀 去行 願行具足とす
又告命邪正等を説相に依て具足觀に互せば



得名 地想觀 下の寶樹觀等に准せば寶地觀と云ふべし、上に准せば地觀とすべし互顯か、又云地とは眞の寶地、想とは三心にて上の水觀を指して想とす。上の水觀を持來て直ちに地觀とする故、眞假一同して地想觀とは示す。そして上水觀の三種莊嚴の觀成なれば、其莊嚴には已下の四觀を收め眞假一同せば一切莊嚴所依の體となるが故に地想觀とは云ふ。地觀は眞觀なれば、玄義釋名門に瑠璃地をば眞觀の中に收められてある。又當觀に寶地の相を説かざるは、地觀とは大要先辨の如くなるも再記すると、十六觀は一一各別に觀じ修行せしむるに非ず。總じて極樂の依正通別眞假の功德は悉く弘願の相を説て其弘願の體に歸するを目的とす。爲に水觀中に眞寶地の相を説て假觀に攝し其假觀の相成するに寶地觀の名稱を立るは、眞假俱に弘願海に歸せしむる意を明すためとす。

○三就地想觀中——即有其六 三地想觀三 一標

先舉の文無し、第一科の此想成時の一句を先舉とす。

○一從此想成時者正明結前生後 二釋六 一結前生後

此想とは水觀々成を指す。但科にて釋義無し、結前生後とは前の假想を結し後の眞觀を生ず。一句の文なるに従者の二字あるは下の一一觀之不可具説まで收る意、其故は大科を擧げ其中より即有其六と子科にし正因正行とす。これ此想成時の一句より下の六科を開く意味も見るべし。問其は何の要かある。答水觀々成の外地觀無ければ、此想成時とは即上の水觀々成なれば此一句にて觀成の義顯はる。問一 觀之より六の子段と開く意如何、答此想成時と水觀々成するは唯觀相の分にて未だ思想思惟の位に至らず、上に三種を明すも所詮一切莊嚴は所依の地體をば明さず、爲に今正

しく眞觀に至り思惟を相續し、正受の位に三昧發得し彼國地を見て所詮弘願の體に歸入する也、他筆_{四十}參照

○二從一觀之——正明辨觀成相 二辨觀成相二 一舉科

觀成とは思惟正受の位、問先の水觀には思惟正受一向無きか。答一向無きに非ず、山師の御思召は假の位にて眞の位にも思惟正受はあれど、正行表にて次第する時、水觀は觀想の位、今は思惟正受の位とす。されど地觀にて觀成し、水觀に振り還て見れば悉く思惟正受の觀なるべし。

○即有其六一明——六明——何由具說 二正釋二 一正釋

一明心標一境 水觀中の寶地を指す、經文は一觀之の文、其を心標一境とは、前の三種莊嚴を一一次第に專注し慈悲の一境と觀する也。不得總雜觀之 總雜は他境を排す。只正因の位で唯慈悲の地觀とし一切莊嚴南無阿彌陀佛と觀するを云ふ。

二明既專等は經文極明了の句を釋し境現明了を明す、境現前とは、觀門の意を得れば見の義成立す。見成立せば往生の義成すれば明了と釋された。

三明境既現心閉目開目守令莫失 經文閉目開目を釋して守令莫失を明す。二明の明了 三明の莫失等は正受到似たるも仍是思想極成の位とす。又見と云ふも眼見では無く心見であるから閉目にも開目にも見らる。而し心見と云ふも定善自力行成し心眼得開の見に非ず、唯釋尊所說にて見て心法を信知したるを他力の見とし思惟正受の觀と云ふ。要するに說の上の見で、釋尊の所說を聞いて見も、經文所說を見て識知し領解する見も一同である。此識知する智的を散善に互せば定散俱に見の義を

成し俱に觀を成するを佛力不思議の觀見と申す也

四明身四威儀——憶持不捨 唯除睡時_{四五}の文を釋し憶持不捨を明す、子に臥し寅に起き其の外は懈怠無く憶念すべしと、一本に食時とある 楷記三_{四五}引諸釋參照。今云行往坐臥晝夜念せよとあれば何ぞ食時を除かん睡時佳なるか、事相では自力心を除く意としてある。秘決_{全書一}參照 意云睡

は失心、不具三心、覺は具三心とし眞假一同の深義の釋明ある。眞假一同とは娑婆淨土平等、善人惡人平等、閉目開目平等、睡不睡平等とす。其故は此水を受けて我身命を扶け此土を踏で安住すれば往生と今生と一同にて一分の疑心無く、今生現代に此地を踏み此水を用ふるは後生の利益を今生にて覺り得て受用する也と云云

五明疑心不絶——有覺想故、如此想者名爲粗見已下の文を釋し疑心不絶を明す。疑心不絶は定善の體、序題門に息慮以疑心等と釋したる定心也、諸師の散善は思惟、定善は正受とするを破斥し、思惟の位に定心を置て定善とすれば正受の義自ら顯れて、思惟正受は散善、互らずと諸師の意を破し給ふなり。即見淨土之相 見極樂國地を釋す、想心中見、思惟の位、覺想とは能緣心と所緣境の別あれば思惟の位とす。傳通記參照 新記は比量とす。經文には名爲粗見と説けり。他筆には二_四思惟は粗見、觀想、未及粗見、唯懸思觀位也云云

六明想心漸微等 若得三昧已下の文を釋し正受三昧を明す。想心は心王第六識、覺念は心所、想心はシタ畫、覺念は彩色の如し。俱に思惟の位、想心漸微とは水動漸微にして靜なる貌、例せば釜に水の一滴になりたるが如し。覺念離除は其一滴の水を除くが如く分別の位を除く、覺念も亡し能

觀も所觀も能所俱に無き位で無言説の境地を經文に、不可具説と説き是を正受三昧とし、又思惟無不足とも云ふのである。楷記三_丁 元照を引云三昧翻正定、或云等持、想成見地、不待作意、任運冥合、見境分明、如人學者初生、(思惟)後熟(正受)發無不中言思及、唯證方知故云不可具説云云。證於三昧、法體に契當す。彼境微妙之事、三昧莊嚴を見よ、山の三角を三尊と見たる能所一體の境地を云ふ。何由具説、不可具見の文を解釋す。

○斯乃地廣——恒如對目

二結示

結示とは地觀を結し水觀に同ず。地廣無邊、體量及分量を結す。寶愷は地下、衆珍は地上、轉變は虚空也。三種莊嚴不可具説なれば、爲に物を勸め衆生をして、心を傾けしめ恒に此事を憶持し目前に對するが如くならしむと、對目、一本に對日に作る。今云真地を唯假に同して(日觀)恒如對目とすべし。秘決(全書)參照。觀門義三_丁云、水觀に等しうするのみならず、上日觀は此地觀の光明を顯したるものなれば、此地觀を勸むるに日に對するが如く、又真假一同を成すと、日の字に釋す意同じ。

○三從是爲下總結

三總結

依正通別真假總じて今は地觀と名くる故總結とす。

○四從佛告阿難——隨緣廣説

四勸發流通二

一舉科

示觀の告觀と同じ、前二觀後三觀に此勸發流通無きは、前二は假觀にて(韋提欣淨の土を見て思惟正受と請するも)未だ正受三昧の觀益を顯さず、後三觀は地觀に准じてあるべしと知れ。約言せ

ば真觀の初なる故之を説き已下三觀に通せしむる意とす。懺與云、寶地是淨國之本、故別舉此一觀令持(觀)説(勸)云云是は一往の義、三觀は具足觀なれば互にあるなり。故に地觀を結(總結)して流通を舉ぐ私記二_丁參照。他筆上_丁に依るに示觀領解の體を地觀に始て説く、而して此體は十六觀にありと云ふ。問爾らば勸發流通をば地觀の始に説くべし何ぞ地觀を結し其後に説くか、答領解とは流通を本意とすれば流通の本に告命するのである。

○即有共四一明告命

二細釋四

一告命

阿難一人に告命す、或は二人に告命し又韋提一人に告命するは互顯互通なるも、各々其意味あり、上の日觀に韋提一人に告命するは示觀の本意を明す故に韋提一人とす、今阿難は未來の導師なれば特に勸説し流通せしむ

○二明勸持佛語等

二釋勸持觀益

正しく未來の爲の流通なることを釋す。佛語とは觀門の教即佛語、又教所詮彌陀名號佛語の體とす。觀地之益、滅罪往生の二益。觀念法門云、若得定心三昧及口稱三昧見彼國地了々分明云云

山師他筆抄云、正因は往生の益、正行は當觀の益也、經文に觀地之法とあるは、法は法式で觀地の法式は弘願に歸し往生の益あれば、觀地之益と釋された觀門義三三問答參照

○三明簡機堪受——急爲説之

三簡機堪受三

一述文義簡機堪説

二明下に觀益を舉げ此益を受けるものは如何なる機かと簡機す。これ經の未來大衆欲脫苦者の文を釋す。堪受は正行、堪信は正因、此得生之類中已發心者を簡取す、意は厭苦の心の上に信樂の信あり

るものは受法に堪え得る機なり、佛法は信爲能入の故に。

欲得捨此娑婆生死等、經の欲脫苦者の義を述べ堪受堪信の機を顯す。聞即信行者不惜身命。信行者の徳を明す。信は正因、行は正行、信行は信受也。不惜身命は勸持流通の意味で、末世弘經は怨嫉者多し、縱令嗔嫌迫害の縁に遇ふとも、若し其の機あらば急に爲に説くべし。法華經云。我不受身命但惜無上道云云、今佛が阿難に囑する意も此に外ならずして展轉流通された。宗祖大師も此意に依て立教開宗され遠流停止等の災害ありたるも一分も恐れず、還て朝恩なりと喜び給ひ益々不惜身命に教化しました。其御恩の程思ひ知るべきなり。今日の我等は唯決定往生と信じて、行ずるは自行の不惜身命、急爲説之とは、自行成ずれば化他具足す何とならば、既に身命を惜まず念々往生の意に住せば身命の讀く限り教化し宣傳すべし、此が現代吾人の展轉流通の本意とすべきであらう。

○若得一人捨苦——眞報佛恩 二顯攝益令報佛恩二 一略釋

勸持の理由を釋す。報佛恩は流通の元意、曰く信行者の爲に身命を惜まず宣傳し、一人の信者を得れば未來まで傳々不絶なり、されば一人の信仰家を得れば諸佛の思召に契ふ、此れ流通の本體第一義とす、此一人を度すが報佛恩である。阿難一人の傳説が今日に流轉して居るではないか。嗚呼一人の信者を得る事は難いかな。自信教人信の釋意能々信受すべし。

○何以故——稱諸佛本願意也 二釋二 一微釋

佛出世續於西化の本意、隨緣所説も悉く本願に結歸す文意可知、諸佛本願意とは 通別一體の佛

と見よ。已下報佛恩の理由を述べ。

○若不樂信行者——未可得解脫也 二引經示信不信得失二 一不信過

得失とは不信者には慚愧の心を生じ還て信を發さしめ、已信者には歡喜の心を生じ益々増進せんが爲に二文を引き勸誡し給ふ。清淨覺經は大經異譯、標記全文を引く今取意の文也。此中聞如不聞とは知識に従ふ人、見如不見は自ら經卷を見る人、此の二人は知識の説を聞き、或は經卷に目をさらすも他力眼を以てせざれば、見聞の效果無くして罪障未盡の人なり。未可得解脫 此等の人も他力觀門を聞かば解脫する故此意を存して未可得解脫と釋された。秘決云(全書一) 幾度遇ふとも地獄より來らば罪障未盡故不可信也、これを知らしめて信すれば、易信易行易念して往生すべしと云云此意可仰信。

○此經又云若人——必得生也 二引同經文顯其徳、

覺經は大經の同本異譯で、若人無善本 不得聞此經 宿世見諸佛(大經) 過去已曾 修習此法今得重聞 即生歡喜(覺經) 俱に同じく宿善なれば、多くは宿善往生を主張するも、導師正流は他力本願たる名號は宿善を論せず、聞位往生と立す、而し諸經の意は定散二善は經文所説の如く修行すれば出離す、然らざれば遠生の因となる、これ諸經は定散の外に念佛を説く、よし説くとも機根の不同に隨て其益各別なれば直因となる人もあり、遠因となる人もある。要するに他力に歸入せざれば自力難行に同するのである。今他力の意は三心具足者は悉く往生す。三心具足すれば一代八萬の法は悉皆此法の爲なりと信知し得らる。斯く信知すれば八萬の教に依て修するに門々悉く淨土

に往生す。况や宿善と成て此法を開き得るも疑ひ無し、故に入萬の教を指して修習此法と云ひ、又宿世見諸佛とも説く。今得重聞 即生歡喜とは他力觀門と聞くを重聞と説く、曰く自力行門を開きたる功果に依て、今觀門他力を聞くは重聞の義である。歡喜とは觀門は凡夫を攝すれば歡喜す。正念修行必得生也、觀地の法を説て他力弘願に歸すべきことを釋明す。

○四明正教觀實地以住心也 四明觀地法

經文説是觀地法を釋す。住心 三心なるも觀門に約して住心と釋す。觀地の法を説て聞て弘願に歸入すべし此則住心の本意とす、説を聞かざれば住心すべからず爲に觀地の法を説て聞くことを住心と釋す。

○五從若觀是地者——正明顯觀利益 五顯觀利益三 一標科

第四科（汝持佛語等）は觀地の益を勸説す、當科は其觀の利益を明す。利益とは觀門が弘願に歸して往生する益、是に二つある。曰く觀法の利益にて疑心息慮し定境相應の益也、觀門が弘願に歸するは他力を以て成することなれば、我等凡夫と觀法を修し得らる。要するに觀の益とは觀門減罪 除八十億劫等と、弘願往生 捨身他世必生彼國の二益である。其を即有其四と明し、第一第二は觀門減罪、第三第四は弘願往生の益也。

○即有其四一明——四明——遊於佛會 二釋二 一先分節

指法とは觀地の法。唯觀等 實地一觀の功深くて利益廣大なることを顯す。餘觀其益等しと云ふにあらず、唯實地一觀を觀するに此益ある。况や餘境具足して觀するに於てをや、事相上より云へ

ば唯觀實地とは慈念にて即極樂の地なり。不論餘境とは機の智恵を簡ぶ也。謂く極樂の實地を觀じ餘の自力の情を論せざる義とす。餘境等を見るは心境不相應とす。要するに實地を弘願の法體と觀すれば光明名號攝に一方なれば、機の一分を論せざるのである、又云實地とは念佛にて、念佛に一切の功徳を具すべし、此ト更に行業を論せざる意とす。經文は若觀是地者の文を釋す。

二、因觀無漏之旨、除八十億劫生死之罪の文を釋す。因觀等 除罪の因由を明す。曰く無漏實地を見に依て衆生有漏の無始の生死を除て淨土に往生する也。

三、明捨身已後必生淨土 捨身他世必生彼國の文を釋す。是より弘願の益とす。

四、明修因正念等 必得無疑の句を釋す。修因は三心、正念は念佛なれば、無疑無慮定得往生と信すれば無疑の必要無ければ不得無疑と釋す。雖得往生含華未出 機方に具足する煩惱を云ふ。曰く本願に於ては信心決定して一分の疑念無く往生し得るも、機方に具したる煩惱の爲に暫く華台の障あれば、含華未出と釋された。これ正因（法體）より正行（機方）に還れば必ず此の正行の疑は

發る（往生の障とはならず）散心の凡夫なればなり、若得難疑者の五字を加入して可見、謂く若得難疑者雖得往生含華未出、含華未出とは來迎を得て正行を修する義と知るべし。

含華等を娑婆にて立するを國師の正義と知るべし。其の秘決（全書一）來迎は臨終を待つが故に含華未出と云也とあるにて知るべし。觀門義三八云過に付て華台を勸むと云云。私記二三十九品の意にて見れば、此義は第五の簡機なるべしと云云。又云同心の位は不得難疑、未回心は含華未出云云。此義は自力他力の上にて論定されてゐる。他筆上 修因正念は正因、不得難疑は正行とす。

意味別無しと知るべし。邊界と宮胎とは大經の説相で同一である。他筆六十云 問邊界宮胎何異有之故、答是一也、但華合形云胎生 不見佛開法是云邊界と、今同一なるものを或字を加へ二種と釋するは一人の上にて別々の見地で九品の意に合す、是又地觀の心得無礙の文に就て大經を照合された、曰く十三觀は一人の上にての所觀の境なるべし。されど觀門は其相種々不同にて大經の邊地胎生も此意なりと知れ。觀門義三九邊界とは願力所成の邊にあり。宮胎は蓮内にあるを喻顯すとこれ地觀は要觀なれば、一經の本意を顯されたと云云

秘決云 娑婆は旅の姿なり、是を證得の前には邊界と云ふ。又娑婆は諸佛如來法界身にて衆營の城（みやこ）なり。此内に宿るは母胎の中の如し故宮胎と云也と、見よ今家正意は此土所立なることを。約言すると邊地宮胎は大經では一處と見、一人と見たるも今或生等と二類としたるは九品各別に見る義、元より九品一機にて讀誦大乘の人も弘願の體を見、小乘の人も弘願の體を見、世善の人も其を見る體一なるも形は差別する也、今は此義を示された。（同じ南無阿彌陀佛なるも釋迦に約すれば觀門と云はれ、彌陀に約すれば名號と云ふが如し。）又秘決の如く佛は母なれば法界身也、其に合れて平生は止住したる貌として此娑婆にての所立と信すべし。或因大悲菩薩等、除障の縁を明す。觀音を大悲菩薩と稱す。開華三昧は菩薩の自證也、淨土論云開諸衆生游泥華故とは是を云ふ。變相には亦其事を續顯してある 可見。然るに說門義三九釋迦因位御名也とあるは示觀の體で體説の釋迦と仰せられた。其意は我等三心の花の開けた時釋迦止覺を成す。其迄は因位の菩薩であらせらる。觀音とする義は九品に望めて云ふ 示觀の體より云へば

釋迦佛なり。又開華三昧を觀門義に觀佛三昧とは三心の位に華開の義ある也

宮華とは正覺の華也、邊胎の二字を略して宮華と云ふ。即ち觀門の上より華合不同と説も皆開くれば弘願に歸入して無生を得る也、これを宮華開發の意とす。身相顯然 無生忍を得れば法身顯然也、法侶 觀音菩薩也、法身を體得したる菩薩を法侶とす。佛會 說法開導の場處にて觀音大士說除滅罪の處を指す。

○斯乃注心——更勸辨知邪正 二結釋前意

私記は總讀總結と科す意同じ。注心等 觀成を結成す。即滅等 滅罪を結示す。願行等 除疑を結成す。願行之業 他筆抄私記の意は願は南無、行は阿彌陀佛とは、願行に依の業で依主の意にて念佛正行の外は皆助業とする意。觀門義の弘願相應の念佛とは、願行即業の持業釋で定散即名號と見る意である。已圓とは、他力に依て實地を見る時に罪障皆滅して、他力なることを自身の上に見て満足す。今既觀斯勝益とは實地を結す、曰く上來の願行とは名號にて、此名號とは實地を觀じて觀成したる時顯る處の名號にて、衆生往生佛正覺の時に極樂も同時に感成し成立したれば、其土を見れば佛も菩薩も國土も皆名號の爲に成じたりと識知するを正見と、勝益とは申すなり。即ち勝益は名號得生の益で、觀佛三昧の益は念佛三昧に攝す。何とならば實地を觀じ念佛三昧と知るは正見で、其位置に至らず、只實地の位に留らば邪觀とす、されば所說觀佛の位の邪正得失は念佛三昧に攝するを正見とは云ふ也

辨知邪正 問第六科の邪正を此下に引上ぐるは如何、答亦下には日觀を引上る故に邪正を引上る

也。問日觀の邪正を辨する意如何、答若他觀者名爲邪觀の文日水に無き故其を日水に通せしめん爲に論する也、意は上の勸持流通より名爲邪觀の文日水に互る也

○六從作是觀——日觀中已說

六辨觀邪正

作是 前觀相を指す、心境相稱(不得雜疑の故)は正、其反對を邪とす。但し其觀法も大小乗中の觀法ならば淨土往生の觀法にあらざれば邪とす、外道等の邪見の邪にあらす

前日觀已說 日觀の經文邪正の文無し、當觀の文を引上て示す故今日觀の觀に譲り、日觀已說と釋された、即ち日觀の觀日見は心境相應名爲止觀の釋文意なり、これ具足觀なれば當觀より義を以て釋舉したるなり。

○上來雖有六句不同廣明地觀竟

三結

◎寶 樹 觀

前觀は能依と能持とを總じて觀す、已下の三觀は能依能持を別して觀す、中に於て先づ林樹莊嚴を觀するは土地の所生は草木爲先の故に前觀に次で當觀來る也。又寶草觀無きは寶池中に蓮華を説かば今は略されたか。論註上十九寶性功德草 柔軟左右旋云云已上は楷記の説なるも文相一往の義で、文は法華譬喻品の意と 俱舍の相生の意に依るか、山師の義は寶樹とは東方衆生の機類とす。前觀は眞假合説し、今は眞觀とす。曰く前三は機を所依とし眞を説き、今は眞を所依として假を説く眞の初にて、前三觀では眞假合説し機法一體を顯すも法體所論にて機方に成せず、今觀は所化の

が法體に歸入し得たるなり。故に寶の一字を冠し寶樹と題する意は、娑婆の樹とはならずして極樂の寶樹と觀するは、我等往生の三心の機(樹)を法體に收めて極樂無漏の寶樹とする意である、爲に樹とは念佛で假は南無、眞は阿彌陀佛の行體で、即ち南無阿彌陀佛にて此寶樹の姿その儘が衆生往生の姿と觀じ同時頓起の寶樹とは申すのである。

樹は旃檀樹 多羅樹 曼陀羅樹等の別名を楷記に擧てあるも正義で無く、山師の意は樹の別名を出さず、無漏所生正覺樹と見られてある。正覺とは衆生の往生なれば、釋にも寶樹觀と云て別名を出して無い、強て云はゞ私記二三丁 今此寶樹者即爲彌陀佛 云道揚樹 正覺處也 と云ふ意を須ゆべし、尙此下に三觀の次第が列記してある。云樹池樓の三觀は寶地の上の莊嚴なるに寶樹を先に説は、先の日水地は不離にて具足觀の如く、今三觀も具足觀にて總觀に三識知を配當す。

寶樹——方處識知……廢立……親緣……至誠心

寶池——業障識知……助正……近緣……深 心

寶樓——光明識知……傍正……増上緣……回向心

に三觀不離具足觀す

是れ寶樹とは彌陀佛に執ては正覺樹にて俱時成就の時に親緣の義成立す、寶池：近緣。寶樓：増上緣等可知 私記三三參照。

○四就寶樹觀中先舉次辨後結即有其十 四寶樹觀三 一標

即有其十 秘決に十大文事と云ふ一節あり、曰く葉は圓滿の故に十と爲す、十は數の窮なれば圓滿と云ふ、地上に三あり樹池樓也 葉圓滿を以て寶樹觀成と爲す、故に大文を十と爲す也云云

○一從佛告阿難——結前生後

二釋十

初句は但科のみで釋無し。正明告命。眞觀の初なれば特に二人に告命し下二觀に通せしむ、日觀の告命下二觀に通ずるが如し。總觀名。寶樹觀の名也、總は私記三一 三義 第一義、寶樹とは七寶莊嚴と觀じ、又根莖等の七重を觀すれば總と云ふ。第二義は上水觀中に眞假一同と俱時に觀じたる、今樹池等、次第觀するも俱時總觀なりと知らせん爲に總と云ふ。第三義は、欣淨に歸して總觀と云ふ序正見說章提未來一同の意と云云 要するに總とは一代佛法を總と云ふ義で、根莖等の七重は一代佛教を觀する意、そして寶樹の體は先辨の如く衆生の機、此機縁に遇へば何れの法をも修すべきを顯して總舉と仰せられたと見るべし。結前は此想成已、生後は次觀寶樹の句也

○二言觀寶樹者重牒名也

二牒觀名二

一標

問二從觀寶樹者已來——と云ふべし、又者字を除く意如何 答楷記云今釋前後異なるは釋義無方に、廣大無邊際を明すと云云 秘決云經文者は語者にて助語、今者を除くは人者の義を明すと、故今樹を體と爲る也云云。

重とは先の次觀寶樹（水觀地上の莊嚴を牒する故）に對し重と云ふ。實義に約せば先水觀は衆生の心水、地觀は念佛にて、南無の心水に地觀三種莊嚴の行體を收めたる（機に法を攝す）慈悲窮極とす。總じて當觀は淨土中成佛悉是報身の行體に南無の機を收むる也、されど第三地觀の穢土中成佛を離れて、淨土中成佛の義無れば第三地觀を離れざる故、重と云ふのである。然るに依文の上は觀々差別すれば上の地觀を持來ると云ふ一偏の義は淺近なり。要するに一代觀成の法を又重て今經

の觀想と説示する故と云ふ。秘決云總舉觀名とは當觀の十の大文を指す。重牒觀名とは十六觀に互る、樹觀に此二重の意あると云云以て知るべし。

○言一一觀之——七行爲量也 二釋二 一總釋

言一一觀之已下を十の大科に入の意は、廣く一代に通じ所觀の境とすればなり。若入るならば當觀に局する事になる故、今は大科中に入とす。これ所觀の境として第七觀を攝す。第七觀を攝すれば一經を收むる意にて即ち大科に入の意もここにあり。

秘決云 上句者 言觀寶樹者是取窮一句故 一一觀之 作七重行樹想 此十字不取十大文也 是取放故者 淨土家 立菓宗 獨作七七四十九重 而納一切佛教也 就此寶樹觀者 料簡一代佛教之重 心得淨土家也 二六六

已下と云て——に至と云はざるは、至は後の科も亦皆正儀則を教る意を顯示す

生後觀相 後觀は一一觀之の文を釋す。相は寶樹の行相なり。又後觀は前後に對す。前は化前、後は今經とす。私記三五丁參照。觀相の相は經文に想とあるに今相とするは今經の行體を顯す。

即ち一代萬法を行體と明す故、心の字を除く所觀の境相とす 私記三四想者は思惟想と云て能觀の心に付く、如け所の境相に付く、今は寶樹の行相に付て釋生後觀相正教儀則也云云以て可知

儀則、寶樹觀と標榜し、觀寶樹者一一觀之作七重行樹相と説は、正儀則を説明したのである。即ち儀則とは七重の儀則である。實義に約せば、七重とは悲智の二門にて名號の儀則とす。則ち淨土の事を皆七重と云ふ。曰く一切萬法は悲智の二門である。此二門にて他力の行體を顯示す、六は

智、一は悲にて行體は南無阿彌陀佛、定散文中名號得生の義を成じ、一一の七重皆名號の儀則を教ゆるなり。前六觀の智恵に第七の慈悲を收め、悲智具足する意は當觀にある。寶樓中に華座あり、天童あり（變相では二菩薩）爲に第六寶樓に第七觀の慈悲を収て華座とす。今は眞觀と云ひながら天報にて正報に至らずと云へど、十方法界受用の依報なれば正報を收て、眞假一同名號得生の儀則を明す。故に當觀に儀則を説明したるは、結前生後は諸觀に通ずれば其觀相の儀則を明された。そして相とは所觀の境相で能觀の心に就く時は想とし思惟想と申す也。

摘要し再説するに、經文は寶樹の數を説かずして直接に一一觀之と云ふ、其言たるや簡略なるも其意最も廣し、世界既に廣大なれば寶樹も亦多數なるべし、之を總稱して一一と經文に説きたると釋明された。後觀とは一一觀之の經文を釋す。相は寶樹の行相、正教儀則とは七重行樹を釋す。

此明彌陀淨國——七行爲量也、經に作七重行樹想とあれば七重七行の寶樹と見らるも、釋より見れば寶樹寶林豈以七行爲量也とありて、七を行に付けず重に付たるは、淨土の寶樹は單に七行に非ずして、根莖枝葉等の七重具足の寶樹と知らる。私記 他筆 觀門義皆同じ參照せよ。

事相より見れば、彌陀淨國は三心にて至心信樂の機を成すれば、乃至十念の行體が顯れて我等の心想に入る。これ報身の至極たる三心である。豈以七行爲量也とは所化の境が無量無邊なれば、住む處の所化の人も無數無量で、豈唯七重のみならんや、無量不可思議で惡を作すもあり善を行ふもありて千殊万別なり。

要するに豈以七行爲量也は、前來云ふ如く人の疑情を破す。若し單に七行と云はゞ其に局る。今

は廣大無邊の佛法を海盡せん爲に七重と釋し、一代は無論、外道の法までも他方觀門に歸して往生法と成立する意味を加味したる也、又文相上では 觀門義云 七行と云はゞ寶樹既に數有て廣大無邊際の上に相應せすと云云。

○今言七重者——故名七重也

二別釋三

先釋七重

根莖枝葉等の七重皆寶を以て莊飾し、一一の樹國土に繁茂せりと。又楷記參考すべし。

或一寶等 寶樹の相種々不同を示し、寶不可說ならば行も亦不可說なり。されど寶は替るも根莖等の七重は一同なりと、秘決には一寶一樹は小乘乃至不可說寶を一樹とするは淨土の法門也との配釋あり可見。

彌陀經義 此書は未渡來とす、楷記には高麗に百卷ありたと云云。山師は「傳説に大經と見られ

てある。」論義抄は法事讚なりと、されど法事讚には七重の義無れば秘決の意を取りたるか、秘決には三重を以て廣く見て一代佛法味は、彌陀の慈悲にて造ると云云。これ諸法は彌陀に歸し根莖等の六は葉に歸す。葉より亦根莖を生ず、即ち無量壽より一切法を聞く、一切は縁に遇て修すべき機

相なれば、悲智二門（彌陀經義 念佛の法に歸するなり。故に廣論とは一代を收むる意也と云云 又一卷偽造の書ありと（楷記）了音抄云、成覺房山師に見せけるに、山師三分御覽ありて偽作也云云。私記三八然師の時代成覺房人唐來むるも無しと云云。今は秘決に依るべし楷記亦佳し

○言行者彼國林樹——而無雜亂 次釋行儀

林樹雖多

前豈以七行等の意。行々整直

縦横行々相當して界々亦不雜亂也。義意云彼國は至心

六十六

信樂の機、林樹は衆生で遇縁して法を修すべき機。無雜亂とは夫々得益するも雜亂無きとの意味に見よ。

○言想者未閑真觀——方能證益也

三釋想義

真觀とは真依を觀する義、自在未隨心とは真依なる故卒示に心に浮び難く必ず假依を須ゆべしと。問經に七重行樹と説は眞の寶樹也。釋に要籍假想證益とは何意ぞや。答水觀に三種莊嚴を假水に收め、凡夫に眞假無差別と教へたる如く、今も寶地上の寶樹ならば眞假一同の功德は離るべからず。當觀にも假想を籍する事あるべしと示された。他筆上三云云。水觀にて思惟の位には假觀を用ひ、正受の位には眞觀を用ひる謂れ顯れば已下の諸觀も此謂れあるべしとて、觀想を假觀とは釋し給ふ也と、以て可知。觀門義云。眞は假に對す。假觀とは觀門譬喩なり。譬喩とは依正二報の功德を廣義に説く弘願に歸せしめ、其上行を立すべければ眞觀の思惟正受は始て假觀の上に修すこと自在とす。其自在とは。示觀の見以不見皆是佛恩と云ふ自在也。

要籍假想等 要は必也、觀門譬喩は必ず弘願に歸入の道理に依て、必ず弘願の益を證すべしと。見よ正受を眞觀と云ふならば、閑と云べからず得と云べし。又想を思惟と云はば假と云べからず、方便と云べし。されば此下は注意して末釋を見るべし。但し楷記三に(寶地觀下)思惟は假想、正受は眞觀と分別して見るは非でないか。他筆觀門義の意では、假は思惟位、眞觀は正受位と仰せられしは、觀門思惟の位も止受に收て思惟の位と云はれ、弘願の正受も思惟も收て不離一體たる正

受の意なれば楷記(如く、一方に局るは非とすべきである。

玄義の上より再説すると、未閑真觀自在隨心とは前六觀にて未だ第七觀に到達せざる故である。又前六觀が眞觀で無いと云ふ意は、一代の觀成は今經の觀想なれば、兩會正説の上で云へば耆闍會は顯行緣までを序分とし、示觀は正宗、前六觀を流通とす。王宮會では前六觀は序分、第七觀を正宗とす、爰に於て王宮の時前六は序分で、第七正宗に至らざれば、前六は觀想の分なるも眞觀で無い。故に不隨心と釋す。又前二觀に對せば眞、第七觀に對せば假也。今は第七の眞觀に至らざれば依報の假想とす。つまり眞假一體で互に具足するも今は次第して云ふと知れ。爲に未閑真觀とは一代觀成が今經の觀想なれば一代の上では開示を蒙らず、第七觀除苦惱法を始て蒙る意で、此を他力とも云ひ、觀門弘願に歸すと云ふ。

未閑真觀は一代觀成の位で依報の方とす。これは正行面の釋意で、正因は内面に含まれて顯れざるのである。そこで一代化前小乘の益は前六觀に於れど、今經第七觀に至れば普得知聞の益を得る。爾るに文面は第七觀の益なるも、玄義の方面で云へば當觀滅罪と、第七往生益と一同とす。何故ならば第七の益は一經に互る故である。

方能證益、方は初也。益は普得知聞同昇解脱の益。識知するも聞くも機に依らざれば同昇解脱也。要は往生と滅罪の兩益を云ふ也。

○三從一一下至由句已來正明樹之體量 三明樹體量二 一標科 樹之體量、之の一字を加へて樹之體、樹之量と見られてある。經の一一樹高は量にて體で無いか

量は必ず體の上の量なれば義釋された。

○此明寶林樹——亦是無漏也。二釋二 一體二 一釋
諸寶林樹とは衆寶を表して體とす、即ち行體也。皆從已下は佛心を明して體とす、即性體也。意云 一一寶樹 極樂界中に遍して悉く八万由旬、これ有漏業より生じて大小曲直不同なるとは異なる。即ち無漏所生なればなりと。

○讚云正道大慈心——如鏡日月輪 二讚

彌陀無漏智より出生したる林樹は此の如きの不思議ありと二十九句の莊嚴成成する論文を引て讚じ給ふ。此中上二句に性功徳で性體を讚じ、下二句は形相で形體を讚す。

正道は無漏平等の大道、大慈心は善惡を簡ばざる無縁の大慈悲也。淨光明滿足。彼界廣大なるも光明滿足す。如鏡日月輪 光明圓滿なること鏡も日月の如しと喩示された。

○言量者一一樹高一漸長之義也 二釋量

此下極樂寶樹に生死漸長の相ありやと云ふ一論ありて無しと答ふ。一一樹とは衆生の體にて生者皆是阿毘跋致の意とす。經は八千由旬、釋は三十二万里は文相可知。深意は經は報身の相八千由旬釋は化身の相三十二相と擧ぐ、經の八千報身相好は、釋の化身三十二相を離れて成立せずと互顯す。問樹は非情、何ぞ有情に約するか。答次の釋意で知れ 曰く亦無老死者とは 老死は有情に約す。非情なれば無括粹義と云ふべし、これに依て三十二 八十は有情に約す。其說は秘決云極樂は一切万法皆菓の法門なれば一位とし、其長短を等しふし此を衆譬とし、婆娑は無常を示し盛衰を明

せば樹を以て之を知らしめ衆生に同じて衆譬を造ると云云。

亦無老死とは等量(平等)の義を明す。密義は彼界得生者は生死の相無し、拈粹と云はず、人に約せば牛者阿毘跋致の意とす。亦無小生者は上の老死に對す。初生無し無生の義とす。他筆上三下楷三十九下 四答可見。

同時頓起不起而起なれば頓起と云ひ、性に相應して起る故、生住異滅の四相無し。是亦一劫正覺の時、決定無上正覺と二十九種の莊嚴同時に成ず、又云 我等往生の時同時正覺を成じ給ふ其時を同時頓起とす。聲教等齊 淨土無生亦無別 究竟解脫命剛身なれば、衆生・佛と同時等齊して解脫の床に昇る意とす。如意然者 同時頓起の義を牒釋す。彼分位是等 彌陀の妙果無上涅槃即其真也。漏無生・界とは即是涅槃界なり。

豈有生の漸長之義也 正しく此義を成ず。此乃佛如來真實淨土 第一義諦妙境の相也。量を説く經文に體を出す意爰に顯然たり。要するに彌陀無漏智の所生なれば生死有漏の法とは異ありと信知すべし。

○四從其諸寶樹——即有其四 四明雜樹嚴飾異相二 一標科

雜は一寶一樹と爲すに對す。純雜對 經文七寶華葉と云ふは一華に七寶備へたり。是雜樹の義なり。葉莖等も例して可知。樹は林樹 嚴は莊嚴 飾は綺飾 瑠璃中出金色光等は、雜樹雜伽の義也、下に以爲映飾と説く故。異相は經の一一華葉作異寶色なり。秘決(全書一) 是此下に(華葉)一代佛法の至極を明すと云云參照。

○一明林樹——四明——而嚴飾之 二釋二 先四分節 七十

一明は經文華葉具足を釋す。具足は凋落無き意、大經に風吹散華とは不散の散にて、散じて不散なれば相違せず。

二明等は正しく雜樹の義を釋す、七重一一に衆寶を備ふ。經は一一華葉、釋は一一根莖等とは互顯と見るべし。秘決は經文此下に華葉の二を出す、意は一代は華と葉との二因に收て、今經の意一代に顯れたるとの見地で眞假一同の意味で釋されてある。

三明は雜飾雜嚴の義を釋す。經文琉璃色中出金色の文也、而し經文第二の文を引下るは、前を踏で後を起す。又秘決(全書一)能警所警眞假一同の釋明參考すべし。

四明は珊瑚は一切衆寶已下の文を釋す。 次讚二 一引經偈 佛諸等は種々事功德成就、無垢光等は妙色功德成就である。觀門義云 依正一同なれば依報にも利生の義ある也。

○又讚云彌陀淨國——而取悟 二白讚 四面垂條は大經に枝葉四布乃至周市條間の意、天衣は人天の天に非ず自然の義也、釋の寶雲化鳥等は經文に無くも義釋なり。觀門義云 惣相(寶池觀等)を以て是を讚す。

他方聖衆聽響の開心とは大經道場樹功德の下に云 微風吹動乃至其聲流布徧照佛國其聞音者得深法忍の意で、即ち十方淨土に於ける菩薩聖衆達の開心の事とす。

本國佛人 極樂菩薩聖衆也。經云見此樹者得三法忍云云、是れ淨土佛果の上に自開し他方聖衆應事供養の意を示す、今雜樹の德なるも尅體すれば見佛の義あればなり。故に觀門義此下二義とし、一義は衆生を指して本國佛人と云ひ、第二義では彌陀を能人とす。

見形 又二義あり 取悟亦由点あり、第一義の衆生を本國佛人と云ふ方では見形とは見は上に聽に對す。曰く衆生往生佛止覺の覺の樹形を見て同外解脫の悟を取ら、此意では取悟と讀むべし。第二義の佛を能人と云ふ方では見形とは見は顯也 形は十方衆生不取正覺を顯して衆生に解脫の悟を取しむべし。觀門義三十三參照

○五從妙眞珠網——樹上空眞莊嚴相即有其七 五明樹上莊嚴二 一櫻科 空裏とは上の莊嚴と相通す即ち今は七重の網樹上に覆ふ。

一明乃至七明光超上色 二釋(細分爲七) 一明球網 世間では魚網、今は衆生を救ふ願力の網とす。臨空覆樹 空は住立空中、樹は一切衆生なり。

二明網 即ち七重也樹上に重覆するを形容す。 三明宮殿多少 數を云ふ經に有五百億今は觀門譬喩の上に數を説も、實體は無數なれば多少と云てイクハクと讀ましむ。又五百億は五道衆生の意 宮殿は念佛の家とも可見

四明諸天童子 舟讚に化天童子無窮數悉是念佛往生人でありて、唯化佛のみならず聖衆所化とも見るべし。

五明 無價の寶珠をようらくとす。
六明 遠近とは經に照百由句と説けば分量と云ふべきに爾らざるは、下に猶如和合百億日月とあれば即ち遠近を釋して非量を顯す意とすべし。
一明 光超上色 世間最勝の色に勝る義、觀門義三十四超の一字を加へて光體を示すと、色中上者の文を釋す。

○六從此諸寶林下至有七寶菓已來

六明 林樹無亂二

一標科

○明其林樹——自然而有

二釋

林樹正直にして雜亂無し、そは選擇本願の故に、此界の樹木は花開き後菓ありて同時ならず、今華上自然有七寶菓で、七重俱時自然なるは、法藏因深に酬ひたる樹なればなり。即ち全性修起の故不修而修、不起而起、故に寶樹を見る者は即悟無生す。

○七從一一樹葉——色相不同

七明 華葉色相二

一標科

華葉は花辨で葉の義で無い。經文有百種畫とありて花びらに種々色どりある義 此を色相不同とす

○即有其五一——婉轉葉間

二釋

一明 葉量大小等無差別 大小とは經文二十五由句と説故、事相では大小は五乘差別、等無差別は今經に入れば無差別の意。

二明 下 其葉千色の文を釋す。

三明 下 如天ようらくの文を釋す借喻弘願の妙體は不可説なれば觀門に於此界眼前相似の譬説を

借て如天瓔珞の説明を爲す。如天瓔珞とは天は自然最勝の義、有百種畫の經文は又觀門の譬説を以て最勝を示す云云。觀門義三十五 參照 又秘決(二七二) 參照

四明 五明 等可知

○八從涌生諸菓——溢用之相

八明 菓有德用三

一標

菓有不思議德用之れとは三千大千の依正二報種々の相皆佛事を成する也。善惡の諸事邪正方法悉く佛果の慈悲と爲す、是れ淨土宗に一切を攝する也云云。(全書一、二七三)

○即有其五一——無不觀見

二釋(細分五)

一明 寶菓生時自然涌出 七重同時なれば自然と云ふ。二明 標菓相 寶菓の形相寶瓶に相似す。帝釋瓶の古事塔記三六 參照 秘決云 慈悲(菓は慈悲)は來迎を懷く、其形喻ふるに寶瓶の如しと

三明 下 旃蓋は幢幡寶蓋也。四明 三千等 娑婆三千界中釋迦一化を現す故佛事と云ふ。觀門義三

去云、娑婆は迷法、極樂は悟法。迷は悟に依て有り、悟は迷より生ず。諸有の迷法を悟て諸有の悟生すれば、悟たる極樂の一法中に迷の諸法具足す。此は觀門譬喻に依て弘願を悟り往生するものなれば私願中に觀門の功德ある也。觀門は譬なれば、娑婆の迷法を譬として之を説き、弘願は此喻

に依て顯るものなれば、觀門の功は弘願にある也。深草義に常に云ふ 自力功無し佛力に歸す、佛力功の體 願力と云ふ三重論は此等の事 國師の説に依るならん。

五明 十方淨土 前穢土の相なるに對顯す。觀門義三六云 迷法を並て蓋中淨土を現するは、觀門弘願不相離也云云。

彼國へ天無不視見 三十四願は見諸佛の願なれば今は觀境に非ず、見と欲すれば假に現す故に映現三千等と説く、秘決(全書一、二七三)云 娑婆の衆生法界の萬法を見る是也とは、菓は結果終極即ち來迎と見られてあるから斯く仰せられた。

○又此樹量彌高——常作此想 三結

彌高等 經文の八千由旬に固執すべからずして觀門譬喩の實體を悟るべしと、應知とは上來寶樹の種々不思議神變非一遍滿彼國の相は、皆彌陀増上の勝因の行、果報の相にして此果總じて諸佛の覺體たり。此等の深意口舌に宣べ難し應知と也。一切行者等 觀門譬喩の念に住し行住坐臥に忘れずと勤む故に常作此想と云ふ。要約すれば如此安心證得せよとなり。

○九從見此樹已——辨觀成相即有其三 九辨觀成相二 一標科

○一明結觀成相等 二釋

一明觀成とは 經に見此樹已とある故觀成と釋す。二明次第一一觀之と説故不得雜亂と釋す。三明明了と説故起心住境等と釋す 先觀樹根等次第住心の相を前の七重乃至網宮現蓋等に還て釋された、其相見るべし。秘決(全書一、二七四)云當觀は菓を以て觀成とす故に觀(他力觀)を菓とす。爲に依正の諸觀を以て之を結ぶと示し、日觀已下に配當してある。

○十從是爲下——菓現他方 十總結觀名

○上來雖有十句不同廣明寶樹觀竟 三結

◎寶 池 觀

來意文に入て自ら分明す。此樹池樓の三觀は不次第觀で無前無後とす。其意味は經文次當想水と云て不舉告命、樹觀に準すれば佛告阿難乃至樹想成已と置べきに、次當想水と説は第四觀の告命池觀に附する意で、不次第觀なれば地觀に次ぐ池觀とも見らる。若し機あらば不次第亦佳とす、第八觀に寶池寶池等不次第に列ねてある。故に次當とは第三地觀に次ぐ義とも見るべし。

○五就寶池觀中——即有其七 五寶池觀三 一標

○一從次當想水——牒前生後 二釋七 一總舉觀名二 一標科

總舉觀名 總は觀門義云次當想水の言、別して指さず。通じて極樂の池を觀する故總と云ふ。又私記三十八 三義可見。經は想水 釋に寶地とは、水は衆生心水 寶池は念佛也。經は能請定善教。釋は自開散善教で機法を明されたと見よ。又搭記四一丁 經文初標想水後結八功德水想 而名寶池觀 經標地水 釋顯水池 影略簡前 水想觀故 具足應云寶池水觀也。即是牒前生後 略釋す曰 今觀名を擧るは前水觀中地上莊嚴を牒する意とす。又一義牒前は第三地觀に次で此寶池觀を觀する不次第觀の意で牒前生後とす 二義併用すべし。

○此明寶樹離精——有池渠觀也 二釋

池觀の來意を明す。前寶樹觀は地上依報の莊嚴の最初なれば彼に次で此觀來る故に二ある。不空世界と莊嚴依報である。秘決では寶樹は衆生行相、寶池は託生の土。故に衆生往生佛正覺の行體顯るも、若し衆生の心水自力ならば託生の義無く、他方に歸入し觀門の智水を得れば利生の行成じ、

心行一體南無阿彌陀佛となり。満足して好と名く、是定散等の三重備りて精と云へど、機上に託生の土未成ならば未名好。縦ひ行體成するも未領解ならば好と云へないと委く説明してある(全書一)又精の字委釋す可見。又寶池の下に寶樹爲精等釋するは、依報は寶地とし、其上は樹池樓の莊嚴は爲不空となる。但し寶池の下に釋する意は、八池水は諸師は心散水と釋す。又は別願所成にて九衆生の往生するを七寶池中と説く、是れ衆生往生の處無くば本願も虚しかるべし、極樂も虚しかるべし、如此識知するを寶池觀法成就たる行成の定善とは申すなれば、世界不空の釋最も殊勝とすべし。一爲不空等 文相可知 意云秘決(全書一) 本國本家の釋明可見 曰く本國とは彌陀極樂に在さずば空世界也、今現に在せば本國は不空世界なり。二爲莊嚴寺 本國本家の義で極樂は我等の爲に建立なれば我等往生せずば依報莊嚴缺くべし今往生す二爲莊嚴成報 成就して寶池觀成立す。

○二從極樂國土一辨出處

二明池數出處三

一標科

池數有八池水の文を釋す。界中所々池必ず八あると説明す。楷記四諸師の引釋あり見よ。

○即有其五一明乃至廣說竟

二釋五分節

一明は極樂國土の文を所歸(極樂)の國(國土)と釋し、先づ託生の土を定む。二明の池數は有る經に一々池水七寶所成とあれば水が七寶の如く見えたるも岸の七寶が水に映じたるを釋された。四明は其寶柔軟の文を釋す。五明下は一々池水に八功德水あるを釋す彌陀經に八功德水充滿其中

と説く故、八德に新舊二譯あるも、導師時代は多く舊譯に依る。如意水 水の出生に依て立名す如意寶珠より出生すればなり。寶水とは七寶池にあれば所住に隨ての立名とす。問如意珠其體何者ぞ先佛舍利か 答爾らず直に是れ彌陀正覺の體とす、下文に彌陀佛神通如意とあるにて知れ。此水則有八種之德等 此は八德の言無きも水の出處を論するに依て八德の義を辨定す。

【八功德】 定善義

【稱讚經】

大經

- 一、清淨潤澤……………色
- 二、不臭……………香
- 三、輕……………觸
- 四、冷……………觸
- 五、軟……………觸
- 六、美……………味
- 七、飲時調適……………法入
- 八、飲已無患……………法入

- 澄淨……………蕩除心苦
- 清冷……………清明潔潔
- 甘味……………調和冷煖
- 輕軟……………無妙音者具足經味
- 潤澤……………自然隨意
- 安和……………開神悅體
- 飲時除飢渴……………諸根長養

八德義諸說大同小異なり

此八種之德とは六根に觸て此德を知る。一者清淨潤澤は眼根に就く、曰く清濁淨不淨あるも極樂の池水は無漏心の所成なれば濁患無く極めて清淨なれば色入攝なり。又耳根に就て云へば此水清淨洪然鹿動無くば聲入の攝とす。二者不臭 鼻根にて知れば香入攝なり。三四五の輕冷軟は身體に觸て知れば觸入攝とす。六の美は舌根にて感知す味入攝。七八は意根にて知れば法入攝とす。

上來の八徳を具したる池水なりと知を寶池の觀法とし、其を識知したるを觀法成善の定善と申す
私記三十九參照 又秘決(全書二) 下八品に配し深意の釋ある、そして結文を上上品に配し九品は往
生也、本願(彌陀義中廣說)は來迎也、此二を以て寶池と爲すと重々の釋意ある必ず可窺。
此八徳之義已在彌陀義中廣說竟とは 文の如くなるも經の字略 秘決又義

上品に配す意は彌陀は發三心種、義は三福、彌陀は慈悲、義は智慧 彌陀の慈悲は三福の行體な
れば 上上の往牛即佛の正因となる故滅罪を説かして今の八徳を上上に收めたり、これ一切の
功德を上上に收め其上に三福九品に説明する意を此下に辨明してある必ず可窺(全書二、二七五)
○又讚云極樂莊嚴、彼法堂 三讚

此讚は寶池に十六觀を收むる意 秘決(二七五)云極樂の池水を以て往生味を造る故十六觀を此中に
收め讚すと 極樂莊嚴も養國等 觀門義(二十九)文解可見、極樂は莊嚴功德に就て立名、安養とは能
居衆に養神安身に就て立名す。私記三、二十九極妙樂事の文より極樂とし、安養は通十方也とされど
深意を云へば極樂は本家、安養國は我等領解の心で覺暮一日の姿である。此意は領解心を以て極樂
を莊嚴す。即ち極樂を莊嚴する安養國とは、正因念佛の上に行に還り正行増進する姿と可見。
已下の文解觀門義(三〇九)可依。又此下を十三觀に配列して捨命の一句を上上品に配し下八品を收
め上には八池水を以て九品往生を成じ今は十六觀を以て九品往生の行者を莊嚴する也。
○三從分爲十四支、一旋還無亂 三明池分異溜二 一標科
寶池の邊に十四の支渠あり、水池渠を旋て時恒に流注して雜亂無し

○即有其三二明等 二釋

分爲十四支を釋す 文見易し。秘決又十四支は一經掌中の釋ある可見(二七五)

○四從一一水中一不思議用 四明水不思議用二 一標科

此寶水體性柔軟無漏出生にて尋樹上下する事、有情と異ならず故不思議力用と科す。

○即有其五一明等 二釋

一明莊嚴之相 蓮華をば 池の莊嚴とす。二明 六十億の文を釋す。三明 團圓正等十二由句の
文を釋す。四明 其摩尼水の文。五明 如意水とは出處にて立名す。

○五就其聲一一不可思議德 五明不可思議德二 一標科

前科の用は事用、此用の上に不思議の功德ある曰く寶池内の說法、曰く尋樹上下說法等也。

○即有其二一明一一皆說妙法 二釋二 一寶水說法

○二明寶水上岸等 二尋樹上下說法

或說等 先二乘の法を説て調微し、次に大乘法を説て成佛せしむる相にて即ち說法の次第である
或說人天已下は正しく五乘の法を列る也。

○六從如意珠王一一摩尼多有神徳 六明摩尼神徳二 一標科
寶水種々神變し佛事を成せば神徳と科名す。

○即有其四一明等 二釋

當觀二の理由ある如意寶珠より出水說法(十六觀を説)と化鳥說法(念佛法僧)是れ觀佛念佛發

遺來迎云云私記三、三必可見。一明等初三文見易し。四明中然佛等は略して所讚する三寶の徳を述べ
 三寶を田とは、上田は少分下種し、多分收穫す。今三寶に歸する少分の善報も、無始の重罪を除
 き證無上菩提の福田に喩ふ。問 三寶俱に福田なるに何故僧のみ福田とするか。答 滅後には僧あ
 り 佛法を辨明し、民衆は其に依て得益すれば三寶は僧寶に極むが故なり。爲に但使已下は僧あ
 て四事供養の功德を讃す。四事とは飲食衣服臥具醫藥の四にて 人世必須の用具、衣食文身命で食
 は命を持し、次に其を持するに 衣服住宅大切なり(僧侶は臥具)其上に醫藥とす 此四大物を三
 寶に奉り歸依の標示とす。これ念佛法僧の念の字の義である
 不憚疲勞 淨土往生人は此四事に煩ひ無く其益甚深なる事を釋す。依果 所依果報で即正乘の悟
 を開く(持)の依報也。自然 他力の義。應念所須等 五乘の悟機根に隨て他力に依て悉く得らるべ
 しと。其寶珠已下、總じて寶珠の功德を結す。前生八味之水 寶池莊嚴の相を結す。後種種々金色
 莊嚴寶池の功德を結す。非直研闡等 正しく金光の所益を出す
 ○七從是爲下總結 七總結
 ○上來雖有——寶池觀竟 三結

◎寶樓觀

當觀は林樹の間池水の邊りに寶樓閣ありて莊嚴完備す、爲に池水に次で當觀來る。又上來は寶地
 林池と次第し別觀するも、當觀成すれば上來觀成の莊嚴一時に頓現す故に別觀に次で惣觀なる也。

此樓觀の名稱は三十二國十莊嚴願文に、宮殿樓觀池流華樹と説き、樓觀を先に擧て須要とされて
 あるに依る。總じて一切の莊嚴は國土の莊嚴と顯るなり。又樓觀に就て秘決の意に依るに四從の閣
 内莊嚴と、五從樓外莊嚴の二と見てある。閣内とは極樂を衆生の本家樓觀と見て即極樂とす。第二
 は彌陀本國を樓觀とす即娑婆なり。本國は衆生至心信樂の心で、この衆生の方より極樂を本家とし
 樓觀とし、佛の方よりは我等の三心を本國として寶樓と云ふとの二義が含まれてあると釋してある
 ○六就寶樓觀——即有十一 六寶樓觀三 一標
 當觀に十一の大科のみで小科無きは十は智惠圓滿 一は慈悲と爲す、次下の雜想觀も大科十一の
 みだ。今は序分、雜想觀は正宗。上輩十一門は得益、中輩十一門は流通、下輩十一門は眷屬で、五
 義に各十一門を設け、悉く出離を許す意とすべし。大科は慈悲、小科は智惠とす。今十一の大科の
 みは縁の法門、慈悲なれば大科のみと知れ。
 ○一初言衆寶國土——牒前生後 二釋十一 一總舉觀名二 一標
 初は前六依報は衆寶國土の一句に收れば依報に互して初と云ふは秘決の説なり。上來の釋は下に
 互に、今上に互すは今け總觀で餘觀頓起すればなり。
 衆寶國土を觀名とするに婉て觀門義三、二十七 楷記四、十四 二義可見 秘決(二六四)國土即寶樓、寶樓は本
 家、極樂は我等の本家なれば衆寶國土を寶樓觀名とすと。牒前生後は此義意を顯示す。
 ○此明淨土——圓也 二釋
 此下は寶樓の生起を釋す、唯當觀のみならず一々の觀に十六觀各具すれど、惣觀の名稱に對し、

若無寶樓不名精と釋し餘觀に對して可知と示された。故に精は精靈の義と見よ即ち諸佛國土の精靈也。種々圓備一切莊嚴具足の意、再說すれば寶ろう空閑は至心信樂の心、彌陀も此至心信樂の家無くば正覺不成、又我等より見れば極樂の本案無くば往生を念願するに由無し、されば寶ろうとは正覺の體で變相には華座を織りたり、華座は一乗で、一乗は凡夫往生の體、依正具足の華座を依報の寶ろうに納て依正具足する意を以て衆生往生の表示とす。爲に寶ろうとは即ち穢土の無量壽で、念佛往生の體と見らるなり。

○二言一一界上一一無窮也

二明寶樓住處

○三言有五百億一一如是應知

三明正顯其數

上の樓無數の義を釋す。界々既に無邊五百億の寶ろうも亦無窮也、問此下上の樹少と釋すべし如何。答深意ある。曰く五は五道を標す、百は無窮を示す。即五道衆生無窮の意とす。然れば一人の上に五乘の法あり五道あると知らる。

問釋に有五百億已下と云はずして寶樓閣の三字を除くは如何、答秘決(三五)寶ろう閑の句を十一大

文に入らざる也と示されて、ろう閑は常體の體、極樂をろう閑と云ふ故極樂即ろう閑である。されば寶樓閣の三字を大科に入れざるは、先六觀を皆寶ろう閑と云ふ意と見てある。例せば樹觀に一觀之の文を十文に入れず、又第八觀の所以者何を十三大文に入れざるも其意あるべきなりと云々(深く留意して可見)要點は寶樓閣の三字を衆寶國土に收め、其國土は淨所現の土で、此土の外にろう閑無しと見よと云云。

徧滿彼國

又事相より見れば我等領解の三心に法藏因位の功德收りて徧滿す。我等領解の心の上は一切功德を具足す是極樂と云ひ、十劫正覺とも云ふ。寶ろう閑を衆寶國土に收むるも此義で、衆生の本案とする領解の三心に一切(衆寶國土)を收むる義を顯す也。

○四証其樓閣中一一閻闍莊嚴

四明閻闍莊嚴

閻闍は娑婆、無量諸天は慈悲の友、曰く妻子眷屬親疎、皆是れ考へれば善知識とす。反對者に遇て厭離し、好事に就て欣求す、此等の意味を無量諸天と國師は指南されてある。

作天伎樂

娑婆の全體は善惡の二法で皆衆生の貪瞋より生ず、此を伎樂とす。此樂音を善知識の勸となる。善惡並べて出離を教ゆと知れば、松吹風も稱名の聲と信仰せらる。爲に觀門義三、三五。聖衆莊嚴の義と示されて、我等の領解は即淨土莊嚴と見られてある。要言せば閻闍莊嚴は平生往生の姿で我等の三心に因位の功德を收むる見と見よ。問變相の寶ろうには華座を織り、經文は閑中無量諸天とあるは如何、答無量諸天即華座とす。當觀は惣觀なれば上寶池の七寶蓮華即今の無量諸天に經まん一致す。又ろう中遊戯するは起行門に還り世成行を修する姿と知るべし。

○五從又有樂器一一無思成自事也

五明樓外莊嚴

文意見易しされど秘決(三六)意 閻闍の娑婆に對しろう外は淨土也と釋す。寶樂飛空は三心、樂は本來衆生の貪るも、此貪他力を信する故寶樂を成すと。飛空は自他俱に親疎を簡ばざる標示とす。法響は衆誓の定前、聲とは應聲即現の聲、流は末代迄流布し止住百歲也。晝夜六時晝は正因慈悲 夜は智慧正行、天寶幢とは窮極は念佛で、念佛は慈悲 此慈悲を佛法の柱とする意味である

楷記攝論を引ての釋明は一應の義なり、無思成自事。他力の慈悲は三業の功に依らざる標とす。○六從此衆音中——說法之能。六明樂器說法。

思慮分別無き無識の說法。法は必ず機根に應じて説く、是れ觀機三昧の力也。縱令有識者なるも此觀機の力無くば說法し難し、況や無識の樂に說法の能あらん。されど彌陀願力の所作と仰ぐべし。秘決意は識は來迎第六觀は序分智惠なれば無識、第七觀已下は有識（來迎）と示し、次に寶池の念三寶。今の念三寶と同異の問答を設け、水地ろう眞假一體を辨じ今生に證得せしむるを眞の說法なりと云云。必可見。

○七從此想成已——莊嚴總現。七明正顯觀成相。

此明已下は釋義。意云極樂無盡の莊嚴を攝要せば地樹池樓の四に攝す。當觀は衆寶國土と説き、寶ろを説たれば莊嚴は盡せり。故に當觀成せば極樂莊嚴皆現する理、故に自上莊嚴總現と釋す。怖見。不見正報の故也。

○八從是爲下總結。八總結。

○九從若見此者——生後利益。九牒前生後。

前觀相とは總觀の觀成（牒前）を指す。除無量劫を利益（生後）とす。依正不二の心で今滅罪を説く。又觀名を結して後に滅罪を説は、上の諸觀に通せしむる意。

○十從除無量——必往無疑。十除障往生。

依法とは觀門弘願に歸したる前六觀の法に依て觀察すれば除障多劫也と、身器清淨とは他力觀門

の行者は、一切大小所修に雜事無れば身器清淨と釋す。應佛本心。彌陀本願の意で三心。他世とは後生往生、無疑は一心證得を云ふ。

○十一從作是觀者——邪正之相。十一辨觀邪正。

○上來雖有十一句——寶樓觀竟。三結。

◎華座觀

前六は通依なり當觀は慈悲なれば此下に至て通別一體を顯す。六の智惠と一の慈悲と合して當觀は念佛慈悲とす。楷記四初前六は通依を觀じ當觀は別依を觀す、又前の通依は但に依報を觀じ、此觀は正報に入らんとする故、前觀に次で來るとは文一往の義、今深意を云はば、前六は智惠の重で我等領解の體、示觀に依正を領解す。其の中で前六の依報は我等往生の相を顯はし、後七正報は弘願の法體を顯して示觀に領解したる正報をば第七觀とは説く、然れど此觀は依正に通ずる故中間に在て前後に互す也。華座を依報とすれば前六に通じ、又華座を願力所成とすれば佛體にて正報となる。又華座を定散とすれば正行の方で觀々差別す。正因の上で十六觀に互せば念佛をば華座と名く、座とは上に住立の佛體の座し給ふ故である（全書一）參照又他筆中丁序正一同示觀第七觀一同の釋意可見。

○七就華座觀中——即有十九。七華座觀三。一標。

先舉の文は別科の第七第八句にある。義は前六に通ず、除苦惱法は即當觀の故。即有十九は、十

九願の意で發菩提心修諸功德の二句を即使當得と爲して來迎と説く、今華座に住立を收むる意とす
又秘次(全書一)十六願と序正流の三段を十九句とし
今經——十六——慈悲——散善經

諸經——三段——智慧——定善經 悲智定散を一經とし華座に納て十九大文と爲す也。
○一從佛告阿難——救聽許說 二釋十九 一救聽許說二 一標科

勅聽は二人に勅聽す 諦聽々々の文なり。佛意を演て凡夫に聞かしむ。許説は佛當爲汝の文、章
提先に淨土の道程を請じ後に開悟し、亦凡夫の爲に請法す、此二請に依て要法を説けば許して説く
と釋す。十九願に發菩提心とは正因即便、修諸功德は正行當得、發菩提心修諸功德の上に来迎を説
く、今華座の上に来迎を説く同意である。當觀は依文面は示觀に同じ、他筆抄に一一文を引く
女義の邊は示觀は釋迦要門、華座觀は彌陀弘願なれば文は同なるも意は一往別と見るべし。又私記
四左丁參照 又許説とは楷記五丁問今此の許説は何請に酬へたるか。若上の別去行(思惟正受)と云
はば前已許す。何ぞ更に之を許すや若し前示觀の若佛滅後の請と云へば日觀等は其請に酬ひざるや
答兩處の勅許皆上の請に酬ふ、但し難にて至ては下に決之。
○即有其三二明告命——罪苦得除 二釋

一明告命二人は(阿難——傳持・章提——請法)未來の爲め所説法は此二人最要なれば二人に告明す
又阿難は智慧、章提は慈悲で悲智具足の意、經文の佛とは來迎、阿難は定散智慧、章提は念佛慈
悲とす。示觀は阿難一人、今二人に告命するは、示觀は耆闍會の時には正宗となれば一人とす。

第七觀は王宮會の正宗なれば二人に告命す、王宮は驚々火宅の本意を顯し、耆闍は山に還て説く故
一代とす然るに示觀の告命に同するは示觀は耆闍の正宗なれども今王宮會の爲には序分なれば、
今經の序と心得れば告命廣く通する也。此經文佛告阿難より當云何觀無量壽佛及二菩薩に至る百三
十六ありて百三十六地獄を表すと古來の傳受とす。

二明、救聽令之諦受正念修行經文諦聽々々善思念之の文を釋す問示觀のたい聽等の文を思量たい受
莫令錯失等と釋し今正念修行と云ふ相違如何、答序正一同にて今は正宗なれば正念(安心)修行
(念佛)と云ひ、示觀に落居する時に凡夫正行修行の意味ある事を云ひたるもので、即領解後の修
行を正念と云ふ。領解とは觀門弘願に歸すると知るを云ふ。故に又正念は安心、修行は念佛とも云
ひ得らる又極論されたい聽の字に修行備りて別の修行を用ひすとも觀門義に仰せられてある。
三、佛爲説華座——罪苦得除 佛當爲汝分別解說除苦惱法の文を釋す。問此文を華座觀法と釋し
住立佛體と云はざるは如何(除苦惱法は住立の佛體なればなり)答就之諸末師委釋す。先楷記五云
二尊二教を明すと。華座は釋迦要門教、住立は彌陀弘願教、されど華座を擧るは、許説は諸觀に
通するも諸師の觀佛の解に非ず。佛身(住立)は觀境に非ざれば、特に華座の觀法を説と云て應聲の
別意弘願に對すと示してある。

侍通記は後由序となる故先擧華座觀法と云云 他筆抄中二除苦惱法は華座觀法、住立佛體、名號の
三義を擧て俱に同義なりとす。爾らば三義同なるに特に華座觀法と擧るは如何、曰く正行差別の方
面では此觀は華座觀なれば觀々差別を顯す、若し住立佛體と擧れば、住立の體唯一觀に局て十六觀

に通せず、

八十八

十六觀の體は正因なる故住立と擧ずして、正行の方で華座觀と擧たとの意と見てある。觀門義云。見無量壽佛とは弘願の體、念佛——不捨と知る故ばん夫往生疑ひ無し。華座の觀法を説て佛身を説顯すも、三尊を見て往生決定するも一同にて、要は念佛衆生攝取不捨にある也と云云。私記四丁已下又此問答ある可見。意云。左四丁華座よりして依正具足し十六觀不相離たる所説佛語の觀法であるとして、超昇寺墨畫の曼陀に十六觀に渡して華座を書すと引例してある。又依正具足とは、七寶地上に華座を置て、座上に佛座して依正具足せば十六觀、觀々に成ずる故華座の觀法と釋す。觀法とは十六觀法なりと指南してある。

但能住心緣念罪苦得除、此華座に於て心を往して緣を繋げ念を一にすれば、罪苦得除すと、經文は約佛で分別解説、釋は韋提領解に就て住心緣念とす。故に他筆抄中云正因の謂にて緣の上に念の謂れ立つ時は凡夫得除罪の意あり。緣念とは觀門に約するも、義は念佛にある也と、

○二從汝等憶持——勸發流通

二勸發流通二

一標

汝等憶持 汝は阿難 等は韋提等を等す 憶は觀佛、持は念佛にて流通の即是持無量壽佛名、分別解説とは汝好持是語者也。楷記三丁展轉相勸隨緣普益とは彼義なるも今は取らず、何とならば韋提一人の隨緣の益に非ず今は十方衆生他力に乘じ往生せすと云ふ事無し、韋提往生を成すれば十方衆生も同時に往生して柳は緣花は紅と厭欣心起て萬機普益を成す爲に隨緣とは非なるか。

○此明觀法深要——同昇解脫

二釋

觀法深要 觀法即深要で、深要とは疑心し 所緣の境を觀する觀法に非ず、唯弘願に歸し彌陀佛の

加護を蒙り往生の大事を成ずる觀法にて、深智も散心をも簡ばず、未來常没の凡夫を度する觀法なれば、其を指して觀法深要と釋す。他筆抄四四義を以て明す。曰く深要とは三尊か華座か、十六觀か念佛かと問て、答は依正具足開見一同なれば是を華座觀法と云て、生佛一如の義が正しく顯る深意と云云。急救沒常衆生 楷記約下最 常没を釋す。他筆同く下三の機とす、觀門義 不問時節久近に之を度す故急救を證と爲す、妄愛迷心は常没の相で因を擧ぐ。曰六道流轉は愛着心あるに依ると漂流六道は果を擧ぐ、是れ因果具足の凡夫とす。汝持此觀處々觀修 經文未來の意を辨す、即ち十六觀處々に依止二報を識知す、故に汝持此觀は自行正因の觀、處々觀修とは化他正行とす。普得智開 開三寶名即得往生と、開位即念佛とを示す。同昇解脫、同は九品の機同じく、未來處々の衆生差別あるも同く之を攝し同く往生せしむれば同昇とす。解脫とは華座は解脫の床也、此世解脫は決定往生、後世解脫とは一念乘華入不退にて斷無明の意とす。

○三從說是語時——不得爲比已來

三三尊許應無異三

一標

此句は別に標科無し。強て科すれば正明彌陀應聲即現、或可正明二尊許應無異、義多合故別標せずと楷記は辨明してある。今此說に依て一往標科して此下の經文を説明せん。説是語時とは意約し廣く十六觀に互し念佛の時とす。無量壽佛に蓮華無し、又光明を説かず。二菩薩の方に説は、一光三尊の意味で三尊俱に名號の上に具足すると見るべし。光明は名號で三尊一光にて、三尊は唯名號にて唯標專念得生の義也、此佛を十六觀に互せば三尊即南無阿彌陀佛とす。同爾らば無量壽佛と云て南無阿彌陀佛と説かざるは如何、答韋提領解を説き顯す故也、正因領解

なれば説に依て法體を見る、韋提の心は南無、前境の行體は阿彌陀佛なれば法界衆譬を顯す領解也
此領解即ち名號なる故、一光にして三尊を説て名號を顯す也、若し名號を顯せば單に説のみにて
見の義不顯なれば領解に就て無量壽と説き給ふ也、此處に往生とも廓然大悟とも説ざるは未來の流
通を顯す。説是語時とは、韋提の領解を説顯せば其領解は示觀にあり。示觀は光臺に還て見を成す
れば、光臺は元より亦非是無時佛語の體なれば上の如是より一經が納るなり。
百千閻浮下、二重の意ある。檀金色は念佛で捨大捨本願の住立來迎には不得爲比と、第二は百
千閻浮は能詮の定散なれば光明熾盛の念佛には不得爲比と、

住立をりは、空中に韋提の三心にて南無、無量壽の下に三心ある故、無量壽の三心に南無を收て
此心を我より起さず法體より發ると示し、臨々欲入の機の前に來る捨大悲の義を顯す也。
○正明娑婆——影臨東域 二總釋二 一直釋

此句は 經の大意で序題門の意とす、初一句は觀門の位にて娑婆教化主人 住想西方とは觀門の
智恵を以て彌陀の依正二根を照す意也。安樂慈尊等 弘願の位 一經の意 文々句々此二門あるも
此文明かに之を説く。智情とは彌陀は韋提等の住想の情、即物情を知て影臨す。他筆二義、楷記三
義可見、又私記四五參照。經の無量壽を變相に緘らざるは、只平生領解の方は名のみにて體顯れず
今始て領解の位に無量壽と顯れたるに非ず、本來具有する義を變相に顯した。今他力に歸して南
無阿彌陀佛と稱する時に三尊顯現したれば、一光三尊唯名號と顯るを影臨と釋された。
東域は衆生の三心で、東の字は木の中に日を收む。日は來迎なれば木の三心中に來迎の體を收む

今無量壽と顯るも別に光明赫々たる佛體來るに非ず、説の位に顯る名號で、一光三尊にて雜想觀
に等身と顯れ、三尊俱に南無阿彌陀佛の名號と示す義也。

○斯乃二尊許應無異 二結釋二 一直結成

斯乃是指上、許應は許說應現にて、二俱に佛語佛體なれば無異と釋す。曰く釋尊の説意も彌陀の
意も俱に凡夫往生の御思召より外無きなり。これ釋尊の觀門に依らずば弘願顯れず、弘願に非ずば
亦觀門顯るべからず。觀門とは釋尊の説教で説是語時、弘願は彌陀の本願で、住立の文を指す。故
二尊許應無異と釋された。

○直以隱顯有殊——互爲郭匠 二釋疑妨

疑者、二尊許應無異と云へば、何ぞ顯示兩緣已下許說あるに應現無きか、此疑問を釋せんとして、
前に隱て今現するは正しく他力の深意を顯すに依る、これ彌陀は隱、釋迦は顯、其意は淨土中成佛
悉是報身、穢土中成佛 悉是化身で、淨土にて釋迦は隱、彌陀は顯、穢土にては釋迦は顯、彌陀は隱
今穢土衆生の爲なれば、釋迦は顯にて、異方便の説是語中に彌陀を顯して、一切衆生に見せしめ
給ふ。これ彌陀は釋迦の語中に顯れ、一切衆生を攝取せんと來臨し給ふ也。

正由器朴之類 他筆云先は正因、此下は正行を成すと、器朴は受化の機に譬ふ。故に器は曲、朴
は直にて万差無量差別の機根と見るべし。

互爲郭匠 二尊互に郭匠となる。郭匠 楷記五六莊子引云郭人墜漫其鼻端、若蠅翼 使匠石削之
匠石運斧 成風聽 而削之 盡聖而鼻不傷 (中略) 若使拙而削之 非徒無功而已或更致其傍損

云云 觀門義云 未來衆生 業障煩惱の泥を貪心愛著の鼻に塗り、釋尊の跏趺觀門の手を以て斧

を遣ふに業障の泥除て、法身の肌顯る事例して可知と

○言説是語時——即有其七 三別釋二 一路牒文

是語とは、上の除苦惱法の語を指す。此意中即有其七とは二尊許應無異の義を釋す。此意に二義

あり、一云此一句の意中に即有其七で七句は説是語中の事にあらずと云ふ事無しと。二云二尊許

應無異の意中に就て七句ある。此一句は其意義を明す故に、正明就此意中等と云ふと。又他筆參照

秘決（全書一） 此語とは得益分の説是語に同なる故十六觀也、此語を華座觀に收むる時要門の定散

となる。得益分に同する時は臨終の來迎と成る。正は念佛、明は觀佛、意とは密意を取て釋す。

十義あり云云參照すべし。又私記（五丁） 見の位の住立佛を説是語中に收むるは佛體佛語法門也云云

○一明告勸 二別釋七 一告勸

阿難に告。は在滅一同の意、韋提に告るは凡夫に告ぐ、凡夫を益すれば聖者の益ある事無論なれ

ばなり。經文は只説是語時的一句なるに已下の七句に釋す。今第一は二人に告命の意あるを明す。

○二明彌陀——往生也 二彌陀應聲現

依文は即便、玄義は來迎、應聲即現は許應無異の義で亦二義あり、一は開見一同義、二は名體不

二の義とす。證得往生とは應聲即現の時夫人往生を證得す。即ち發三心即便往生の意とす。無量壽

佛の句を證得往生と釋するは、不取正覺の體顯れば往生は無論とす。經は無量壽佛に往生を收め、

釋は往生（證得）即正覺の義を示す。問往生と無生と同異如何、答今は來迎の位なれば往生と云ひ

平生なれば無生とす。然るに一同なる事は上ヶ品にて知るべし。問三心領解後の見佛か、見佛の上
の領解か、答同時なり。他筆中九參照。又證得往生に就て秘決（全書一） 發三心者即便往生也、是故
三心可發、臨終時即往生故也、是云證得 自力修行者於今生眼前 顯其利生故 不期臨終 今往生
者於後生往生 立無疑無慮之心故 是云證得往生 亦是七義云云可見

觀門義の意は聲は觀門、現は弘願。觀門弘願に契て別無しと知れば此説を聞に決定往生す。今章

提は弘願の體を見て攝取不捨の光明を知りて決定往生す。之を證得と云ふ。韋提は弘願より觀門を

起す。我等は觀に依て弘願を知る、其體無二で在滅の別あるのみと（佛乘云） 私記の在滅一同説は

此説に説に反する也

○三明彌陀在空而立者 三彌陀在空而立三 一標

念佛の重、前の二明は即便、今は當得散善で、臨平即當一同の義を明す。在空は三心正因 立は

念佛止行で、住立空中の四字を釋す。

○且使廻心——得牛也 二直釋

廻心正念願生我誠は觀門の意、立即得生は弘願の義で、未だ捨命せざるも觀門弘願に歸する意味

を知れば往生決定し臨終往生更に一点の疑團無れば、之を指して立即得生と釋された。此無量壽佛

住立空中は一連の文なるに二句に釋するは、是は義句で此一句中に二義あるからだ、曰前の説是語

に望れば即ち應聲即現の義あり。住立空中に望れば立即得生の義ある。又立即得生とは、上の證得

往生也、彌陀の行體顯れば其行體即往生なれば立即得生とす。

問意は諸佛四威儀中座儀を尊とす。大人の義なる故、何況報佛は一座無移で轉易去來すべからず、今既に本誓を捨す、大悲の本心に來應せば靜に端座し機の前に利生すべしと問ふ。

大悲とは觀門義は釋迦の大悲とす、佛乘云 大悲とは衆生とも見らる。注法雨大悲と同じく衆生を云ふ。即ち衆生に應ずる也。秘決(全書一)此問は臨終來迎を問ふ而して此來迎は離機離教で、三身を離れたる獨一來迎とす。曰端座佛は智慧で不捨本願應大悲の佛、捨本願捨大悲は慈悲、

今大悲の來迎は住立佛也、此佛應身ならば穢土に來るは應大悲也、報身ならば一座無移とす。法身ならば無形無色の理佛とす、此れ此の來迎の佛體は三心を離れたる也。

答曰此明如來別有密意等 答中先義意を明す。密意は不端座而赴機は如來の誓願別に深密の意ある故也。曰凡夫入報は密意で一代に不説、今經に始説の故なればなり。但以娑婆苦界等は正しく密意の理由を釋す。曰報佛の德は尊高なるに、今東域に影臨し給ふは、急救常没の爲で端座し赴機せざる也。娑婆苦界 總じて端座に及ばざる理由を説明す。雜惡已下は苦界の相を明す。八苦相燒は苦體を出す。動成等 違順俱に苦縁を増長す。三惡火坑等、火坑は喩にて三途に入るは火坑に墮するが如し。臨々欲入 因果不空の理を明す。我等内面に貪瞋痴の三毒を發し、外面には殺盜淫妄等の不善を造作す。此因を推家せば必ず三途に墮すべし。無常迅速にて呼吸の出入を待ざれば時々刻々三惡の果報を感受しつゝ、あれば臨々欲入と釋された。

若不舉足等正く別意を示す。曰本願は偏に此機の爲也、端座赴機は親きに似たれど善機に應ずる姿、今立佛は暫時起現に似たれど、惡機を捨ざる他力別意の不思議也と。爲斯義故已下は立ながら救ひ給ふことを釋す。立撮 撮は取也。報佛は凡夫不可見なるも本願を以ての故見るを撮と云ふ。他筆中丁 今經意座佛來迎あるべからずとの文可見 又秘決此答下六縁に配し深妙の釋あり可見

○四明觀音勢至——無餘衆也 四表無餘衆 無餘衆 三尊は悲智の二德なれば本願所成の體は三尊來迎也と、又正因來迎なれば無餘衆と云云 觀門義四丁云餘衆とは三尊は彌陀一佛の功德にて餘衆は餘事也、即ち彌陀一佛の功德で一一願言稱我名號にて法界一佛なれば餘事無しと云ふと

○五明三尊——踰盛也 五光明踰盛 身心は色心二光、眞淨は圓滿清淨にて二菩薩は因位ならば圓淨の義無くも、今は果上一佛の功德なる故圓淨と釋す 光明は三尊の光明、彌陀の光明を釋せず、此二菩薩の下に釋明するは、侍者の光明を以て 彌陀の光明を推知する故踰盛と釋す。經文光明熾盛不可具見の一句を二義ある故開て二とす、曰、此一句三尊の光相なり、故身心圓淨等と釋す。或云佛身の光相なれば六明佛身光明等と釋す、是三尊同體別相二門の義也。

○六明佛身——何能具觀 六光照十方 前段は約體、今は約用。佛身 三尊俱に佛身とし二菩薩も俱に攝取の利益は彌陀より外に無しと知しむ、即攝取不捨の義也。垢障凡夫何能具觀 今は佛力の故能く具觀す。

○七明佛身無漏——比方此也 七佛身無漏

九十六

眞身觀に如百千萬億等と説き、今不得爲比とは、今は弘願の體を見る所詮の法、第九觀は能詮觀門なれば身如百千等と説く、觀門義四八參照

○四從時章提希——得蒙稽首

四見佛作禮二

一科釋

前三科は三心華開の時無量壽佛顯現し給ふ。南無の上に阿彌陀佛と顯れた姿とす。華開は滅罪・佛體を見るは見佛なれば、觀門より弘願開く、花開て蓮の顯れるが如し。觀門は平生の位とす即ち華座觀の位置とす。當段よりは弘願より觀門を顯す意で章提の往生成じたる處である。捨大悲捨本願他力の體なれば、接足作禮の南無の上に無量壽佛顯現し給ふ也、是れ章提自力の見ならば、永く生佛各別なるも異方便の開示に依て見を成する處の示觀の意で、説明されてあれば注意して可見聖力冥加とは經文佛力の言無きも示觀の領荷に準じたる釋なり。稽蒙首 佛に禮せられるに似たれど義は然らず、垢凡は佛身を禮觀不能とす。聖力冥加して此恩を蒙る事を得る也。經に接足、釋は稽首、互に禮儀を顯す、稽は至也佛身尊なるも脚下を下とす、凡身卑なるも顯首を上とす。我最上を以て佛の最下に接し、歸敬歸依の誠を表す。又佛身と自身と親近無礙の標榜なれば接足を以て得忍を表す。

○斯乃序臨淨國——心開悟忍

二釋義

章提正しく弘願の體を見て當觀にて無生忍を得たる事を釋顯す。秘決云(全書一) 華座觀に得無生と不説、今心開悟忍と釋するは、得益段の見佛は即此佛也、然るに華座と云ふ時は語に納る故、

得益無し、説の外と爲る時は臨終と成て往生を得る故得益あり。若し此佛に益を付ざれば得益の佛と別する也、故に下の益を取て、一佛たる事を知らせん爲に此佛に付る也と。

序臨淨國 示觀領解の國土を云ふ。欣淨土にては喜歎と云ふべからず、されど示觀にて、依報を見て無生と説は依報見の位に正報を許す意也、故見彼國土得無生と説く、斯く知れば依報と云へば欣淨へ還る、正報とは密益の體、密益とは無生で、無生とは正宗で其體は第七觀とす。故に得無生とは正報所現の位なりと顯して、今乃正觀彌陀也と釋す。

問夫人既に弘願の別意を見たり、何ぞ稱名せずして作禮するか、答三業皆名號の意と見るべし、第五科の疑問は此意を示されたと窺はる。

○五從白佛言——正明夫人領荷佛恩

五領荷佛恩二

一標

領は領受領納で我物にする意。荷は釋尊の智と彌陀の悲とを兼荷ふ義。佛恩の廣大なるを知れば何を以てか之を報せん、曰く只此法を流通するのみ、故に未來の爲に問を致す。是を爲物陳疑生於後問と釋す。自信教人信の意と知れ。

○爲物陳疑——云何可見也

二釋

此明夫人意等 聞見一同の義を明す。尊加念 釋尊加念は佛の意業也、光臺現國は身業也、此身意の二業に依て我既に彌陀を見たり。未來衆生如何が見るか、口業の觀門を説に顯して釋尊の加念未來に及さんと問て、身口俱に意業の加念あれば、章提は身業の益に未來の口業を同せしめて、三業不離聞見一同を明す也。

○六從未來衆生——使同己見

六爲物置請

九十八

聞見一同を聞説す、韋提は光臺見を示觀縁に成立し、弘願を第七願に顯し、未來の我等は十六觀を以て弘願に歸すれば聞見一同す、是を同己見と釋された。

○七從佛告韋提——許説之言

七總告許説二

一標

總告は佛告韋提希欲觀彼佛者の文也。惣は未來に及ぶ意で、示觀縁に未來と請すれば、佛は汝及衆生と答へ給ふ。今は未來即韋提の故に、別に未來を出さず。許説は當起想念の句也。

○問曰夫人等

二問答

此問答見易し可知、未來を正機とし、韋提を凡夫と定て、韋提の爲に説は即未來を説也と、答意は佛化は不請すら説く、何況や請あるに於てをや。文略とは汝及衆生の文略也

○八從七寶地上——正明教觀方便

八教觀方便二

一標

經に於七寶地上とあるに、釋に於の一字を除くは秘決（全書一）於字あるは七寶地を淨土に置く於字無きは七寶地を娑婆に置く意味だと述べて、其例に水觀の假に眞地を收め總標地體と釋されたるが如しと。作蓮の二字略したるに就て秘決（全書二）必可見。意云作蓮の二字を以て一經とすと云云觀方便。觀即異方便で稱名の上へ七寶地上——往生極樂の思を成せば、法界身の覺を成して觀即往生也、觀即方便とす。

觀門義四三云觀門は彌陀の依正を知るを要とす。依報多なるも寶地を本とす。其の地上に華座を置き、其上に正報隨るべし故に寶地上に華座の思を成することに於て觀の方便なりと定むと。

○問曰衆生盲闇——所觀皆見

二釋二

一問答

日觀は依報の初なる故觀相を教へ、今亦正報の初なれば觀相を教ゆ、其義を明す爲の問答とす。而し日觀は能請定善教たる一代の觀相、今は自開散善の方面で、今經の觀相とす。此問答自ら安心と起行とに分る。初に安心を示す。衆生盲闇は機相。遠標淨境は、示觀の自見面像の明鏡の意を含む。明鏡を以て在世の晝は見るも、滅後生死長夜には鏡あれど見難し。如何と問ふ也。遠とは能緣所緣の境。遙に隔れば遠と云ふ。

答曰若望衆生等。意味は自力迷心ならば淨土境界永く隔て觀成し難きも、今は弘願に成して得ると自力他力を區別して答ふ。望衆生等は自力不成の意。聖力遙加等は他力に依て成すと。

○云何作法住心而令得見也

二微釋二

一微問

云何作法し見佛するかと起行を問起す。

○欲作法者——過既竟

一教懺悔

其作法とて別に異なるに非ず、他力に依て見佛し得らるなりと。此下八段とし第一教懺悔とは日觀に例して可知。

諸行者等。未來凡夫を指す。佛像前。第八觀の佛像を想ふ意とすべし。至心懺悔。至心は眞實心懺悔は念佛にて依下觀門專ら念佛注想西方念々罪除故清淨也の意とす、觀門義四十三字解釋參考。○又心口請釋迎佛——皆是佛恩力。二教發願。又心口。心念口言にて内外相應相資の意。釋迎佛等。三部大乘の意。釋迎。十方佛の請は觀門漸

九十九

愧の貌。弟子某甲等 自身の機分を信知す。弟子とは觀門の行者を指す。某甲 一人を指して一切に通せしむ。願佛慈悲等下は信法。所觀之境 弘願の體を指す。今願捨身命等 安心決定の相を明す。見以不見皆是佛力恩 上機は修觀し弘願の體を見る。下機は其を見ざるも往生の道理決定すれば、機り利鈍、今生の見不見の別あるも、臨終往生は別無ければ見不見俱に佛力恩と釋す。楷記五十四 見不見は正行差別なくも正因門に依れば一同にて皆佛恩也と。私記四十八 三義を擧げ聞見一同と辨釋す 可見。

○此語已——至心懺悔竟已 三更教懺悔

○即向靜處——一同前法 四教住心 前の懺悔心を結で正しく觀法を顯さんとする。

○既住心已徐々——方寸一尺等 五正教觀

此下は正しく觀法を明す。靜處は觀門に歸する處、自力ならば不靜處とす。

徐々轉心 自力の執を除て他力に歸す。觀門義四十五 觀門の道理を得れば其行相更に自力修行と

異ならず、次第に此法を修して進むべしとは、其執を除て其法を除かざる意である。

多境亂想 二意あり。一は十六觀を指す。二は究竟如虛空、廣大無邊際の地を指す。後心には十

六觀俱時に一心に觀すべき故、今初心なる故なり。方寸一尺等 心一境所の意、即ち水觀の一椀水に衆生の心水を收むと同意で、方寸一尺の地も廣大無際の地も稱樂に差別無れば漸々に觀じ得らるなり

○或一日二日——二三時等 六指時節

修行時節で上盡一形下至一念にて多少不論とす。

○無間日夜——未曾開 七示行相

行住坐臥は一切行法に通ず。身口意等 三業俱成の意。常與定合 他力行者は念々に定の義あり

萬事俱捨 自力ならば離捨、今他力故萬事に障へられずして捨の功あり。如失意雙盲等 他力に

て決定往生と信すれば餘心あれど無きが如し、是を失意雙盲等に喩ふ。

縱盡千年壽法等 上機を擧げ下機を攝す。縱ひ千年怠らず修するも他力を得ざれば不可生也と、

秘決(二九八)念佛行者の一期を千年壽とし、自力に留りて三業の功を守るを壽盡とあるは、得生の

意で可見。法眼 法眼に五眼を收む。示觀には開心の意で天眼とす。今は一重深く成て他力眼を開

也。秘決(二九八)法眼とは衆警の眼を指す。衆警を知らざれば法眼開かず、法眼は五眼なりとし、委

細の説明あり 必可見

○若心得定時——得爲比較也 八辨證相

他力觀門にて法眼開け觀成する時 或先有明相現(思惟位)或見寶地等(正受)種々出過凡境の

不思議の相を見ると。有二種も 先の思惟正受の二見とす、文意可見。

得爲比較 他力弘願の體は出過凡境にて娑婆にて無比喩也と。

○九從令其——種々莊嚴 九明寶華莊嚴三 一標

經の一々葉の葉は花びらで、花びらは花の莊嚴なれば種々莊嚴相と科す。

○即有其三一明——衆多光色

二先分節

一明衆寶色 經の作百寶色を釋す。數の百に非ず故備衆寶色と釋す。
二明下 脈は筋也一身を取集するが如し、約法すれば念佛を以て百寶と説き、八萬四千と自在に説明するは、一代の法も能く念佛の筋脈を以て活動す。天畫 楷記五共 用欽引云 畫字通 獲話
二音皆得文 今人多呼繪音者相傳訛也 此說參考すべし。
三明は脈有八萬四千光を釋す。經は光 釋は光色とは 光が色とす、或脈に若干色あり。色に若干の光ある意と見よ。

○此令行者住心——一切顯現應知

三總示

總示は上の三義を釋し、此等の義は總じて觀門行者の智を開かん爲と示す。一々想之。上三義其相甚だ多し、今他方に依て佛の境界華壓の形を知るに暗からざれば。一々想之悉令心眼得見と釋す。心眼は觀門の見、此見を秘決(全書二)云。心は智惠、眼は慈悲。智惠を以て法界を見るに、憂喜俱に今生に留て 出離の因とならず。慈悲を以て法界を見れば 憂喜俱に往生の衆譬と成て出離を成する也と。

既見華葉等 此下は前の蓮華の上の種々莊嚴を觀せしむ。或 下の文意を引上て義を示す。曰く韋提欣淨見土し、汝是凡夫と(示觀)佛意を領したる光臺を未來の爲に請じたるを十六觀と、開説されしものなれば、十六觀は廣げれど見る時は唯一念にある。故に下に想を六句とするは前六觀に配し、又下に配する意とす。秘決一經に配す 又觀門義 文解委し

如是次第等 次第とは華坐を指すも意は十六觀に通ず、十六觀は光臺を未來の爲に開説したるものなればなり。莊嚴一切顯現 上來法の功能を結す。是れ華座觀は住立來迎を以て所觀とする故今觀成して一切顯現し残り無し、其觀成とは來迎を見て往生を覺るを目的とす。此を廣義に釋せば世出一切万法は往生の一大事を以て最終の歸着とすると信すべきである。應知 文に先して義を叙す意。

○十從了了下辨觀成相 十辨觀成相

了了 上の了は能覺の智、下の了は所覺の行體、願行具足し法界身と顯れ皆令得見す。これ文は成就の法を結すと云へど、意は觀門を以て觀成すと云ふべし。

○十一從華葉小者——有種々莊嚴 十一明華葉莊嚴二 一標

經の一一葉間各有百億摩尼 映飾の釋意也

○即有其六一明——下覆寶地 二釋

一明華葉大小 小は最外の葉、又最内の葉、約法すれば華葉は定散にて差別あるも、經は小乘を擧げ大乘を顯す。爲に秘決(三〇二) 二百五十由旬は二十五有界を標すと云へり。
二華葉多少 經意は蓮華の念佛より八萬四千里法を開く也 楷記五、十九諸釋を引く可見。
三明は一一葉間摩尼珠王以爲映飾の文を釋す、四明は一一寶珠放千光明の文を釋す。
五明は其光如蓋七寶合成の文を釋す。六明は遍覆地上の文を釋す。上照虛空とは若干の葉間に若干の寶光台集し、虛空に上り遍く華臺及寶地に覆ふ義也。

○十二從釋迦毘陵——莊嚴之相

十二臺上莊嚴

釋迦毘陵伽摩尼を臺とし無量の寶を以て莊飾す、是れ觀佛の境界たる不思議の依正なれば、具述不可能で唯悉明莊嚴相と科す、又此文長けれど別釋せざるは先に申す通り不思議の功德にて具に述べべからざるが故とす。

○十三從於其臺上——莊嚴之相

十三幢上莊嚴二

寶幢の莊嚴の數は今の要に非ず、報土を義具に不可述の故、されど其を説くは唯莊嚴を示す爲也

○即有其四一明——輝光映飾

二釋

一明下 上來經文は委説し釋文は大綱なるは、經文別の意趣を含まざれば、單に莊嚴の相を大綱にて釋されたか。二明 一々臺上如百億須彌山の文也。幢は念佛にて佛法の柱(寶樹)とす。山は慈悲とす。此柱慈悲と示す爲に百億須彌山と云ふ。

三明天とは十方を覆ふに喩ふ。四柱寶幢を須彌山に喩へ、幢上寶幢を夜摩天に喩ふは、幢上は横に寶幢を張る形は須彌山上に夜摩天宮有るに似たり。四明は幢上寶珠を以て映飾せり。

○十四從一々寶珠——不思議德用之相

十四珠光德用二

德用は功徳力用 光明金色異相等は功徳、施作佛串は力用とす。

○即有其五一明——徧滿十方

二釋

前四可見 五明金臺は迎接有縁の具、意として寶樂を加ふ其意可知、意約して云一明は一々寶珠の念佛が八万四千の法と顯る 二明は一々光の念佛より來迎と顯る。異種とは來迎の體山河大地と

爲す。法界の依正と顯れて利益を爲す。三明は一一金色たる念佛が其寶土の聖衆の心中に遍す。四明は處々の法界に遍して一切を利益す。五明は金臺の定散が珠網の來迎と顯れ隨意施作佛事する意と仰ぐべきなり。問九科下の令其蓮華の觀成たる十一十二三十三十四の科を引上げて釋するは云何、答深意あり、顯現三相を示す。即次第觀に非ず、自然任運に一切の莊嚴現する爲なり。故に了了分明と云ふ。問爾らば了了分明下に別に莊嚴を出すは云何 答弘願定中に現する義を示す。上へ引上げて釋するは能説所説の位、十一科の下は能爲所爲の自開散善の定中現也、故に了了分明より下を出すこと知れ。

○十五從是爲下總結觀名 十五總結觀名

此文見易けれど當觀は一經の肝要なれば 秘決(三〇三)華座觀結名に六義を擧て委説す可見。意云 除若惱法に住立の佛を攝して觀名を結するに就て六義あり、一依正異 二開見異 三因果異 四悲智異 五淨穢異 六定散異云云 必可見

○十六從佛告阿難——華座得成所由 十六華座得成所由

所由は所依の義、華座は何に依て得成するか、法藏比丘願力を所依として成する也。問經に妙華、釋に華座と相違するは如何、答相違に非ず、華は妙華、座は法藏比丘願力所成の座座即蓮也 蓮は果なれば華中の蓮(果)で法藏比丘願力所成の座とは云ふ。此故に經文も釋も俱に因となる。即經の妙華も因、法藏比丘願力所成の座も因とす。若し依正觀門弘願を分て云へば、妙華は依報、法藏比丘願力所成は正報。觀門は妙華、願力は弘願。釋でも華座は依報、所由は正報

の願力を指す。衆生に約すれば、妙華は衆生の三心、其三心は法藏比丘願力所成也。三心に法藏比丘願力の來迎を收め是爲華座想と結名した、秘決(三〇五)妙華は因の窮とあるは、衆生の迷である次に法藏比丘願力所成は果の窮りで正覺也とは、無有出離之縁の最下の機の上に正覺を成じ給ふ義とすべし。委は本書の如し。

楷記五。三三義 第一義は寶香合成の願を取ると 第二義は(約觀門)四十八願を總じて華座得成の願とす。第三義は(約弘願)一一願言の名號に收て四十八願皆と云てある 三義俱に取るべし。觀門義四。二又三義、第一義は酬因感果の義で華座と云ふも衆生に約せず只佛果の上にて座と云ふ。第二義は觀門の説が能詮となり、華座所依の弘願の功德を顯也、第三義は華座即佛體として、觀門の華座は本弘願より開く故、華座を直ちに弘願とす。他筆抄中、西初に問答(此は楷記三三三尊に依正具足するを願力所成の體とすと。第二義は願力所成とは欣淨密益の體で即三尊である。す。即ち下品の金華來應で一經の本意、此觀に顯れば此下に於て華座得成と釋された。已上諸末釋多説あるも、觀門義 他筆の説を翫味すべし。

○十七從若欲念彼——重顯觀儀 十七重顯觀儀二 一標 經の彼佛は住立佛體、念は定中顯現を念する意とす。此下秘決(三〇六)委説可見。經文に就て如於鏡中自見面像と云ひ、序分に如執明鏡とある相違は、序分は韋提領解の位なれば執明鏡、是は佛の說を取て面像を見る也、即自力の心を捨て他力を取る義なれば、一分の機を離れざる思惟の位と

す、今如於鏡中とは、正く弘願に入り終て依止位を同じ依報も正報と云はれて、弘願定中に任運に顯れ思慮分別せざる正受三昧の位なれば、如於と云て如執とは云はざるなり。是れ離三業の位、定中顯現は他力來迎の義とす。そこで面像とは我貌、我往生すれば皆攝化利生の形とす。形とは皆無量壽佛なれば、我面は即佛體にて弘願鏡中に歸て、我面像を見れば法界の松竹等は、我爲には依報となり、面像は正報となる。されば信仰眼より、此法界は他力慈悲の體と見らるれば、皆攝化利生の有様にて依正具足し、正受三昧の鏡中に同一時に顯現す。其鏡中とは三界唯一心の道理にて定中弘願の體と顯るのである。重とは經文に當先作此華座想とある故 又前六は觀想の位 今は觀成の位、慈悲の體を見る故、前六に對して重と云ふ。此意は序に觀想を説き(示觀縁 今住立所觀の境を説き顯す故、重て顯觀儀と云ふ。又一義前定中顯現を重て觀する義

○如前次第住心不得雜亂也 二釋 觀門の儀式たる一一の所説不可亂の故 如前次第住心等と釋す。重顯觀儀は若欲念彼佛者の文を指し、如前次第住心は前此華座の文。又日觀より惣觀に至り、能觀の心亂ること無く之を觀する也と、不得雜亂 作此想時不得雜亂已下の文を指す。一一觀之已下の文は前六觀に配す 秘決參照(三〇六)曰く 一一觀之(一觀) 葉 珠 光 臺 幢の六とす。今は觀日見日等の定善(諸經意)たる所觀の境を立せず、必ず住立の佛體と通ず、之を觀境とせんとして上來の觀成を收めん爲に亦重ねて之を明されたと見よ。

十七科の皆令分明の觀成を合して結する意、是れ前の如く一一觀すれば、心見 眼見 二種の見成すと示す。

百八

○即有二益——得生益

二釋

一明除罪益 經文滅除五万劫生死之罪とありて、即便除苦惱法の益とす。即ち除苦惱法の法を聞は除罪の益なり。住立佛を見るを得生益とし當得の益とす。二明は經文必定當生極樂世界の文、又觀念阿宗にも配すべし。觀門義四の三心見眼見とあるは、異方便の見の上に二種の見を分別し、又見は觀門にて唯識知 思惟(分別)して見る故心見とし、眼見とは弘願の位にて、松は松と見ず只來迎の慈悲の體と見る故眼見と云ふ。心見は觀門の位松をば松と見、其見を離れざる識知の分齊とす。○十九從作是觀者——辨觀邪正相 十九辨觀邪正二 一標 邪止は行者の至要なれば觀々に邪正の義を分別す。是れ觀益を明し已て邪正を辨す。正觀は住立の佛體とす。

○斯乃華依——光施佛事

二釋

此下は讚歎なり、華は華座、寶地は地觀 葉間奇珍臺瑩 別して華座莊嚴を結す。光施佛事 弘願海中に入れば一一の文中悉く攝取不捨の意あるなり。

○上來雖有十九句不同廣明華座觀竟

三結

○像

觀

來意は玄義釋名門に 佛恐乍想真容無由顯現 故使假立真像以住心想云云とあるは此意とす。

得名に就て諸師は真應二身(第八第九)と判釋するも、導師の意を伺ふに三身門の外に真假に對し淨土の彌陀佛をば願酬因の報身と立し、第八は假像第九は真身と判釋されて、第八の像をば娑婆の畫像木像と示されたのであらう。爲に他筆抄中五先凡夫の爲に說顯すとは、像を説て凡夫の見を成すと仰せられたのも此意味であるが、而し秘決の意に依ると(三〇七)像は名で體を具する意味で像とは名にして我等も三心能發の上は即無量壽佛にて此體より南無阿彌陀佛の名の顯る貌とす。此我等を諸佛如來と云ふ名に窮る穢土中成佛の位で名の位では利益無し、されど火は焼き水は潤すと云ふ體を見れば攝取の利益あるなり。名は必ず體を顯す故、只念佛三昧の位とす。問經文を見に佛告阿難より三佛陀に至る迄形像の文に非ず真佛とす何ぞ像觀中に標するか、答經文に其意味ある。謂ゆる先に依報見の上に正報見を示し、正報見の上に依報見を許す事を顯して此佛は真假一體し、凡夫の爲に成すといふ意味で、第八像觀に第九の真佛を説入したるものであると見るべし。

○八就像觀中——即有十三

八像觀三

一標

先舉 總じては別科の第五句、別しては第五句の總彼佛者先當想像の文を取る。

○一從佛告阿難——想佛者何

二釋十三

一結前生後

結前は見此事已、生後は次當想佛也。見此事已とは華座を見已てなり。次當想佛の佛は第七の住立と第九の真身をも收む。故に所以者何の文も次當想佛より出て正因とし所以者何を三度觀するのである。次當の次とは他筆中十八意は第七觀第十七科若欲念彼佛者當先作此の先に對し次と云ふ。

百九

此より前は依報に属す。觀門義四。三七第七觀に次でと云ふ、此意は傍正の位、惣じて取る義、他筆は廢立念佛三昧の位と見られてある。

言所以者何——想佛者何 此句を第十三の大文に取らざる意は、須想佛と云ふ。佛とは三身で、華座は應身 像觀は報身 眞身は法身で「註記參照」此三身に通ずる故所以者何の句を以て十三の文段已外とし三觀に互す意と可見。私記四。廿五云此句は如來の自問也、初觀に云何作想、散善に我等爲三等も自問なるに、前後は大科に入れ 此句に局り文段外とするは云何と問て、答には前後は常體を問ふ觀佛の位、今は想佛の理由を問ふ念佛の位で、此念佛は一經に互れば文段已外とすと云云 他筆中。六八觀門義四。廿三 格記六一丁各舉一義とす 可見

○二從諸佛如來——應心即便 二卅諸佛應心即現三 一標

諸佛等とは言惣意別で、彌陀の大慈悲が行者の三心具足の心に相應して現じ給ふ也。

諸佛大悲 格記六二丁 涅槃經引云 我實不往 彼亦不來 慈善力故 見如此事云云

○有斯勝益故勸汝想之 二惣略釋 勝益 應心即現故往生の大益ある也、彌陀法界身一切衆生の心想に入る故 汝(韋提未來)を勸て之を思はしむと。

○問曰韋提上請——有何意也 三別釋三 一料簡法界身二 一問

此問答は諸佛も彌陀の功德ある事を明す。彌陀の功德とは弘願の體なれば也。上請 第七觀の我今因佛力故 得見無量壽佛乃至及二菩薩の文、釋には爲物致請 同已往生也。

未審 諸佛所證 功德三身を總て取て彌陀を諸佛と云ふか。又三身中法界の一を以て彌陀を諸佛と云ふか、又覺行窮滿の位で諸佛と云ふかと三義を合て未審と云ふ。秘決(三〇八)一義 第一義は彌陀を所同とし諸佛を能同とす。第二義は諸佛所同彌陀能同とす。何有意也 意は第八觀の念佛を問題す。

○答曰欲顯諸佛——時臨法界 二答

初四句は諸佛如來の句義を釋す。端身等は入心想の義を釋す。悲は覺他の功德 智は自覺の功德 果圓は覺行窮滿の功德で、此則三身同證の佛の義とす。等齊 諸佛の諸の字を釋す。無二 諸佛彌陀無二、即三世十方諸佛三覺窮滿の義無差別也。端身一座影現無方 上の三覺圓滿の功德を釋す 智圓の故(自覺)端身一座して更に動轉せず、悲圓の故(覺他)影現無方也、自是非他の區別無く隨逐影現無方とすべし。意赴有緣時臨法界 意は彌陀利生の本意にて彌陀と諸佛との意とす。曰く彌陀の意が有緣に赴く時諸佛も同じく法界に臨む 赴は現也。臨法界 諸佛法界の機に臨で利益し給ふ事は有緣たる念佛行者を攝取するより顯る故也、他筆中。六八法界者 法界衆生の歸命心を體に得て成じ給ふ功德也と云云。

○言法界者——故解法界

二釋法界身三字三

一釋法界三義

法界とは衆生界也とは 此衆生の上に成じ給へる身心無礙の謂なる故、心が法界衆生に遍する時、彌陀の圓滿無障礙の智が衆生の想心を悟り給ふと云ふ意也。心とは佛心で此心が法界衆生を照し其機に應臨して此を攝す。身徧とは心身一同なれば刹那の間も相應す。無礙 已に三業相應すれば

佛心は法界衆生を隔てず、此徳全く弘願に顯れて無障礙の故法界を悟り得る也。此三義を私記四
 五三三心三縁に約し。秘決(全書一三〇九)三身に約す。一者心徧の心を山師は佛心と釋されて衆生を利益す
 る心としてある。今此三義を捨大悲捨本願の意にて説明すれば、我等は無有出離なれば一分も領解
 の機無し、唯弘願他力に約して解せば二尊の大悲心が遍じて法界の機を悟解し、第二佛身遍じて法
 界衆生の機を悟解し給ふに、心身遍滿する故無障礙に法界衆生の機を悟り得らるるとすれば、全分他
 力で一分も功を持せざる釋意である。然に今入衆生心想中と説たれば機方にかけても可解。曰く佛
 心が能く衆生の心中に遍する故法界衆生に解せしむ。又佛心が心想に入て遍すれば法界の衆生能く
 之を領解す。又佛の心身遍する故、無礙に衆生に領解せしめて生佛一如の覺を成すと見るべし、又
 秘決(三〇九)解は三心、法界は出離生死往生極樂の名也と云云。問身字を除く意云何、答法界の上
 に身を見ず、衆生を離て行體無れば法界が即是其行なる故身をば擧ざる也。
 ○正由心到故——法界身也。二合釋

心身無碍にして法界に遍すれば法界身と名く、到は遍也處として到らざる無きを到と名く。楷記
 六。五身心相應に就て涅槃を引經し問答す可見。意は身心相應二義 自在而隨 不自在而隨云云
 觀門義四 五意云法界身は無色無形にて捕捉し得べからず、心法界に遍する相心感知し易し、心
 に相應する身なれば身も法界なりと云ふ事を釋成すと。他筆の意は心は至心信樂の三心 身は我等
 の行體の身で、至心信樂の心(三心)を所依としての成正覺なれば、我等發三心するが無量壽佛の
 身にして、法界の有機が我心の儘で、柳綠花紅其儘を慈悲心の發露と見れば爰に於て他筆中十九

修徳の報身衆生の想心より成じ給ふ也と云云可見

故言是法界身也 十方衆生——我國者(因位)法界者(果位) 發願位 三心發得の衆生
 乃至十念——正覺 (因位) 身者 (果位) 阿彌陀佛者即是其行の體。

此因願成就し正覺成じたる位置を法界身とは云ふ。如此機法の二が合致し、佛の正覺、衆生往生
 と成立するを法界身と稱し、此身を南無阿彌陀佛と云ひ、稱我名號酬因之身と云て名體不二と成立
 する報身なれば、諸佛は所求に正覺を成す、彌陀は機の上に正覺を成すとは此義である。故に導師
 は願に酬ひたる報身と釋されて、此を法界身と證得し給ふたかと愚考す。諸師は三身中の法身を法
 界身と釋されたの間違があると思ふ。

○言法界者——即諸佛身也 三通釋法界身

先に言是法界身と結釋し乍ら又出す故通門の釋とす。釋名門の如く口音陳唱の聲より又如來と化
 前に立還ての釋である。所化之境、 理性の衆生を所化の境界と爲す。序題の眞如體量々不出盡々
 之心の意味で、理具成佛の義とす。宗意で云へば所化之境とは、至心信樂を體とし成正覺したる十
 界因位の理法界とす。言身者等 身は能化所化冥合し其體無二とす。曰く諸佛は衆生に依て住し、
 衆生は諸佛の中に在て住す、其諸佛とは言通意味で即彌陀を指す也。

○言入衆生心想中——即成此義也 三釋法界身意味

一切の二字略すは秘決云所化の機は萬差なる故一切衆生と云ふも、能化の佛は一種なれば一切の
 二字を略すと 衆生起念||親縁。願見諸佛||近縁。佛即以無碍智||増上縁。又無礙智は先の心身遍

無障礙圓滿の智也。知とは心を以て知る也。即已下は身を現して入る義とす。實は一念遍知に即現して無前無後とす。但諸行者等起念願見の機に定散ありて、定機は想念中に見、散機は夢定中或は臨終見也。秘決(三書一)想念は平生即便往生證得、夢定は臨終往生也。問佛身法界に遍す何ぞ起念願見を得ん。又念願するも不見者多し何ぞ心身遍無碍と云ふか。答佛身遍するも凡眼不見佛智無礙なるも生身自礙す。華嚴經云 或見衆生如來座充滿十方界、衆生罪所障離近而不見(六十卷普賢說偈) 楷引 註論云碍屬衆生非光礙也。

○三從是故汝等——正明結勸利益 三結勸利益二

一標科

先科に已に諸佛心中に現すると釋明したれば、今は一切衆生の心即諸佛の功德なりと明して、汝等の心に想佛する時、此想心を三十二相等と成立すと利益を結し、其を衆生に勸む。經の是故汝等は前の觀修利益を結す、益とは見佛也。

○此明標心——具足觀也 二釋三

初出正義四

一明心即佛相

標心は三心 想佛は他力の行に向ひたる意とす。但作佛解 一一の相好往生の想を作せと云ふ意 玄義では法界万像の上に佛の(三十二相)功德は慈悲の體と領解せよと也。觀門義四七佛解とは衆生を度す佛の悟也とありて、一一相好各々の光明之を聞は、佛の衆生を度し給ふ悟となるなり。此が即佛解であるを見るべし。從頂至足等 佛解の理由を説明す。曰く無見頂相より千輻輪相に至る三十二相にて、是心即是三十二相と説けり。而して觀想には非ず、但作佛解の時に觀想の義成する三心既具無行不成の意である。又云今佛頂とも云はず只頂足と云は法界万像の形を見、一樹の上

より下まで行體と見て三十二相の想ひを成する意と可見。一觀之無暫休息 塵々法々弘願内證と證り慈悲の體と信すれば念々不捨者の攝取と見るべき也。或想頂相等 上は正因具足觀、此下は正行で、一相を思へば一相の境界佛の功德と顯る。

作此想時 上來の三十二相を指して此想と云ふ 佛像端嚴等 眞佛なるに佛像とは此は眞假一體

を叫す。又禮讚に依心起想表眞容 眞容寶像臨華座の意也。了了而現とは第九門の境とす。平生な

らば罪を以て見を成す。乃由心緣等 心とは衆生の心で其心に應じ佛心が到る也。緣一一相は思惟

一一相現は正受三昧とす。此觀解は凡夫の念に及ばざるも願力加被の故、己心の理佛を觀せざる

も自心既に成佛するを是心即是三十二相と結釋された。即應而現 想心に應じて現じ給へるので

あるか(三書一) 此心より此想現すとすは、衆生の惡心より佛正覺を成するなり。我心より佛相を顯す

事を應心而現と釋されたと見てある。三十二相は超人相、八十等は超天相、人は智、天は慈悲なれ

ば、佛は人天を超越し給へば無上尊と稱す。佛相既現衆好皆隨也、相は大 知は細相なれば相現す

れば好は必ず附隨す。諸想者具足觀也 楷記六十問答あるも、山師の意は(觀門義)眞假大小を等

く佛相を緣すと思ひ、弘願に歸すれば、是故なる特に具足觀と也。

○言是心作佛者——緣相如作也 二明是心作佛

願力成就の化佛を信し一一の相を緣し、各々の相を思へば此緣相に依て佛體の顯れ給ふ事は自己心中の佛を觀じたると同じく彼も斷惑開悟し、是も出離生死すれば理として一同とす。秘決(三書一)是來迎也、來迎は三心より作る故云云

○是言心是佛——無異佛者也 三明是心是佛

秘決云 是定散也、能譬の心を所譬の體に攝し法界を衆譬と覺るが故に離此心外更無異佛者也
問心作心是の差別如何、答 凡心より云へば心作佛也、佛心現するは心是佛也、至心信樂すれば
佛體成じ給へば是心佛と云ふ、此心發て佛體成すれば心作佛である。此心發て信樂すれば心外に佛
無し是を心是佛と云ふ。問大小二經に正覺の時節を説き、今經に不説は云何、答二經は修徳の報身
たるを明して時節を説き、今經は、我等の至心信樂の心即佛正覺の體なる事を明して別に正覺の時
節をば説かざるなりと云ふは、佛の正覺は衆生の往生で衆生の往生は佛の正覺なればなり。
離此心外更無異佛 上の二義を結し唯心の意を顯す。楷記六十一論註を引曰 譬如火從木出(作
佛)不得離木 是佛)以不離木 故則能燒木 木爲火燒 木即爲火也 云云 尙此下心内心外の辨明
ある必可見。

○言諸佛正徧知——似如生地 四明佛從心生

圓滿無障礙智は前の心身徧の無碍智で、即大悲利物の智とす。此智法界に遍滿し到らざる處無く
衆機を照し殘す處無くば圓滿と云ふ。作意不作意は思ふ時も思はざる時も、常恒不斷に衆生の心を
知り給ふを云ふ。但能等 佛智は知らざる時無くも、作意して念する心に依て現じ給へば心より生
するが如し故似如と釋す。似如とは實に生ずるには非ず元來常徧す始生には非ず。故に生即無生也
正徧知とは 眞如法界の如くして而も知る智也、別深廣不可測量の故に海に譬へた。
問上來の四節は何等の義を詮表するか。答法界身の義を釋し以て修觀の所以を明す、先に法界身

入衆生心想中を略して其由を標し、此文は廣く其義を轉釋し以て觀益を勸むる故、正明結勸利益と
云云。轉釋の意は佛法界身は心想中に入る、是故に心想佛時に是心即ち相好一是心作佛佛相好故二
是心是佛身也三故 上來三節は佛心徧無礙故に法界を解する義を明し、正徧知の四一節は佛
心遍するに無礙の故、法界を解する義を明す。されど四節は不離で心徧に依て身も隨て亦徧すれば
なり。

○或有行者——少分相似也 次斥錯解二 一舉他解略示其非

今經の本意自心成佛の意志を説に非ず、然るを他師此意を得ずして諸經所説の無相成佛の義を主
張したるを破斥す。或有行者等 行者とは 傳通記は淨影天臺嘉祥の三氏と云ふを楷記六十四評し
て曰 若し三師ならば玄義分の如く諸師と云べし、是導師時代の解行不同の覺者也とて、攝論三論
法華涅槃等の所觀也と云云。觀門義四九攝論地論二宗の教義とす、他筆同じ、下にて知るべし、
つまり導師時代に於ける代表的二師を擧て惣破された。

一門は 觀門義は觀門とし十六觀に互してある、秘決(全書二)當觀とす。此意は一代は空觀である
、今經は事觀であれば相違するに、同一とする故破斥すと、唯識法身之觀山師云 攝論の唯識觀
で眞諦の所立であると。自性清淨佛觀 地論宗の所明にて 清淨眞如理である。此れ二家の誤解
を指摘し 餘師をして悉く破斥せられた、即ち一分似たりと云ふも、一分も相似せずと云ふも、惣
じて十六觀門他力の義は、諸師の自力修行に異なれば其を明された。其意可知。秘決は有無の二家
を擧げ一切を攝すと云云 其意同じく或の字に就て、此不定の言は一分許す義。

無少分相似と云ふ義は、一代の法相は五乗の用あれば相違せざるも自力他力を相違すれば今は破斥す。九品にて或讀不讀 玄義分に未必然也とは一分他師の情を破するのみ、何となれば唯識法身も、自性清淨も一分他力を領解し、法界身と知は唯識法身也、法界身は何より生ずと云へば、諸佛正徧知より生ず。是れが自性清淨心である。即ち今は觀門より説明す、五乗の用なれば一分は許す義ある。要するに一分は自力一分は他力の相違あるのみ、或の言も及の字に准せば相違を明し、又合集して一分許す義をも顯す也

○既言想像假立三十二相者 二對經文廣斥破二 先對當觀

今經は無相法身の理觀を説ざる意味を明す。想像は眞假等しく有相で像も有相、三十二相も事觀也と知らる。

○眞如法界身——之體也 二對破

此一節は諸師の意を擧て破す、曰く諸師は法身は無色無形無相なりの見地で以て、此の所説の三十二相を釋せば忽ちに相違す。これ事理不二は今家の所論に非ず、事理を差別し其上に互に妨げずして、自力觀に不堪と知て正しく觀門を立し説示すべきものとす。

法身無色等 具には無色聲香味等と云べし、曰く法身は非色非香、眼に見、耳に聽くべきものに非ざれば、凡夫の比較し可知性の法に非すと示す。故取虛空等 虛空は無爲法造作を離れて其體常住なれば此譬を以て凡夫に示す

○又今此觀門等 二對諸觀二 一舉經文

上二家の唯識佛性の觀を叫すと結し、如來懸知 今經の本意凡夫の爲なる事を釋成す。如來とは娑婆の化主。懸知とは百歲後の時機を知り給ふ。罪濁 十惡五濁。立相住心尙不能得は唯無相離念の觀のみならず、自力修行尙難し、只觀門の事相能く弘願他力を説て、凡夫の歸心を勧め給ふと説明す。曰く無相離念は聖者の習得指方立相は凡夫の行也。是尙顯行面には難成、何況や法身理觀をやと。

○何況離相——立舍也 二正斥破

指方立相すら尙經の本意に非ず、况や二家所執たる無相離念の觀法は經意に契はずと、喩を擧て無相觀を簡ばれた。

○四從相故應當——觀彼佛也 四展轉教觀彼佛

第三科を展轉し佛の功德を觀せよと勸む、今此經文に諦觀彼佛と説故に。所益とは、法界身の謂也。彼佛は所現に約せば法界身にて即第七觀の佛、所説の上よりは第九觀の佛とす、已上第四科迄は上の所以者何の句を答終へる。

○五從想彼佛者——定所觀境 五展轉前後定所觀境

想彼佛者は、前の想佛を牒し、先當已下は其想佛の行相を釋し所觀の境を定む所觀境とは形像は其境也、先當想像とは像を以て眞を表す。私記四三十二文點可見。

○六從閉目開目——辨觀成相 六辨觀成相二 一標

觀成とは行す非ず見る位を所説し行成とし定善と云ふ、此を識知し見る位を行成とし、觀成と

す、私記四四十委説

○即有其四一明——常作此想 二釋二

先細科四 一明常見寶像相

四威儀等は經文不説なるも、入定の時必ず端座し閉目すべし、然を經文開目とあるは四威儀を簡ばす常に想念するを今經の詮とする事知るべし。見一金像 祕決云一は慈悲、金は西方、像は娑婆万像也とありて、万像は皆來迎の體なれば、日に向ひ月に向ひ草木に向ひ皆來迎に向ふの想念を作す也(全書二) 觀門義四 二三十 今見は眼見と異り、見る想を爲すに光明の利益を思て、弘願念佛に歸すれば見の義成ず、此を指して似現目前と云云、是行住座臥の四威儀に見の想に住するを云ふのである。極言せば四威儀に慈悲の體と領解せば睡明一夜報佛酬因で只念佛三昧の位也。

○二明既能觀像——在上而座 二明座前華座想

既能觀像 祕決曰機也と、華座は第七の八万葉也、形像の佛は小なるも眞假一體を顯す。觀門義の意は經釋倒置したるは、經は從因向果にて先づ華座を觀じ機より佛に向ふ方面で、釋文は從果向因、十方衆生が(像の)華座の本願に乗する義と見るべしと。須有在處、安心領解の時華座に座す像在上而座 我等本來本願に乗する義、祕決意は想前、華座は諸佛位、想像在上而座は彌陀の位須有坐處は衆生位にて、衆生と諸佛と彌陀と又定念來迎の三重也と示してある可見。

○三明想見像座已心眼即開 三明想已心眼開

見像座已心眼得見の文を釋す 祕決(全書一)必可見。

○四明心眼既開——了然無礙 四明見像及莊嚴

了了分明見極樂の文を釋す。地上虚空等の一切の莊嚴顯るは、正報成せば依報自ら顯る即定中頓現の形也(全書一)必可見。

○又觀像住心——即自然了也 次明觀法儀式

一如前説 上の三句或は日觀等に同す故如前と云ふ。從頂一一想之 下は別して今觀法の次第を示す、曰く惣雜して觀すべからず一具に觀せよと也。面眉毫相等 下は順逆二觀中先順觀を示す又抽心向上已下 逆觀を明す。又佛身等 一一の觀順逆に觀せよと明す。佛身は第九觀、華座は七觀、及は像觀を攝す。若欲教人等は、正しく此法の要なる事を釋す、曰く一即一切で一法成せば十三觀具足して成すと。但此下 楷記は座地通觀之益と科す。又順逆に就て祕決は順觀は佛の方より來迎を垂る當得往生、逆觀は我方より佛を念す即便往生、順は臨終、逆は平生也と云云此意深妙とす。又寶地金像等に就て深意を釋出す(全書一)必參照。

○七從見以已下——二菩薩觀也 七結上生下

經文見此事已を結前生後と科すは、結前の文あるも生後の文無し。其を生後と科する意は、見像文は次第説必で結前のみなるも、義は前後にある。意は第七觀で三尊を明せば今は第八觀なるも

見一寶像の句中に二菩薩は必ずある。第七は一光三尊、今は一尊にて即三尊なる義意を示す、これ第七は一の慈悲で第八は其慈悲の體三尊なるを明せばなり

上像身觀とは楷記六二十は依文釋、山師祕決の意は不可名佛像觀 何とならば像身觀中に衆生と諸

佛と彌陀とを收むればなり。此三身不離を像と云ふ、若し佛像觀と云へば單に佛に限る。今三位を（衆生佛諸佛）通せしめん爲に像身觀と云ふ。曰く報身は衆生平生往生離れて佛正覺無ればなり法界身は衆生と佛とを合して申す、三身獨り三身ならず衆生に依て三身あればなり委説は如秘決の八從復當更作——多身觀 八成上三身觀生後多身觀二 一標
經文の如くならば辨二菩薩觀とすべきに、上三身觀等と釋するは、説必次第には前後あるも、見一寶像中に菩薩も收まる意を明す。觀門義他筆秘決楷記等參照
○欲觀此二——觀佛法也 二釋義

二菩薩の文は今説くも、意は像中に兼てあれば像觀と同く結して生多身觀とし。一如觀佛法也と釋し上の順逆二の觀法と同じたる也。

○九從此想成時——後説法相 九成上多身觀生後説法相二 一標

科意は第八科の如し、多身觀とは經に一佛二菩薩像遍滿彼國と説故、一佛二菩薩遍滿すれば諸佛同く遍滿し給ふ。秘決云（全書二）像身は彌陀、三身は諸佛、多身は衆生也、彌陀の願より念佛を顯し念佛より衆生顯る故也と。又曰韋提彌陀を見んと請ふ、佛は諸佛如來と説く故像身は即三身也、又法界身人一切衆生心想中と説故、三身即多身也。

○此明諸行——常作此解也 二釋

觀門たる觀法の主眼は念佛三昧に歸して攝取不捨と知るあり。必中定中所見に非ず、爲に常作此解也と結釋された意味をよく知るべし。又秘決云 今日迄流轉するは極樂を本家と覺らざれば、今

に生死を出てあるなり、故常作此解と云ふと。寶樹は菓に極て本家の利益あり。寶樓は衆生の本家華は來迎 池は佛法味、禮念は念佛三昧、觀相は觀佛三昧也と云云

○十從此想成時——見極樂莊嚴 十因定見莊嚴二 一標

此想成時は上の多身觀を指す、一一の樹下三尊在すと見る時總て説をも聞べし

○又聞一切——定心也 二釋

已下正く經文を釋す、一切莊嚴は水流光明鳧雁鸞鷲等也、既見已下は聞見一同で、定中所見と又聞法と出定の時不忘 今經の説に相應するを守定心と釋す。

○十一從令與修多羅合——邪正之相 十一辨觀邪正

秘決（全書一）云 諸觀の邪正は此觀に顯る、合修多羅とは觀經の定散衆譬也、法界を衆譬と知すして之を見れば妄相とす。即ち定散の二法を以て法界を廣説衆譬と聞く時万像を往生の譬と見る、是を衆相を以て極樂を見るとす。衆相とは他也と云云 【△とす 又尅念は經所説の得念

○十二從是爲已下總結 十二總結

佛三昧 修觀は作是觀者也

○十三從作是觀者——現蒙利益 十三現蒙利益二 一標

是觀 上來の正因正行觀を總結す、佛告阿難より三佛陀に至る正因觀、已下は正行觀とす。尅念正因觀、修觀は正行觀、△、◇、現蒙利益、於現身中得念佛三昧也、一切万像を衆譬と覺れば万法は名に極り唯一の名號と顯れ睡明一夜報佛の體、是を於現身中得念佛三昧と云ふ。

問當觀は觀佛三昧なるべし何ぞ念佛三昧と云ふか、答楷記六十五に彼家は口稱を主張する故第八

觀の念佛三昧は觀稱に通ず、第九觀は稱名に局ると釋するも此義淺近とす。山師他事中^{廿五}曰能詮の道理顯れば必ず所詮の名號を説く故、當觀特に念佛三昧を説と、又觀門義四^{三十}參照。

○斯乃群生——注心形像 二釋

上來第七觀に三尊現じ、第八觀に像を以て三尊を一觀に説き、現身中念佛三昧を明し、眞を説には又三尊各別に三觀に説く、これ七八九觀は一體なれば、觀門義に形像を觀じて念佛を得る事、眞身を觀じて念佛攝取と知ると其意同じ、斯く意得れば眞身を觀すること難事に非ず。弘願念佛に歸すべき故にと、文意を深く見て釋してある。

○上來雖有十三句不同廣明像觀竟 三結

◎眞身觀

これ正しく極樂の眞佛別願所成の報身也、永く凡夫に於て迎接無き佛と定判し、一座無而亦不動眞身寂靜無迎接相と釋せり。總じて諸佛三身門の位に於ては曾て報身の形を改ずして娑婆に來る事無し。今師は通三身門の外に別願酬因の報身と判じ、凡夫を迎接し給ふ大悲深重の佛と證得し給ふ故に、四十八願一願言若我成佛十方衆生稱我名號乃至今既成佛即是酬因之身と釋し給へり。故知の第七觀にては穢質の凡夫に親み、第八觀にては法界身と顯れ、當觀にては念佛衆生攝取不捨と示し、上々品に至ては報身兼化俱來授手とあれば別願酬因の佛とは云はずして何ぞや、そして此佛に惣相(自覺)別相(覺他)の二徳ある、即ち身相と光明の二とす、下に至て知れ。

次に來意を辨せば前の第八觀に娑婆の形像も一切万像も同く慈悲攝取の利益ありと領證し、於現

身中得念佛三昧の位に至る。これ既に第八觀に於て第九眞觀に至るなり、是を説に移して第九と示したるものなれば像觀と相對し、眞佛化佛一體と示す其を示觀領解と云ふ。領解とは依正具足し見佛する謂で、即第七の住立三尊とす、此三尊は除苦惱法の聲に應じ、聞見一體の徳がある。此をば第八觀には法界身とし假と説き當觀には眞佛と説き給ふた。

得名に就て、第九を大身、第七を小身とし皆悉金色と説は、悉皆金色の願にて四十八名號酬因の義なれば眞身觀と釋す、これ不實の衆生の爲め眞實心と成せる惣別一致の佛身なる義を顯す故に、諸師の眞身を無迎接相と、釋したると其意大に異にす。

○九就眞身觀中——即有十二 九眞身觀三 一標

○一從佛告阿難——眞身之觀也 二釋十二 一結前生後

結前生後 觀門義五^一云若唯釋觀面 結前生後義 不可強在乎とは、上來の觀は次當想佛已來は正明結前生後と云ふのみで、當觀の如く結成前像觀等と細釋せず、當觀に斯く細釋するは弘願を明すと知らる。又眞假一體の義と爲す。又遍觀一切とは眞身を法界身と結成する義とも見らる。又當觀は餘觀に似ず別して再度阿難に告命し(佛告阿難、阿難當知)て、無量壽佛に身相と光明の二つを説と告命したるは、未來の爲に流通し給ふ意味である。爲に當觀に惣相(觀佛)別相(念佛)の二徳あるは、これ身相と光明の二とす。初に惣相の徳をば惣觀身相と釋すは、總願修行に酬る自覺修證の位、次に別相の徳を、觀身別相と釋し別願に酬る覺他圓滿の位とす。又此總別に就て自然二意ある。一は惣相別相身相光明等皆差別し以て、惣觀身相の自覺を捨て、別相覺他の光明を執る法

門とす、二には釋の始終に一一に惣相を擧げ而も此相より出す處の光明を 唯念佛衆生攝取不捨と明す。此佛はこれ身量相好内證外用皆名號酬因と成し給ふ故也、而して此惣別の相とは兩三昧なれば、導師は當觀より兩三昧を釋出された、謂く惣觀身相は觀佛、觀身別相は念佛、一經は此兩宗を體とす、委くは宗旨門の如し。別して阿難に告命するは、地觀は汝持佛語を面とし、第七觀は妙華願力所成を面とし、今は身相光明が一經の兩三昧なれば餘觀には似ざるものと知れ。

經文に更觀身相光明とは楷記七二二義（觀佛念佛）あり曰く 問前觀亦身相光明を觀す何ぞ前觀に簡ぶか、答二義一云前は庵相三十二相等を觀じ今は細相の八万四千を觀する故更難と云ふ（觀佛三昧の方） 二云前は四八の相好光明諸樹等を照すを觀じ、未だ其光十方念佛衆生を照護する事を明さず、故に前觀の身相光明は仍諸佛に通ず、今八万四千の相光念佛行者を攝するを觀じて正しく彌陀の身相光明を明す故、特に之を言ふ也（念佛三昧の方）之字は往也當觀に觀勢不二する意とす

○二從阿難——天金色也 二明眞佛身色

眞佛は念佛、身相は觀佛なれば眞佛之身相と之の一字を置て區別した。此下は經文無量壽佛身如百千——檀金色の文を釋す。踰天金色 經文は踰とし如百千閻浮檀金色と云ふを釋は踰天金色とし非踰とするは、觀門義五丁可見、伏難して云經文は踰なるを今踰とは云何、通じて曰無量壽佛の法は勝れたるも、其より劣たる檀金色は踰にあらずとは云べからず、是分踰で一分色の勝れたるを取る、現在には是より外に勝れた色無れば其を取て一部の踰とす。釋文踰とは最上色の一分を踰とす、釋文の着眼點は百千万億と云ふ文に依て踰天金色とす。楷記七二 云踰天金者前像唯言如閻

浮檀金、此言百千万億故也と、是れ此句に着目し踰と釋された。單に夜摩天閻浮檀金色とのみ説給へば踰とは云へないされど又踰にならざるに非ず、色を以て一分の踰とす。此意を觀門義一丁分踰勝非踰又可異可思とある。難者云ふ如く法と踰とは勝劣あれば踰にならぬと云ふに非ず、今は一分の色を分踰とす、夜摩天は身量大に踰へ、閻浮檀金は自體の色に踰ふ、夜摩天とは欲界空居天にて一天既に廣大なり況や百千万億をや。問然らば下の佛身高は數量に非ず慈悲を顯すなり、何ぞ夜摩天を以て身量の踰と爲すか、答事相の意は夜摩天は即慈悲、高も慈悲なれば踰が中間に在て上下に通ず、又他筆下丁七觀に不得爲比、今如とは本願の光明第九門の境（來迎）と顯る時不得爲比、今は正行の意にて示觀境地の光明なれば、諸佛光明に同する意で如と説くなりとあるは、經文上の説明と可見。

○三從佛身高——身量大小 三明身量大小

身量等身相は觀佛、光明は念佛にて身相を六十万億と開き、光明を念佛衆生攝取不捨と明す、高は慈悲來迎を示す義と可見楷記七三 數量に對し諸師の義を擧げ、自義云 大小互顯にて定量無しとは觀門義の説と同じ、又大小 第三句の化佛多少、五句の光照遠近等の言の小少近は形容詞で一日緩急の緩の字の如く大多遠の義と見るべし。觀門義一 彌陀佛弘願體は大小分齊定むべからずと云へども衆生の前に顯れ給ふ故に觀門の方便を以て之を説く故身量分齊一定せずして大を説は少に對す、小を説は大に對する故に通じて身量大小と云ふ。相好等も皆如此とは數量を以て非數量を示された。是れ大小等は觀門譬踰の法門にて、假設に對得したもので實に身量を釋するに非ずとの御思召である。

此第三第四は子科とすべきに大科としたる意味は、六は智恵、十は慈悲、万億は衆譬なれば法界万像を收む意とす。祕決云六十万億者森羅万像無數體也、六者智恵窮也、皆是娑婆法界万像 爲顯法界理體也」とは總稱の言で、次の第四は化用を顯して無數化佛にても万像の體と云ふ意味を顯す故、第三第四と科文を合する方と、又各別する方と兩義ある。各別する方は第三第四と區別し無數化佛を各別し報化を各別す。合する方は化佛の子科を毫相等の科に付屬し報化一體を明す、一にて二を顯し二にして不二とす。恒河沙由旬とは、無塵の義とす。曰く諸法不盡恒河の如くに彌陀の功德も不盡なり。由旬 四十里云等は觀門譬喩の法とす。

○四從眉間——明總觀身相 四明總觀身相二

一標

總觀身相とは次下に八万四千の相と好とを明すを別と云ふに對し總とす。これ今は白毫相を初め圓光化佛に至る迄總じて彌陀の身相を明せる事を示すなりとは、楷記七四の説なるも山觀兩師の説とは異とす（總別相對する故）、山觀兩師は惣は觀の上に置き、別の字は相の上に置て差別して知る意味で相對するには非ざれば所望が大に異とす。惣は無量壽佛の身相の中へ諸菩薩を説き入る故惣觀の能歸の方を彌陀の身相と諸佛と俱に觀ず、是を惣は觀に付と云ふ。別は身相に付とは彌陀一佛に極限す、曰く彌陀の身相は諸佛に異し攝取不捨の利益あるを顯すなり。爲に觀師の云、總じて彌陀佛には身相光明の二徳在す、諸師は身相の方面を委釋するも光の方面には細釋せず、導師は身相の方面を大略し光明の方面はいん勤に問答し細釋されてある此が諸師今師の相違點である、又同く私記五六丁此總別の義を問て、答に異義不同とし三義を出す。一義に

總觀身相通所求、觀身別相別所求、是難行位也とあるは、佛乘考ふるに彌陀の本願を諸佛道の分に取りれば別と云ふも各別本願各化衆生なれば、難行の位と仰せられたのであらうかと思ふ

一義云 總觀身相總願。觀身別相別願と、あるは廢立の位とす。

一義云 總別俱に別相也とは傍正の重と見よ。これ總觀身相、觀身別相、惣別一致、傍正の重を正義とされてある。是れ復有八万四千光明より取て觀身別相と釋すべきに無量壽——相より取て釋する故に上の總相も即別相と見の義で、即ち佛身に無盡の相好あれば總觀身相と釋されたるも惣相即別相にて名號酬因なりと見るべし。上來の觀々に總觀身相と無盡にある方を總とし（一經表より見れば觀佛）其を一一細釋するを別とす、即ち身量の上の相、相の上の好、好の上の光明とし一一光明念佛衆生攝取不捨と説く時に知れ、此佛の全體が念佛衆生攝取不捨なれば總觀即別相で名號酬因の佛なる事を。又二從已下が總觀身相なるに、二從三從に體量を四重は相好、五從は光明と分ちたるは、體と用と區別して釋されたのである

○即有其六一明——六明侍者多少 二釋

總觀の下なれば、毫、眼等を總略して觀ず、釋中六あり文の如く可見。文解は他筆丁二傳通記楷記等可見。一明毫相大小 眉間白毫——如五須彌山の文で、一須彌の高さ三百三十六万里 五合し一千六百八十万里となるか、實非數量とす、今差別と云はず大小と釋されたに注意すべきである 二明眼相大小 佛眼如四大海水、一大海水は八万四千由旬とす。三明毛孔光大小 身諸毛孔等の文とす。佛身の毛孔其數知り難し（人身に九万九千の毛孔あると阿含經）其毛孔より演出する光明

は須彌山の如しと。四明眞光大小、佛の頂背にある圓き光明なり。經に百億三千等と説は、廣說衆譬で無量を顯す、五六明可知。

○五從無量壽佛——觀身別相光益有緣 五明觀身別相二 一標

楷記七_四文相は巧なるも廢立に約し辨明するは山觀師の傍正に約すを正義とせるに反す注意して可見、曰く他筆の意は、已下は正因觀、已前は正行とす。身相の觀なるが故に、此よりは念佛正因觀とし、當觀に留らざる意で見てある。觀門義五_二別相に付す。曰く前の總相に對し八萬四千と説故に別相と見てある。此別相は身に局て餘に通せざればなり。楷記の總別 相對と相違の點是にて可知、別相とは秘決云 別願所成の相也とは、一經皆名號にて彌陀遍照の全部未來衆生の爲で其八萬四千の相好光明は皆念佛衆生攝取の爲なれば、相好光を定念來に配釋し、之を以て一身を莊飾するものなれば別願所成の相と示されたと思ふ。私記五六先所引の如く、佛身の全體攝取衆生なれば上の總相即別相にて、總に稱我名號酬因之身と云ふ意味を知るにありと。

光益有緣 有緣 念佛衆生(十一門の第二) 此緣に三緣ある下の如し。

○即有其五一明——乃至四明等 二釋五 一三三四明文の如く可見

相は相狀で見て分つべきもの、好は細相、例せば吾人は六根の形相あるも好は不充分なり 相の上に好ある人を美男美女とす。楷記七_四知禮引曰 佛居凡地 具於八萬四千塵勞 於塵勞 皆見實相 理智既合 故能示現相好光明 故云節々八萬四千 已上 四明光照遠近 經文の一一光明遍照十方世界の文を釋す、即ち如來の光明智相を明す。讚曰正座

已來經十劫、心緣法界照慈光とある。一一光明遍照等の文は一聯なるに第四科第五科とするは、一光明遍照十方世界は通門の方、念佛衆生攝取不捨は別門の方にて通別の二科と知れ、通門とは釋相上の見方である。即ち遠近とは、多少、大小と同義にて隨緣者即皆蒙解脱の義、諸佛通門の隨機たる照十方で、又一人の上にも照して差別ある。此を遠近と云ふ故通門の位とす而して通別は與奪で第四科に與へ、諸佛の通が別に歸し、一一の光明空く照さず念佛衆生を照すなりと諸佛の本意が第五別門の位で始て明瞭となり、彌陀因中の功德と顯るなり。

○五明光照及處徧蒙攝益 五明二 一直釋

徧とは唯攝の故也 讚曰 蒙光觸者塵勞滅 臨終見佛往西方とは、これ其益である。又釋の意赴有緣時臨法界と同意で諸佛の通が別に歸する處を光所及處等と釋された。他流は二科と分つは諸佛諸行に通じ得生も光明も諸行に通ずと意得、選擇集の不照餘行者 唯攝念佛者とある、廢立一徧の見方。今は行成觀門の義で諸行も照すと云ふ、されど攝取は本願念佛に局ると會合するを一流の正義とす。

○問曰備修——有何意也 二問答二 一問

備修衆行 定か散か不定なれば諸師異解す。教相上より云へば餘行者不照ならば遍照光明とは不可云と問ふ。楷記七_六定散萬行と云て廣く一代行に通ずとし其例に、如九品行々と引は、九品は九界の意で上六は八天の行たる善行なれば、今の衆行は廣く一代に通ずと釋された、他筆下_四顯行の表より來る問とあるは楷記の説の如く、顯行は自力の情を帶で居れば未發三心の方とす。

觀門義五丁定善不觀よ。問ふと云ふ意、曰韋提自力の情を破し、見を不見に下し欣淨に還て見れば、韋提の諸行孝養父母奉事師長等の萬善が觀門となり彌陀の行と顯れて一切の法皆行體となりて往生するに、今何唯攝念佛とするか。秘決(全書一) 自開散善の方より問ふと、意云今此觀も本意は身相を觀するに非ずして、光明攝取にある故に散善自開より問ふなり。已上を總合するに一代の上にも華嚴法華等に其三昧を得、一切の行を修するに淨土往生を許すに何局念佛乎と問ふ。今觀門の上より云へば定善中捨身他世必生淨國と説き、散善九品皆往生を説に唯攝念佛とは何故と問ふ。已上の要點は諸行も廻すれば往生す、佛光普照も攝取は念佛に局ると、爰に於て照攝一致、各別、又光明は常光か心光かとの異論を生ず。私記五丁已下佛光は有縁を照攝す、念佛は有縁なり諸行は有縁ならず不照なり。光明は常光に非ず、心光なりとあるを正義とすべきである。七丁已下參照

楷記七六曰此問は照攝一致か各別かの二義を出し三説の不同を以て決着してある、第一義は九品寺の義で、照攝俱に諸行に通ず平等慈光なる故、經に諸行者不攝と説かざる故、但唯攝と釋するは隱劣顯勝の唯なれば下文に比較と云へり。

第二義は鎮西義で、佛心は平等なるも機根に親疎あれば攝は親き故念佛に局る。照は遍照の光なれば諸行にも念佛にも通ず。

第三義は正義で、照攝は唯念佛にありとす。即ち以無縁慈、攝諸衆生の貌で、唯一の慈慈に至極し、念不念俱に攝取の義あるなりと、又秘決(全書一)參照すべし

○答曰此有三義 二答二 一明唯攝念佛所以二 一先標義門
三義とは 即唯攝念佛の所以なり。問念佛すれば自ら三縁を具するか、答念佛即三縁にて、三縁

即往生、往生即攝取也、佛の三縁は衆生の想心より成じ給へば想心を以て本願に歸すより外に往生を論すべからず、佛體即往生なれば捨不捨の義も無れば攝取不捨とは説く、而して此三縁は第八觀法界身の三縁にて、彼佛の色心入衆生心想中たる觀佛の益、今此三縁は心光衆生の三縁を攝し給ふ念佛の益とす。

○一明親縁——故名親縁也 二解釋三 一親縁

親縁とは、觀門義五丁四縁中因縁とは十劫正覺は遠因、念佛は近因、無有出離の機相の顯れたる獄火來迎が縁となり、因縁和合し自體辨生の處、南無阿彌陀佛の果と顯る也。

三縁に就て、他筆下丁五 三縁の縁、強縁の縁、因縁の縁、同異を問て體は一、位は異なりと、三縁は惣、因縁強縁は別、因は正因にて行者の三心、縁は正縁にて佛の三力なり。衆生三心の因は佛正覺離れて不發なれば今日の凡夫は彌陀佛に親き縁あるなり、此を親縁と名く。強縁は願力増上にて罪惡の凡夫も願力の強縁に歸すれば往生するが増上縁の義で、要するに三縁は惣じて佛と衆生と因縁和合する名稱と知れ 楷記七八親子等の例も準知すべし。

秘決(全書一) 親縁の下深義ある。曰今禁父を取て親縁とす。父の因は智惠、母の因は慈悲、慈智を以て往生の因を作り、衆生を以て意業を作り、佛を以て身業を作り、定散の教を以て口業を作り、三業をして一體ならしめん爲に、定散念佛來迎を以て三業を作り、一體となす故に三業永く不離にて往生極樂の一事成する也、我稱すれば我耳に聞き、我念すれば我心知り、我禮すれば我目に見る、此云衆生憶念佛者佛亦憶念衆生 彼此三業不離也と、故に三業を二身とせば其念互に通じ難し

是を以て今佛は南無阿彌陀佛也、衆生は歸命無量壽覺也、衆生と佛と梵漢(悲智)の異とし、衆生の意業を以て往生を願ひ、稱禮念すれば佛の身業來迎して往生せしむ、我心に佛を思へば必ず我身に行ふ、これ三業一體の故也、今佛と衆生と一體三業を作るは意の願と、身の行と一なる故に稱禮念即見聞知とし此を願行具足必得往生と云也と示してある。之を約言すと他力領解の信者が即ち法界の現象たる今日の起居動作事々物々が法界身の覺體なりと靈感すれば、我三業の所作即菩薩の行にして其が彌陀眞實の行となり本來自然任運に願體に歸入せられ悉く攝取の利益に預る、是を親縁の義と見るのである

衆生起行 即是其行の行 私記十一に即念佛の行とす口常稱佛等、常々念々不捨の義、今三業に互して持するは即三業に留らざる義を示す、今若し偏に三業に留らば衆生自力の行となる。私記五十一 參照 又正いんの位で云へば三業一時に備る。曰く意に思ふは意業、舌根の動は身業、稱南無阿彌陀佛は口業、此を廣充すれば一切の行皆名號にて起居動作水汲菜撮、柳綠花紅皆是名號にて我體が即ち穢土の無量壽佛となり。口稱の名號にも三業が具し禮敬するも佛の三業が具し、心常念佛にも三業具足して彼此三業不離の念佛なれば、安心の上は怠り倦も喜し、稱名せざる時も常念佛なればなり。されど是は法體の所論なれば解の上で云ふ事で、解あれば必ず行があらねばならぬ、故に正行門の機に還て、常念常禮の行を勵むべき事を忘れてはならぬ。憶念は相續の義、又憶は口稱の義、佛は衆生を本來憶念し給へば念々相續の義を明す、常の字を主眼とす、口常稱佛即聞之三業相應して稱名の行最初にあるを釋す。即ち弘願に相應し稱する時に佛を聞き給ふ也。

身常禮敬等 身業の所作弘願と相應して皆是禮拜の行となるを明す。禮拜とは舉動進止の行業、止惡修善の行為禮拜の行に相應す。爾らざれば常の字無意味となる。心常念佛即知之 意業相應を釋す、已上要するに三業俱に念佛にて之を念佛衆生攝取不捨と説かれた。

衆生憶念等 憶念は相續で上の三業相應の義合して憶念の一に收めたる也。之を開すれば三業の行、合すれば念々相續たる念佛の一行となる。されば三業の外別に憶念の體あるべからず。

○二明近縁——故名近縁也 二近縁

親と近の別、近くて疎あり、親くて近きあり、今別願所成の彌陀と、我等とは親き上に近き謂れある。衆生願見佛 願見は三心なり。觀念門は三心爲因、三方爲縁、見佛淨土 三昧成故。又見佛は別に作意分別するに非ず、上の三業中に見佛の義あるなり。他力隔竹簀なれど千里と思ふは人情である。他力歸入 上は目前現在とす。應念目前現在とは、佛應聲に約す。衆生に約すれば見不見ある、されど佛の來應は必ず在る。示觀縁の釋云見不見皆是佛恩と云云 又見と云はず目前現在と在とは 山の三角も彌陀の三尊と見る處は一切萬像慈悲の體にて、現在目前なり、若しきらめく報佛を見るならば、在と云はずして見と云べし、觀門義五四 起念とは山の三角と見なす處にて、分別の見にはあらずと窮はる。

○三明増上縁——故名増上縁也 三増上縁

増上 定散の上に増し念佛の上に上る、念佛來迎は諸經の上に増上する也 秘決(全書一) 總じて三縁とは名號の三に於て三の意ある。親縁の名號は佛體即往生。近縁の名號は念佛行者を

捨てざる護念の益を明し、増上縁の名號は滅罪の益にて臨終正念の念佛に事をもす。此三意を名號にて顯されたれば念佛即佛體なる事知るべし

又五 除多劫罪 滅罪増上縁
種増上縁 自來迎接 攝生増上縁
上縁 無能碍者 證生増上縁
に配 親縁 護念増上縁
當す 見佛増上縁
れば 近縁

一往の配當で具疏は起行 今三縁は止因なればなり

衆生稱念 禮敬等の意を入れて可見 即除多劫罪は即便益、命欲終時已下は約臨終にて正く増上縁の義を述ぶ。自來迎接、行者修行の力用に依らざるを明す、曰く我が修功を論すれば天上來迎猶難し況や報佛來迎をや、然に今正いんの願力に酬て稱禮念の前に來り給ふを自來迎接と釋す。諸邪業繫 諸邪は邪見の義で魔王等の諸道を障ふ、業は生死の妄業、けはけ縛で、無能碍者今彌陀願力にて可障の法も不障となるを明す。これ三業具足すれば一切障りとならずして、淨土往生するは無障礙増上縁の義とす。

○自餘衆行——比較也 二顯得生亦不通義二 一簡諸行不如念佛。自餘衆行とは定善散善と名く云へど前の如く三縁無を以て念佛とは全非比較なり。但能回向皆得往生で諸善當分の益に非す必ず念佛増上分の力に依る也。○是故諸經——念佛功能 二成唯念得生三 一標

諸經とは一代經を指す。又六部往生經とも云ふ。○如無量壽經等 二引文三 一引大經

引文三經に局るは經意を得れば一代諸經此謂れに歸すればなり。先引大經は諸經中に弘願を説く根本の經にて一切皆此經中より出生す故先舉す。四十八願等玄義分の一一願言稱我名號の義とす。○又如彌陀經——不虛也 二引彌陀經

彌陀の本願は只名號にありと知らば、其本願所成の相は大經に説く、而し其相娑婆に局らず十方に通すれば先づ十方證誠の文を出す。此經隨緣雜善を嫌て一日七日名號得生を明せば大觀二經と異りて唯の言無し、又二段に引は一代の教主念佛往生を説く、諸經の化儀も亦爾りとの意で先づ專念名號得生を述べ、後に諸佛證誠不虛を出す。

○又此經定散——名號得生 三引觀經 定散文中は十六觀門、唯とは今經定散の諸行を説も佛意唯念佛衆生にあるなりと、これ今觀の觀門は弘願念佛を顯す事を示された。

○此例非一也廣顯念佛三昧竟 三結示 此例非一とは此道理を得れば諸經中に念佛往生を説く、文皆此の如くと意得らる故此例非一と云ふ。廣顯念佛三昧竟 古來の諸師當觀の文に就て觀念を知て稱名を知らず、今釋既に深く二尊の密意に入て廣く問答を設け三經の意を得て一代經を悟れば念佛三昧の義廣く顯るのみならず、十方三世の化儀も亦爾りと知らる此等の儀を開顯されたれば特に結示し人をして其を知しめ給ふのである

○六從其光相好——難爲周悉 六結少顯他

上に攝取不捨相好(體)光明(利益)を明し、今は上來の所明に少分なりと結す。相好とは此中に觀身別相の八万四千等の相好を收む、但し佛の相好は唯八万のみならず無量無邊なり、八万と説は結少、不可具説とあるは顯多とす。無量壽佛威神光明、巍巍殊妙、晝夜一劫、尙未能盡の文は此意なり。其光と云て明字を略するに秘決細釋す、一念義の經文の明字を略して開判するを破し、そして車前草の喩を引くこれは藥草の名で唐大國王曰、此草は妙藥にして諸人の爲に利益あれば、我車の前に植て置くべしと此名稱ある「佛乘云 此草信州山奥に生長し肺病の妙藥とし時々新聞廣告に散見す、やはり車前草と云ふ」如是妙草なるも人知らず、全く攝取利益を知らざる人に喩へられてある。秘決(三二五) 注意して可見。輒欲觀者難爲周悉とは科文を釋す、報身の光明は凡夫心力の不可及なるも、觀門の力を以て且く之を分別すれば、文の面には盡し難くも心眼開て見らるべしと不可具説の文を釋す。又經文には説釋に觀とあるは文義をむくに似たるも此觀門は教力を本とすれば、聞の時觀即成する故、説も觀も同とすべし

○七從但當憶想——心眼見也 七憶想令見

莊嚴微妙出過凡境とは、依正の莊嚴は非是凡夫心力所及にて雖未證目前也、これ正受三昧難し俱想心すべし。心眼見とは見の想を作すのみ、これ觀門表の釋で正宗には非ず平生思想の位とす、曰く識知の語を聞て法界衆譬と悟り慈悲の體と感知するは弘願他力なりと知る、心眼の見方と知るべし。見とは識知するを見と云ふ。若し正受三昧ならば閉目開目明了にして火に入るも燒れず、水に

入るも溺れず正受三昧の常在目前見佛とせねばならぬ、觀門義は此見を不及弘願之見と示された。

秘決(三二六)但當憶想とは 念佛これ名也とあるは、例せば支那の大山も渡支せずは見へざるも名は爰に居乍ら知らる、其名には必ず體ある故悲智具足の名號とすべきである。今心眼に見とは山の三角も彌陀の三尊と、領解識知する位を云ふのである。

○八從見此事者——觀益得成 八觀益得成二 一標

見此事者 上の身相光明を指す。功呈不失 他筆下「九觀佛なりとは、觀佛は領解思惟の位にて

(觀佛功呈とは)一切方法定散衆譬の體と顯れた上に攝取利益(觀佛は念佛を顯す)あれば不失と云ふ。又觀益とは見佛なりとあるは正因の見佛(證得往生)にて即稱名とす。上來云ふ名體不二

の義と見るべし。これ觀門より弘願に歸する念佛は必ず見佛すれば當觀には念佛の利益ある。念佛とは見佛、見佛すれば必ず佛の御意を知る其佛心とは大悲悲にて慈悲の體は攝取也、之を觀益とす

○即有其五一明因觀得見十方諸佛等 二別釋

一明は見此事者即見十方等の文を釋す。因觀得見 無量壽觀するに因て十方諸佛を見る事を得、

何故然らば同體大悲故、諸佛功德悉皆平等なれば一佛を觀すれば即諸佛を見らるなり。

二明以見諸佛故成念佛三昧とは、見佛を以て念佛の義を成す、佛を念せざれば見る事不能なればなり。結成 能詮觀門は必ず所詮弘願に歸すれば觀佛を以て念佛を結成す。

問 見諸佛即念佛三昧とは云何、答章提の我今樂生と別選は通を別に歸し十方の佛も能讚となる爰を釋云(第七科)衆莊嚴身皆同指讚と四十八願の中間功德と顯れて、四十八願諸佛修行の體と

成り諸佛の光明も攝取不捨の光明に歸し、通別一體し一佛一切佛同體大悲にて即名號と顯れたる姿と見るべし。して又觀身別相下に結成念佛三昧とは、前の總觀身相も唯念佛三昧に結成す。其意を廣充すれば上來及び已下は唯弘願來迎の念佛三昧より外無しと知るべし。又諸佛と云て彌陀と云はざるは通別一體。三世諸佛も皆結成念佛三昧に收る意である。

三〇明但觀一佛即觀一切佛身也、觀作是者名觀一切佛身の文を釋す。但觀等 觀を以て見を釋す、觀を見とは經に但當憶想令心眼見とある故に、

四〇明由見佛身故即見佛身也、以觀佛身故亦見佛心の文を釋す。觀佛身 法界衆譬の體を識知する位。見佛身 體の上に攝取不捨の利益を知を云ふ。心は無體なり見とは云何。答(秘決 三二七參照)

曰 此聖淨の顯、聖道は智慧を慈悲に收む無體、淨土は慈悲に智慧を攝す有體、今慈悲を體とすれば見と示す。五〇明佛心者一切也、佛心者大慈悲の文を指す。佛心慈悲爲體は、今經の攝取光明に顯ることを釋す。平等慈 無緣慈を釋す、又同體と名く、生佛同體にて能(佛)所(衆生)緣

(差別)無く自利々他心平等の故、遍照十方して普く法界に入り拔苦與樂するを大慈悲と名け、又は無緣の慈と名く、他筆下九無緣慈とは別顯超世名號の謂也と。

九〇從作此觀者得生彼益也 九明得生益 此觀 上の身相光明を指す。捨身他世は往生益を結し、得無生忍は成佛の貌、生諸佛前は流通の當座道場生諸佛家の意、又無生とは生即無生、事讚云 淨土無生亦無別云云、示觀は觀佛得忍、得益分は聞見得忍今は生後得忍とは、前二は現益、當觀は當益にて一同とすべし。

○十從是故智者——修觀利益 十重勸修觀二 一標

上所説たる見佛の功徳は往生の利益ある。爲に智者は此觀を修すべしと勸む。重とは秘決(三二七參照)上の六十万億を重て再び觀す、上は能譬今は所譬と云云。智者とは自力を捨て觀門より弘願顯る道理を知り得た人で、極言すると即使往生の人を上根上行人、或は上上人と云ふ、これ智者の意とす。

○即有其五一明簡出修觀人等 二釋

一〇明是是故智者の文を指す。一經の主意は觀門弘願に歸するより外無し此を知り信じ得た人は眞の智者とす。二〇明惠心諦觀無量壽佛 應當繫心諦觀無量壽佛の文なり け心は識知の義、諦觀とは攝取の利益は只阿彌陀佛のみありと諦かに觀知するを云ふ。

三〇明相好衆多——自然而現也 上は觀佛念佛を分て觀す、今は別顯光明の方を觀す。經文は觀無量壽佛者乃至自然當現の文を釋す。此一の相好互に其功徳を備へたり。これ悉く四十八願より成す。其四十八願は衆生の爲なれば一相を觀するに諸相顯現する理はあるなり。不得總雜而觀 餘相を雜へず唯白毫の一相を觀す。唯觀白毫一相 秘決(三二八參照) 白毫は念佛とす。意は左右二眉は悲智の二、其中間の白毫は念佛とすと、第十七願は定散、第十九は來迎 中間十八願は念佛とするが如しと、又十八願と一同じ只念佛者を照し不照餘行の義を委く説明せり、見るべし。

四〇明既見彌陀即見十方佛也 見無量壽佛即見十方無量諸佛の文を釋す、即ち諸佛同體の功徳を明す。而し同體と云ふも彌陀願力の上より同體と成す、依念彌陀三昧の故に 秘決(三二八)上は能譬

の見に就く今は所誓を釋するに就て釋すと云云參照すべし。

五明既も諸佛——得蒙授記也。得見無量諸佛等の文を指す。諸佛同體の意を知らば佛心と相應する故必ず成佛する義を成す、これ觀佛三昧に因て現身中得念佛三昧を釋す。現身に往生決定すれば現前授記と云ふ。但し於定中とは、佛體佛語の中と云ふ意と見るべし、即佛語中の定散文中——名號得生と云へる定中の事也、これを行成の定善と云ふ、定散所説の佛語中にて現身三昧し、即便往生する處を印可決定の義にて現前授記と意得べし。

○十一從是爲徧觀已下總結 十一總結

上來彌陀の色身別顯利生の意を明したれば、具に一切色身の相貌は説き盡さざるも皆慈悲心の顯現なれば遍觀の義成すと總結す。

○十二從作此觀已下

十二辨觀邪正二

一辨邪正

上來の如く觀じ念佛攝取不捨と知るを正とし之に反するを邪とす。

○斯乃眞形——齊臨彼國

二總讚

上來の釋文廣く詮要知れ難し、要を取て當觀の意を述ぶ。眞形量遠。六十乃億乃至由句の意、塵若五山。眉間白毫、如五須彌山の意、當觀の契唯此二とす。震響隨機。説法隨機の意にて今の觀佛三昧は自力觀に非ず、定散所説の位を聞を觀佛と云ふ。此開とは音響なり、これ即ち隨機隔て無く得益す。欲使含養等。正く衆生を勤め念佛三昧に依て往生せしむと結す。含養は衆生の異名、歸命は正念歸依の念佛。註想無遺。相續不斷の義、乘佛本弘。上の如く修すれば弘願に相應す。

齊臨彼國 本願に相應すれば往生無疑也、當觀の要之を以て知るべし。

○上來雖有十二句不同廣明眞身觀竟 三結

○觀 音 觀

來意は主伴（勝劣）次第 論註上四十明君ある時は賢臣ありと云ふが如し。憬興疏云 以此菩薩

最是尊大 常隨世尊 普化一切 補彌陀處、故亦勸觀 觀觀世音 於眞身觀 雖復易成 而佛菩薩

有此勝劣 次第之差 故在佛後 而觀之也と

得名をば勢至觀には 以智惠光 普照一切乃至名大勢至と説に今不説は如何 答（一論也）他筆

下十可見 曰觀世音とは慈悲爲體、慈は拔苦與樂にて其體は第九の以無緣慈とす。此佛は衆生の想

心を體とし成じ給ひたれば想心離れて佛體も不成なれば、三心發得すれば證得往生すと顯す、此謂

を領解する心を觀と名く、三心此意を釋尊の説に顯すを十六觀とす。此觀を拔苦與樂の體とし、

此觀を佛に約して觀佛とし、菩薩に約し觀音とし衆生に約して領解の心とす。斯く意得る時十六觀

が、即觀音の得名ならば改て其を設る必要なしと知るべし。世音 世の衆生の音聲に應じて慈悲の

體を顯し給ふを云ふ。世は爲未來世の世 音は機に應じ一切衆生の命を攝するを體とす。要するに

一經十六觀を得名とし、世音の音は五大中の風大ならば命根を持つ處の出入の風大とす。此菩薩慈

悲を司る事は常の如し、一代には大悲闡提の菩薩とし、正法明如來なるも因位に居し一切衆生を度

盡せずば我成佛せず誓ひ給ふ。釋云 已得菩提捨不證と、新譯は觀自在菩薩、舊譯は觀世音

大日經には彌陀を指し觀音とす。天台では妙法蓮華は觀自在王如來の別名とす、一切の菩薩觀音に

依らずんば正覺成せず、必ず觀音の司る蓮臺に座し給ふ。又觀音は智惠を司る義もある。曰く此菩薩穢土に出て利益衆生の方は機に就て南無の願心なり。勢至は彼土に居て即是其行の行體を司る義もあるなり。又私記五^丁廿八已下一體三尊一體の釋明參照すべし。

○十就觀音觀中先舉——即有十五 十觀音觀三 一標

○一從佛告阿難——生後菩薩觀 二釋十五 一結前生後

經文復當の二字の意は 復は勢至觀にもあり、二觀俱に彌陀の悲智を離れざる意とす。當觀には如佛無異 勢至觀に如前無異と説て上の眞身觀に同する意を明す。

○二從此菩薩——總標身相 二總標身相二 一標

問觀身相と云ふべし標身相とは云何 答觀門表にて身相を觀するならば所觀の境なる故觀と云べし、然に今の目的は所觀の境には非ず、觀音光中現する五道の衆生が所化の境と顯れたる慈悲を明す故、特に觀と云はすして標と釋す、然れば標身相とは標慈悲の義也。

○即有其六一明等 二釋

一明身量大小、此菩薩身長八十萬億の文なり。八十萬億に就て諸師異解す。楷記八一

私記

五^丁卅五同不同の義を以て無盡の相を知らしむ云云此説可仰

二明色身色與佛不同 身紫金色の文也佛は閻浮檀金今は紫金色なれば不同とす。檀金も其色紫也 何ぞ不同とするか、答色の不同に非ず勝劣の不同とす、曰紫金色は念佛也、紫は青と赤の合した色、青は衆生の機にて智とし、赤は悲とし生佛不二、悲智合して紫金色となる、秘決 (全書一) (三三〇)。

觀門義五^丁十五に勝劣淺深不同とあるは、佛は唯慈悲なれば勝、菩薩の紫金色は念佛にて機を兼る故劣、觀音十九種の説法は機を兼て利益を顯す故因果の異とも云ふべし。

三明肉髻與佛不同 頂有肉髻の文肉けいはモトリヲを結ぶなり。佛の螺けいはホラ貝の如し、第九觀に其を説く。當觀に説は、佛に異なる義を顯す。問今特に説は云何 答肉けい相は在家菩薩の相にて衆生に接近し、三十三身を現し餘菩薩に異りたまへる故也。

四明圓光大小 頂有圓光面各百二十五由旬の文一一の相光明あるも頂の圓光、特に莊嚴となれば三十二相中特に此相を示された。又圓光と身相と不相應なるは數量にて非數量を明すと知れ。

五明化佛侍者多少 有五百化佛等文、化の至極は報身なれば報身兼化の貌とす。觀音は因位なるも如佛無異の文より見れば、即此上現來の佛と同一報身とす。如釋迦牟尼佛とは、釋迦佛の三十二相と同する故如と云ふ。六明身光普現五道衆生 舉身光中五道衆生の文、此は苦體を顯して利生を示された。光中現五道と説く經意は安心門に約して生佛不二(光中に五道あれば) 變相に圓光外に五道あるは生佛各別の方面と見よ。五道は所化の境を現す。

○三從頂上——化佛性異 三明天冠化佛 天冠化佛は彌陀の化像、本緣經には悲母の形像、般舟讚 念報慈恩常頂戴 皆同異也。天台は帶果行因と釋し正覺は(正法明如來)成するも、利生の爲因に還り菩薩の行を行すと。然に他筆

下^丁十二曰今は不爾 法界身の謂を顯すに、通別(佛菩薩)同く凡夫攝取の體なりと示し、因果平等なりと念佛三昧の方より釋されたと云云。要するに天冠化佛は出世善根彌陀の功德と顯る貌にて、顯

行縁に孝養父母の一句に一切の功德を收め光中に彌陀の果體を明す。化佛は奉事師長の意とす。勢至觀は孝養父母を生佛不二の功德に收む、今奉事師長の意味を餘の化佛菩薩に異る義を明さん爲に、化佛殊異と釋された。又秘決(全書一)參照。

○四從觀音已下——身色不同 四面色異身

面色と身色不同は、同二所證眞理同。不同一師弟差別なるもは一往義、國師は他筆下十三而色身色同一なるも、今は觀佛三昧にて説の不同を明すと、又秘決(全書一)云 面は智恵にて菩薩の現世利生、身色は慈悲にて化得即送彌陀國なれば、現世隨機の益を衆譬とし、専ら後生を救る意味を指して不同とは云ふ也と

○五從眉間下至——紅蓮之色 五毫光轉變二 一標

既に光明十方に通すれば化侍隨て遍し、目に映じ眼に遮ざるも皆化佛ならざる無し。此相を紅蓮華の世界に雙者無きに譬へられた。即ち法界衆譬と顯るは觀音の眉間白毫の功德、其德は彌陀の念佛攝取の徳とす。第九觀の見眉間白毫者自然當現の義と同一にて、無量の功德を顯現し利生不盡の義を明す。譬の字諸師多く、譬の誤なりとあるも、他筆、觀門、楷記等皆譬とす。化侍多く其光明盛なるに譬へられた。又楷記に雜觀の等身と此紅色菩薩と差別云云の問答必參照せよ、

秘決(全書一)又釋あり曰 紅は慈悲也三世諸佛の慈悲を集て就體して觀音の慈悲を紅蓮華とし、衆譬の法門とすと 又他筆抄下十三觀門義五十六楷記八十三等參照。

○即有其五一明等

二釋

一明毫相作七寶色 毫相は白色なるも諸色に映現すとも云ひ、或は七寶に局らざるも人世に七寶を説く故其に準すとも。要は衆譬を明すと知れ。

二明毫光多少 流出八萬四千種光明の文。三光明有化佛多少、一一光明有無量壽數百千化佛文

四明侍者多少 一一化佛乃至以爲侍者の文、已上二三四明の化佛侍者は觀音の化用にて法界に遍滿し利生不盡の姿と知るべし。

五明化侍變現徧滿十方 變現徧滿十方とは法界万像は衆譬の三光と顯れて利生不盡の貌を云ふ

○六從有八十億——非衆寶作 六光成瓔珞

八十億は上の身相を指す。經文出所不説なるも上の身相より出る光明なり。光瓔衆寶作 佛と同一光明を以て莊嚴す、即ち利他を莊嚴すれば非衆寶と釋す。秘決(全書一)云 觀音の飾は大悲を以て一身を莊嚴する故非衆寶作と云云

○七從手掌——慈悲之用也 七手慈悲用二 一標

觀音利生は慈悲を本とす 此慈悲正く手にあり三十三身應現十九種説法の終極は蓮臺を捧げ 引接し給ふ詮要は手にあるのみ、秘決(三三)參照

○即有其六一明等 二釋

一明手掌作雜蓮之色 手掌とは十指の十四節を十四觀に配し光中に收む(一の口傳)

雜蓮之色 雜は智恵を雜へたる念佛とす。秘決云 雜蓮華色也 中輩上輩也。とは中輩は小乘戒、下輩は世善なるも中下品へ繰上て下三を惡とす。故中下に世戒二善あり。上々に一者慈心不殺

具諸戒行と、世善と戒とを擧げたり、釋に最上勝妙戒とす、爰に雜蓮は中輩下輩に配し世出世の善悲智具足を雜蓮と云ふのである。問中下に限り念佛とは云何 答 日觀已下上輩迄は、能譬所譬正行の方なれば、中下二輩は念佛所譬にて、中下品已下は善知識の語、即念佛と顯れて往生の正因となれば雜蓮華色は念佛にて、悲智を雜ふるとは云ふのである。(これは事相の釋なれば注意すべし)

二明一指端有八萬印文 八萬は所對作に對す 印文 經は畫とある畫は明瞭の義、印文は印定の義で雜亂を明す。秘決云 印文とは印は形也能譬也、文は影也 能譬也 所譬の體は能譬と違ふこと無きを印文と云ふと、釋云 如以印 印泥印壞 文成不得疑(序分義)

三明一文有八万餘色 三四下秘決には色は定散、光は念佛 接引衆生は來迎に配す。四明可知 五明光極柔軟等照一切 柔軟 此菩薩三毒の愈き煩惱久しく斷じ、法性理體柔軟なるが故、一切衆生を照すに六道の苦息ざる無く、彌陀の光明を感ずるものは身心柔軟と同じ利益なりとす。

六明以此寶光之手接引有緣也 有緣は念佛衆生 經に若念佛者乃至爲其勝友と説く其終極は蓮華を捧げ有緣を攝し給ふ。化得即送彌陀國と釋し讚に恒舒百億光玉手 普照有緣歸本國とある。

八從舉足時——德用之相 八足德用相 光明と摩尼華とは衆生の機熟する時此相を見る。德片とは利益衆生を體とす。

九從其餘身相已下指同於佛 九指同於佛 經は其餘身相如佛無異と説に、釋には總じて指同於佛とは唯說不說俱に佛に同すると云ふ意、そは二菩薩於一切處身同と説き乍ら、二菩薩觀を別に説は又別相あり。されど說不說俱に同じ互に其

相を成す、唯二相のみ別ある。而し別門の方では如佛無異なれば雜想觀の等身の如く、功德平等にて唯慈悲の一也

○十從唯頂上——不足之地也 十明師徒別、不及世尊とあれば全無に非ず全く世尊に及ばざるのみ 是は通別の方で因果差別す 第九科は別門の方で位同す。是れ二科で通別二義を明し功德を等く身相の方は別とす。要するに十六觀は觀々同く弘願念佛を説く 今頂上の文は觀音觀と異りて師徒位別と釋された。師は彌陀、徒は觀音、別は眞身觀 觀音觀の別 果願未圓 果願は 四十八願、觀音は菩薩地なれば未圓と釋す、二相は肉髻と無見頂相、無見頂相は相に非ず好なるも、相も好も内證の差別にて同位と可見。不見之地は等覺地を云ふ、秘決(三三三)頂上肉髻は還住佛頂、無見頂相は住立空中、此二相は通三身門の佛の不及なるに、觀音を如佛無異と説く意、因果一位差別の位 深可仰(取意)

○十一從是爲下總結 十一總結觀名 三の中大科結文とす。

○十二從佛告阿難——生其後益 十二結前生後 當作是觀とは 上文の是爲觀々世音菩薩眞實色身想の文を指す故重結と釋す。上來は能請定善教の方、今當作是觀と説て自開散善の本意を顯し重て再び未來に流迪する義を顯すにある。

秘決(三三三)云 十三觀中流迪告命三所ある。地觀は定散の流迪、華座は念佛、當觀は來迎の流通中略 今觀に後益を説かざるは十六觀の益は皆觀々にあれば別して説かざるなり。

○十三從作是——明勸觀利益 十三勸觀利益

觀には必ず利益あれば其を勸む、此菩薩此土に來現し現當兩益を勸め彌陀の大悲を顯す。

○十四從若有欲觀——使沾兩益 十四重顯觀義

重顯觀義 上來所説の觀に就て重て利益を擧げ次第不亂に觀すべしと勸示す、これ觀の別相とす。兩益は滅罪生善の二益、不遇諸過淨除業障除無數劫生死之罪は滅罪、但聞其名獲無量福何況諦觀は生善の益、先觀頂上肉髻已下は觀義を示す、肉髻はモトドリを結ぶ在家菩薩の相にて娑婆に出て利生し給ふ貌にして、拔苦與樂を體とし其慈悲の體にて在俗の智慧を顯せば三重中念佛に配す、天冠化佛は來迎、其餘衆相は定散にて機相、如觀掌中 手は定惠の二にて一切佛法此二を離れざれば十六觀を定惠の二とし觀音の掌中に收む、如此觀掌中は變相では一の口傳なり、されど一經中、第八觀と今と二箇所ある 祕決(三三三)には第八は念佛、今は來迎とし、左手來迎、右手念佛とし手中に十六觀を收め、一切佛法掌中にあり、明瞭に見よ。」と

○十五從作是觀——隨機引接 十五辨觀邪正

邪正は可知、斯乃已下 今觀彌陀利生と等しと結成す。觀音願重 法華に弘誓深如海、無利不現身、今經には接引衆生と説て念佛衆生の時、蓮臺を捧げ必ず迎へ給ふ。現影十方 同時に往生人あるも一々其前に來臨し給ふ。現は眞相、影は現相也、寶手停輝照十方の上に往生人の前には蓮臺を授け給ふは即停輝の意なり。隨機接引 機相無盡なれば十九説法 三十三身と隨機の益不同也、而し是は且く初に隨へ隨他意に約す。化得即送彌陀國は終に約したる隨自意の益とす。されど唯一往

生の益あるのみ

○上來雖有十五句不同廣明觀音觀竟 三結

○勢 至 觀

來意 佛の二侍を觀するには左右次第にて、佛は悲門を表とすれば觀勢と次第し悲智の次第とす又龍詮所詮に約すれば、能詮觀佛を先とし、所詮念佛を司ぐる勢至を後とす。

○十一就勢至觀中即有十三

十一勢至觀三

一標

勢至は念佛三昧の慧力を司り、令離三塗得無上力たる慧力を以て生死の繫縛を切り給ふ故依德立名す。

○一從次觀大勢至已下總舉觀名

二釋十三

一總舉觀名

問 九、十の二觀に觀名を釋せず當觀に釋すは云何、答三尊とは第七觀にて韋提同時に見て請せしを今各別に説ち、自力修行の次第觀に非ず、佛力を以て三尊同時に見るを三尊の終なる當觀にて釋された。元來第七觀にて請せし時、於七寶地上作蓮華想と説て、依正具足すると見る識知の見なれば上十觀にも互るべき意味の總舉觀名と知れ。

復應の二字を略するは、祕決(三三三) 次念佛 復定散 應來迎 今勢至觀は念佛三昧なれば、定散(次)來迎(應)を略すと、經に説は定、來、念の三ある意を明す也。

○二從此菩薩——次辨觀相

二次辨觀相二

一標

○即有其五一明等

二釋

一明身量等類觀音は身長八十萬億の文を指す。五明中初一は經文あり。餘四は義開、故は如觀世音と説き、不説の方面は觀音に同じ、同不の二義にて互顯すれば等類觀音と釋す。等字楷記八 三丁等字屬上とあり【等類觀音】私云此義一考すべし。等は無差別の方 類は有差別で 等の字で觀勢の功德を明す、非智具足の故、類の字で觀音は悲、勢至は智と差別するも只彌陀の功德を顯すと知れば差別有て無差別なり、互に悲智を具すれば等類と釋されたか。觀門義 秘記等も等類とし下に屬してある。

二明身色等類觀音 上に准じ知れ、觀音觀の身紫金色の文に當る。
三明明面相等類觀音 面如閻浮檀金色の文 四明身光相好等類觀音 身紫金色等の文
五明毫相舒光轉變等類觀音 轉變は變現自在滿十方世界の文 毫相等 眉間白毫七寶色の文とす
已上四は觀音觀に同すれば其に准じて釋す。

○三從圓光面各——不同觀音之相 三明明光不同二 一標
不同とは觀音觀に不説の邊を説故不同とす。されど意味を云へば前觀此相は必ず有り、そして俱に彌陀の功德を顯はす。

○即有其四一明等 二釋
一明圓光大小は圓光面各百二十五由旬の文 觀音は照百千由旬 此不同あるも光體は無限なり、されど由縁不同で觀門の意を以て差別して説くと知れ 楷記八 五丁問答と文解可見。
二明光照遠近 照二百五十由旬の文、上の百二十五由旬は光體 今は光照の用とす。實は無邊照

なれば遠近と釋す。三明化佛多少 四明化佛侍者多少 三四は義開、秘決(全書一)云 二觀不離三光を以て三尊來迎とし能譽とする故也と、事相上の釋意可見。

○四從舉身光明——作紫金色 四身光照益二 一標
科文中總釋を兼り、照益と作色と逆次するは説相前後するも同時なればなり。
身光遠備照益有緣等 勢至は念佛を司り彌陀の利相を顯す故放光十方にて悉く紫金色也と釋顯す

○即有其八一明等 二釋
一明身光總別不同 總別とは先に舉身光中五道衆生、當觀に舉身光明照十方國と、舉身光明の方は一同なれば總とし、先は五道衆生、今は照十方國の不同あれば別とし、總別不同と釋す。
二明光照遠近 照十方國の文、大經に普照三千と説く是亦同不同隨機感見とす。
三明明光所等 作紫金色の文、四明等 有緣は彌陀の光明を司れば有緣とは念佛有緣なり、我本因地 以念佛心 入無生忍、今此世界 攝念佛人 歸於淨土

五明但見 入觀以證之 一毛孔光即見十方諸佛等は、此菩薩の光明は其德を備へたり。
舉少以顯多益 經文明了なるも兼て其意を釋し、此菩薩觀に意を留れば少功を以て見諸佛の多益ありて正行増進せしめ給ふと可知、又當觀は念佛三昧なれば、第九觀の見此事者即見十方等同意で、怖心渴仰は欣求淨土の心即三心、入觀は自開散善に入らしむ。證之は九品往生、益は唯來迎を證せんとなり。

六明依光以立名 無邊光と説は彌陀の尊號なり 故に知ぬ此菩薩は念佛を以て無生に入り給ふを

七明光之體用等 體用は標、無漏已下は釋、經は無邊光と大勢至と二名を説き、釋は智慧光と無上力と二名を出し、四義一なるを明す。體は體性にて即無漏爲體、用は力用にて無上力を釋す。八明名大勢至者——立名也 利他無上力なるを釋す。至と志同意義訓通す、觀門義は至、祕決志は三心の金剛志也と。

○五從此菩薩天冠——觀音不同 天冠不同二 一標

不同 觀音は有一立化佛、今は五百億寶華、寶華 事相では華は因にて淨土より娑婆を見れば唯華のみを見る、勢至は淨土に居する故華と故よ。

○即有其四二明等 二釋

一明は五百億の文を指し一切佛土華を以て體とする事を示す。二明は一一華上有五百億の文、三明は一一臺中十方諸佛淨妙國土皆於中現の文、四明は義開、即皆於中現の文に依る。曰く天冠少なるも不増、十方淨土廣大なるも不減、此寶華に現淨土するは勢至の德、不思議なればなり。祕決云(三三四) 觀音觀は釋梵護世諸天を以て、三光に就て法界衆譬に造り、勢至觀は欣淨の光臺を以て慈悲智慧に就て念佛三昧を造る故 無増減と云也。

○六從頂上——肉髻寶瓶之相 六明肉髻寶瓶

觀音は觀佛三昧なれば天冠由化佛ありて所觀の境を表す。勢至は念佛三昧なれば肉髻に寶瓶あり攝取の光を盛る。五會讚云 頂上寶瓶光顯照 普照念佛往生機

○七從餘諸身相已下指同觀音也 七指同觀音

○八從此菩薩——不同相 八行相不同二 一標

祕決云(三三五) 觀音兼修 行爲能誓行 勢至念佛 行爲所誓行 云云

○即有其四二明等 二釋

一明行不同相：此菩薩行時の文、觀音觀には舉足下足の相を説て行相不説の故行相不同とす。二明震動遠近相 十方世界一切震動の文、遠近とは十方遠近の國土也。三明は當地動處有五百億の文、舟讚云 勢至行時震法界、震所蓮華自然出 蓮華莊嚴如極樂 一切佛國皆如是 四明所現之華——極樂莊嚴也 高顯は極樂の莊嚴諸土に勝れたるを明す。

○九從此菩薩——座不同觀音相 九座不同相二 一標

一明は此菩薩座時の文、二明先動本國相 七寶國土一時動搖の文、觀門義先の字光とある。光明に依て國の動搖するを知とし、光用の字に見てある。國師所覽の本には光とありたるか。七寶國土

楷記 指極樂 觀門義 廣く十方に通すと。

三、四次動他方遠近相 一時動搖の文より義開す。一時の言本國他方を兼る故。四、明動搖下上佛利多少相 下方の金剛佛利は地なり、機方なり、上方の光明王佛利とは天なり、佛の方なり。南

無阿彌陀佛と見る。五、明彌陀觀音等分身雲集相 前の下方上方の中間に分身の三尊顯る、報身變化俱來授手で十方往來の身也。六、明虚空無礙寶華臨空等 法華の分身は樹下に來集、今空中側塞するは、彼は三變

淨土の樹下に集て本一迹多の成道を表す。今經の分身は彌陀一座無移にて十方を攝し、心身無礙にして空中に乘じ往來する事を顯さん爲め法界に臨で、空中に住立し本國に還歸せしむるに、又空中に側つ義推測するに如是。

○七明分身說法各應所宜 七中二 先直釋

經に度苦衆生を應所宜と釋するは、隨機說法せざれば度苦の義あるべからず。

○問曰彌陀經——有何意也 次問答二 一問

淨土にて度苦衆生するは深意ありとし、彌陀經の違文を出し問端とす。但し秘決に別釋あり、是

國入天法門也、於娑婆就念佛、作慈悲智惠替也、慈悲前苦樂俱爲樂 是云淨土 智慧前苦樂俱爲

苦 是云娑婆 引彌陀經 作二論 分淨穢 分悲智 分別善惡也 此意可仰

○答曰今言苦樂——淨土中苦樂 二答二種苦樂二 一標

答意苦樂の詞一定せず、所に依り法に隨ひ異ありと答ふ。有二種 苦樂相無量なるも大分二種あ

るとして三界中の苦は、苦樂俱に苦に攝し淨土は苦樂俱に樂に收むと。

○言三界苦樂者——一念眞實樂也 二釋二 一苦樂相二 一界内苦樂相

地觀釋云 人天之樂猶如電光即捨此身還入三惡の意とす。

○言淨土苦樂者——例舉一可知也 二淨土苦樂相

淨土無爲の上に假に苦樂の名を立て其實體を顯す。今は位と智とに約し 一例を擧て苦樂の相を

示す。

○今云度苦衆生者等 二正釋度苦文義

今二種苦樂を明すは淨土中の下位の苦を捨て上位の樂を望ましむ。元來淨土は苦樂俱に樂なるも苦の名稱を捨て樂の體に歸せしむ。況や三界内は苦樂俱に苦なれば其苦の根元を除盡せしめんとて淨土中にて度苦の法を説き給ふと意得べし。

稱本所求即名爲樂故言度苦也 娑婆にて淨土を願ふ故、淨土に入れば必ず上位に進む。當座道場

生諸佛家の意也。若不然者 淨土には苦無くば可捨の法も無く、唯下位を勸て上位に昇らしむの

み、即ち我等に約せば上品を願ふ意とす。更就何義名爲苦也 淨土には苦無し亦皆聖人なり。

然に彼土にて度苦とは假設とす(上下相對)是觀門施設九品の不同あるも俱に具三心なり。され

ど正行増進に約し、下位より上々に昇らしめん爲め、明して淨土には苦無き事を結成す。

○十從作此觀者——總結分齊 十辨觀邪正

餘觀に異し中間に邪正あるは、今は念佛三昧を體と説けばなり。若し觀の下に置かば觀佛に就く

邪正となる。秘決(三三五)攝邪正觀中不放智惠也と云云。

總結分齊 上來日觀已來觀佛の邪正は當觀に來て念佛に極れば、辨觀邪正總結分齊と釋す、これ

上來の依正二報は當觀にて説已れば觀佛の位も念佛三昧に極ると總結する也。

○十一從觀此菩薩者——除罪多劫 十一修觀利益

除無量劫生死之罪の經文を指す。

○十二從作此觀者——重生後益 十二重生後益

十二重生後益

前段は觀法に依て現益を明す、今は常遊諸佛淨妙國土と往生の益を明せば重生後益と釋す、現益の上に當益を明せば重也。當益は往生の益也。

○十三從此觀成——辨觀成相 十三辨觀成相二 一標
總牒二身等 悲智一雙し不離の故合して牒結す、是れ三尊功德極る意、又依正具足なれば當觀に於て十三觀を結すと知れ。

○斯乃勢志——常遊法界 二總結讚

永絕等 六道生死を胞胎とす。今無始生死流轉の胞胎を勢至智惠力を以て永絶し淨土に遊ばん事此菩薩の徳とす。

○上來雖有十三句不同廣解勢至觀竟 三結

上來とあるに今に限り解とは、上來の觀佛三昧は明、念佛三昧の時は解とす。秘決(全書一)法界皆明往生極樂、衆譬者觀佛三昧也。解出離生死往生極樂者念佛三昧也、以觀音勢至分別此兩宗也

○普 觀

得名異解あり、山師の意は上十一觀の能觀の智を以て普觀とす。雜想は十二觀の依正を結し所觀とす。私記(五)一丁は普觀と雜想を相對し來由を明せど觀門義楷記等は相對せず來由を明す。普觀は甚だ難解なれば能々分別すべし。觀門義六一 今此普觀前十一本意總成觀也 故云普觀 其故上十一觀阿彌陀佛依正三報總別事悉說已、又其十一觀 爲開觀門智 結一一觀之能觀 言普往生觀也

經見此事者則此上十一觀詞也云云とあるは、上十一觀の能觀の智を以て普觀とされてある。

他筆下丁十一 第七觀にて證得したる三尊の依正を開きて十一觀の所觀とし、當普觀を能觀として十一門(定善中散善ある意)迄此を觀すとあるは、先の觀門義と同じ。次に自往生を觀するは何の要あるかと問て、第十觀の佛體は衆生離れて無れば其佛體の功德を説く依正なれば、自己往生を證得するより外、依正の體無しと顯さん爲なりと、已上要するに私記は傍正の意で普雜二觀に對し其意を示し、山師は普雜の上にて其意を闡明され、楷記は文の上に於て來意を述べられたる各據一義と知れ、今總括して其意を辨すれば、上十一觀にて即便の義成すれど、機の上に於て領解せざれば、正行に還り華開已後の機根の上に於て往生の謂を知るなり。曰く前來諸末師の如く能觀の智を以て此觀の體とし、上十三觀にて成立したる能觀の智惠を以て所觀の體とし、其上なは一度分別し往生する意味を徹底的に領知するのである。即ち見分の上の自分分を以てウンと承知するが如く、上十一觀所成の能觀の智を離れて、別に無くも同一精神の上に見分自分分と分てウンと合点する處を普觀と云ふ。是れ普觀は自往生を觀す、上來依正二報の衆譬は唯大悲を説にありと識知する時能觀が成立す。此能觀の人を離れて行體も無く、行體を離れて往生無しと他方の意味を觀するのみで即上十一觀を觀するが全く此普觀にて別に體無きを普と云ひ、又は自己一人の往生が十方衆生の往生なれば普と云て、往生離れて正覺の體無しと再び還て觀じ、正因往生は成するも正行の機に還り修する時、十界の依正皆悉く往生と顯る時普の義成す、上十一觀は要するに十界の依正にて一切を攝盡し往生の姿と顯る、其十一觀を再度一時に總合し觀すれば普と云ひ、其か自己往生觀なれば自往生

とす。これ山河大地草木國土悉く慈悲往生の體と顯現す。其意味を秘決には九品往生に合し、又他筆には定善に十一門ありと示された。上來約言せば當觀は正因の往生を正行の機に還り往生する意味を觀じ其を識知するを詮要とするのみである。

○十二就普觀中先舉——即有其六 十二普觀三 一標

○一從見此事時已下正明牒前生後 二釋六 一牒前生後

見此事 上來の十一觀成する時今觀生ず、先觀已て別に生ずるに非ず上來の觀に並べて能觀の智生ずと結する意とす。

○二從當起自心——作自往生想 二明自往生惠二 一標

凝心 通定散。入觀は別の定散。即常 今身に凝心入觀即座即身に常に生想を作す。常とは其儘生想を作す、即便往生の義で、行住座臥に法界の現象を慈悲の體と見て極樂界中の人と思ふを常作と云ふ、即ち佛作佛行の行動か。

○即有其九一明自生想等 二釋

九小文は定善を九品に入て定善の見を成立す、秘決（全書一）他筆下（十八） 定善に九品ある文詩の間答參照。自往生とは正行の機方で自往生と云ふ。正因に約せば普往生觀とす。今は約機の上で自往生と云ふ。自身往生とは所求の體に成じたる他力往生の行體なるも、我自身に阿彌陀佛者即是其行と聞て、自心が起る時願行具足する故自往生と云ふ、例へば衣内の妙珠を知らざる間は貧窮の如し今佛體に成じたる往生の行なれども我自身に聞て得無生忍するが往生也、此自身往生に 九の往生

想を出す。經の當起自心とは上の見此事時と云ふは上三尊を見るに依て起る心なりと明す。

二明句西想 生於西方極樂世界の文。三明星華想 於蓮華合想の文で四威儀中座儀勝の故出す。

四明華合想 作蓮華合想の文、蓮華無けれど座する想を爲せ、合せざれど合する想を爲す。これ先に觀じたる淨土莊嚴の上に別して蓮華に座し合する想を爲す。事相上で云へば華合は前念々佛後

念作惡なれば、前念即便の義成じ知識の語を聞く時、火は來迎の光明慈悲と見れど、又平生出定の時は火は火、水は水で慈悲と見ざれば蓮華合する貌、機に還て十二大劫華合し、見佛開法不能なるは慈悲と見ざる貌とす。

五明華開想 經作蓮華開想 機に還れば火は火、水は水なるも其を來迎と見るは聞く意にて正く

九品の想とす。六明寶光來照身想 有五百億來照身想文 一切万像即慈悲と見れば即照身想なり

七明既蒙光照作眼開想 上の想は此想を成せん爲め、眼あるも淨土莊嚴を見ざれば無きが如し、

今眼開て其を見る。此を觀の詮とす。八明眼目既開作見佛菩薩想 第七所現を見る位、前は普聞知識の方とす。九明開法想 水鳥樹林は前六觀、及與諸佛は後七觀、即上の十一觀を舉て、この九科

は九品を標し、定善も等しく散善の往生すと顯す也、九明と分つ意味も爰にある、曰く定中所聞の

妙法今十二部經と合して眞實となるべし 秘決參照（全書一）

○三從與十二部經合——守心常憶 三定散常憶二 一標

今定善と云べきに定善とは定中、散は出定時、入定の時所聞の妙法十二部經と合すと釋す。これ定散四威儀に得道する意とす。故に定散無遺、散心の時聞きたる十二部經を遺れず入定の時に

妙法と合し、又出定の時散心中に聞きたる妙法に合せよ、これ定散中に十二部經あるなり。十二部經とは大乘の異名にて散善に讀誦大乘と説き、其を念佛と釋す、されば定散俱に念佛を明すこと知るを普觀とす。觀師の普觀は難解の法門なりとは此等の意かと思ふ。

事相上では像觀は令與修多羅合、今與十二部經合、像觀は水鳥等を能譬とし觀經の修多羅に合するは假の形像を眞の華座に座せしめて、假を眞に合するは我領解の體を觀經に合する機の方と見るなり。今其上に眞假一體の上の水鳥樹林なれば、自然に一代の十二部經に合す。一代は今經の能詮なればなり。これ一代今經同一念佛の貌とす。水鳥樹林等は佛の行體、十二部經は南無の方、南無阿彌陀佛を以て佛の本意とす。故に十二部經を上品に讀誦大乘と説き、其を下輩に南無阿彌陀佛と説は讀誦即念佛とす。然ば今は華開已後、安心領解後の正行（起行）の功德を讀誦大乘の人とし水鳥樹林は前所聞の十一觀の依正にて定中識知の功德と十二部經と合すれば、自ら我等往生の行體と顯れたる貌にて是れ通別一體の義とす。

○一則觀心明淨——無三邪之障

二釋

一則は入定、二則は出定とす一往の義、深義は一則は定善、二則は散善と見よ。觀門義六丁云定中所聞十二部經と合し、弘願念佛三昧に歸し往生無疑なるを觀心明淨と釋す。又秘決は一則觀佛三昧、二則念佛三昧と云云。二則諸惡不生等 觀門に依り悟を開て稱名すれば往生の因爰に成じ、極樂の果顯れて再び迷界の果を招かざるを諸惡不生と釋す。惡は捨自力、歸入他力の意とす。内與法樂相應 内は内心にて出離に無疑なれば能く苦に堪え得べし、内心相應法樂の故に（三心

明了の姿、三心起れば一切皆慈悲の體と感得し三毒起らず、變相の宮殿に簾かけたるは此意とす、内より諸方を見るも外面よりは見えず、内清淨法樂相應の標示とす。

外則無三邪之障 内心に法樂あれば外に障り無し、内は内心、外は身口と見よ。三障 日觀の三障、下三品の輕次重、又三毒、三業障、第九増上縁に諸邪業繫と釋す。念佛すれば能く此三障を除滅せしむ。

○四從見此事已下明觀成之益 四明觀成之益

上來の十一觀は極樂の依正を説き三尊を見るを教ふ。當觀に於ては其理由を知るを詮とす。（所觀の境に就て三尊を見て依正を具足せしむ）故定中所聞の法契とは、經文は見無量壽佛極樂世界の文である。是れ觀成が即益にて普觀成するを見無量壽佛極樂世界とは云ふ。故に普とは依正に普す又此經文は上の夫人疑問の辭に對す。曰上文未來衆生 云何當見 無量壽佛 極樂世界の答請に上の十一觀を説き此に至て見此事已等と結成するは序正一同し章提未來一同し、光臺中に依正具足する意判然す、此を結歸すると觀成益とは生想である。

○五從是爲下總結

五總結

當觀は上十一觀に就て往生想を爲す故特に總結とす。

○六從無量壽佛——護念之益 六明護念之益二 一護念

無量壽佛は正因（法界眞像唯一體と顯る姿）報身無數等は報身兼化の姿。與觀世音大勢至 定散隨機の姿にて正行、二菩薩は一佛の用にて悲智の二門なれば、衣服飲食臥具湯藥と隨機に顯れ給ふ

と信すべし。問護念の益を結名の外に置は云何、答秘決云 上三尊に通せしむ、觀門義十三現生護念の文參照。事相にて辨せば第八觀の三身同證とは能譬の智恵で、佛法身、觀音報身、勢至應身、三尊即三身にて法界身と成り、定來念と隨機利益するは現當の兩益にて一切方法と顯れ利益衆生するを護念とす。於現身中得念佛三昧とは、能譬智恵の窮極、今は來迎なれば所譬の極、能所不離三身即護念とす。他筆下十九化身來迎は如何、答當觀は上十一觀を觀じたる人の證得の狀態、此人は未來の凡夫とす。凡夫とは下三品の機なれば化佛來迎にて、今觀にて上十一觀の機は下三品の機なりと示すと、又來迎の三尊を問て、答には證得往生の體は住立三尊なればなり。觀門義六九經は來迎佛々先舉し、釋は能觀の人を先とするは、經は普觀と云ふ方で佛より來り給ふ唯來迎の方、釋は自往生と先行人の前に佛來る、機に向ふ方と見よと。

○斯乃群生——常如眼見 二總釋

注念 專心念佛の意、願見等は近縁、依正等普觀成す、常如眼見、心に見る事眼見の如し即ち上の十一觀、立所に自往生の心を顯すを云ふ。總釋とは當觀の本意を重て述す。常觀は別に其體無く上來の諸觀只往生の爲と知るにあり。故に當觀成すれば上の諸觀成す、これ依正二報とは定善の總體なれば、當觀に依て定善一門の義成する總釋と知れ。

○上來雖有六句不同廣解普觀竟 三結

廣解 解とは十六觀に互る意とす。當觀別に解無く上觀々の能觀する安心を明すを觀境とすれば即ち其が十六觀に互れば廣解とす。

◎雜 想 觀

來意 上來の諸觀は依正通別真假別觀し、次第觀成し自往生の想を作す、然るに上十二觀は境大心小なれば、今佛身に約し先小像(丈六)を觀すれば、其境に就て真假大小依正を並べ雜想し、自生觀を成じ易からしめんとす故に前觀に次で當觀來る。

問 上來數々勸めて依正を一一觀せしめ不得雜觀と誡めたり、今何ぞ心亂る處の雜想觀を勸め、易とするか、答解有二義、一義云 上來依正通別と別觀するは易に似たるも例せば、第七は第八觀に丈六とは云はず、第七觀に准せば大像なるべし、今は丈六の小を觀じ以て漸觀を開く、これ小身に約して大身及び通別依正等を雜想するは入り易しとす。二義云 上來別觀は觀行次第なり定善の故に、當觀は觀解を本意とす示觀を明し故入り易し。

得名 諸師の釋不同、淨影は佛菩薩を雜觀する故と、天台は佛身大小不定なる故と、今家爾らず第七所現の三尊を開し上來十一觀の境とする故、真假一同乍ら而も各別に觀じ、依正具足し乍ら亦各別に觀ず、されば十一の觀は第七住立の佛を其儘觀の境とは説かず、當觀にて其佛を觀する時雜想觀とし、そして當觀の觀境は真假の中は真、大小の中は小、通別の中は別、依正の中は正とし而も小身に約し大身を顯し真に約して假を顯し、別に約しては通を顯し、正に約して依を顯せば雜想と名稱す。されど此第七所現の佛通別真假依正等は等しく法界身より成じ給へる故、一同にして無差別の意味を示して、雜想とし、此意味を亦開きて通別真假を等しく、一一所觀とする故、十一觀も 真假一同の義を成立す、此真假一同を委釋したるは私記五九丁必參照 又普雜二觀の差別他

問 變相に等身の三尊を緘る意如何、答座立俱に十三觀の境なりと云へど定の威儀に應ずる方は座像を本とし、三輩の機を來迎する方を立佛とす、要するに十一觀は座像なり。第七も華座と云ふ時第八の形像を眞の華座に座せしむ 第九も六十萬億の座像 當觀に初て住立來迎を説く、是十一觀は能請定善教なれば座とし、自開散善教の方は九品來迎に向ふ立佛とす、これ座立の二佛を定散の二義に説き分つのである。今第七の佛を八觀已下に説き、當觀にて雜想する時丈六の小身に極む。故に經文の住立佛をば變相に華座計りとし、住立佛をば當觀におり定散の中間に顯れて定善乍ら即ち九品來迎の佛と顯れ第七觀の佛は正因一位に互る意味を示されたと思ふ。

○十三就雜想觀中——即有十一 十三雜想觀三 一標
 ○一從佛告阿難——結勸生後 二釋十三 一結勸生後

上の十二觀を總じて結勸す。即ち依正通別眞假を結勸する也。但し結と云ふも亦上來の觀を悉く開く意あるを忘るべからず。上來は各別の次第觀、今合集して觀する觀法なり。結勸とは經文は若欲至心生於西方の一句、此文に上十二觀を收め其を結し再び勸む、これ眞假一體依正具足して觀せしむ。結勸は念佛、生後は來迎、意は上十一觀の念佛の智慧を結勸とし、當觀を慈悲來迎とし生後とす。一句八字に十一觀收れば其が結觀で、そして雜想の體は十一觀を離れて無れば此八字が即生後とす。

○二從先當——想水以表地 二表眞表地二 一標

先當觀於一丈六像。是正報の眞假、在池水上は依報の眞假、水は娑婆の假水、地は極樂の瑠璃地、是依報の眞假とす。眞假一同は池水上（南無の池水）に 丈六の形體（阿彌陀佛）を座せしめ眞假一同し南無阿彌陀佛を明し一經を收むる意と知れ。私記五四云丈六像は娑婆の形像、在池水上は極樂の眞、是を雜へて在池水上と説き、釋に想水以表眞等と無盡に釋して雜想の義を成じ、眞假一同を成立すと。

觀像以表眞等 像は第八、眞は第九、像即眞と明す、表顯の意と見て、慈悲を領解し萬像を衆譬と悟れば像觀成す。其上に一塵一法皆慈悲と照さば第九觀成す、爰に於て像即眞と云ふ、已上此文は第八第九の意を明す。

想水以表地、第二の假水を以て第三の地を顯す、是依正の假を以て依正の眞を顯す、意云心水即寶地と明す。私の領解離れて所求の土無き故、第五の寶池の從如意珠寶生とは、私の厭欣も獨り起らず彌陀無漏の心水より生ずる念佛なればなり。

○此是如來——易得成也 二釋

觀像想水等は我等の心調ひ難ければ先づ易境に心を留めしむ。是を易境轉心と釋す。これ大身は凡夫心力に及び難ければ易境に非ず、小身は凡境に相應すれば易境とす。易字楷記二音、觀門義イの音、祕決エキの音、轉心 車輪の巡るも體變らず、法體變らず、行體と顯る意で像即眞と轉す。入觀は入眞觀なり、或在池水華上は當觀の文、或在寶宮等 如先所説の文より釋出す。池水に局らず一切皆此像佛の所依と顯す。曰く第七觀於七寶地上作蓮華想、第八觀

在彼華上等と説けり。玄義にて云へば池水上は南無の心水の上に行體を乗せるなり、寶宮閣内に形像を收るは止住百歳の念佛を置く意、或字は一一に形像を互す意秘決(全書一)三三九一 一經の五義を以て釋し、丈六像の中に一經を收る意を以て辨じてある可見。
如是等處等は、佛の所在遍滿極樂界にて非一、且く兩三を擧るのみ。皆作化佛 前の如く報化一體の化佛なり。機境相稱 能觀所觀相應する觀成の位、願行具足する處を云ふ。秘決(全書一)三三九二云 機は障重の機 境は法界の體 以無緣慈攝諸衆生の慈悲を成じて而も皆悉く所觀の境と成すと云云、私云相稱とは生佛不二一念不虛妄に往生する義で、觀門義に應機爲成易詞也とは、平生の衆譬にて柳と顯れ花と顯れて、生滅を示すは應機の意である。

○三從如先所說——勸觀於小 三明難成觀小

經如先所說等は、觀小の理由を明す、曰く上來の觀々(別して第九觀)は境大心水にて難成なれば今勸て觀小せしむ。經の先とは眞身觀の意とす。境大心小卒難成 六十萬億は境大 心小は凡夫自力の心を云ふ。凡夫は一切を見るに一所に物を見ず。竹は竹、松は松と別々に見る故小と云ふ。難成就 自力ならば大小俱に難成、他力ならば大は願力に依て成じ、小は大が家の小なれば、
(報身の至極を小身の化と云ふ)心を懸るに疎らずと俱に願力不思議を明す。故秘決(全書一)三三九三云 境は法界以無緣慈を成す故に圓滿にして爲大、衆生の心智慧に留るを爲小此前には唯智慧唯慈悲能所相背けば定て觀難成とある。聖息悲傷 聖意は釋尊の意にて已下他力を示す 悲傷 佛の大悲脫苦衆生の爲に觀門を開て小身を觀せしめ給ふ。秘決(三四)に依れば聖意は諸佛如來、悲傷は法界衆

譬と顯れ生滅を示すは悲傷にて我等が爲に示されたと云云。

○四從然彼如來——致使想者皆成 四想者皆成

此一段、衆生の方は小、佛の方は大とは、自力隨緣の前には小機の爲に小佛、大機の爲に大佛とて機根に隨て教も佛も不同である、今は佛力願力の故、衆生の心は狭小、佛の方は聖量彌寬と云へど、直是彌陀願重想者皆成 と釋して他力願力を示された。他下筆十一 正行面にて大小難易あるも正因の謂にては共に佛本願力の故、易成と云ふと。觀門義六十二 云此觀は大小俱に觀すべしと、諸末釋委可見。

○五從但想佛——比較顯勝 五明比較顯勝二 一標

○想像向自得福——得益之功更甚 二釋

比較顯勝は第八形像第九眞佛とを想ふ勝劣比較に似たるも、既に想像得眞量福とあれば、眞を想ふ功德別に増すべき無く只像を想ふて無量の功德を得れば、重て眞を思ふ功德光を増て空しからずと示された。故言 何況觀於眞佛者得益之功更甚、更は倍増の義で別の功德ありと云ふではない。前の利益に加へて其益等しと云ふ意也。私記五五十三 觀念佛 眞假一同 滅罪生善 癡立傍正等と重々に約してある參照 秘決三四 眞假一同すれば起盡判明す。此を比較顯勝(觀念)無差別中の差別を知らしむる也と、假は念佛、眞は來迎と比較する也と云云。

○六在阿彌陀佛——明皆是眞 六明佛像皆是眞二 一標

正明能觀所觀佛像雖身有大小 皆是眞に多の文点ある。

六句科釋雖有文点に異なる。

正明下能觀二所觀佛像一雖三身有二大小一明皆是真上
 正明二能觀一所觀佛像 雖二身有大小一明二皆是真一
 正明二能觀所觀一佛像雖三身有二大小一明二皆是真一
 正明下能觀所觀佛像 雖三身有二大小一明 皆是真上

義山本
 觀門義
 秘決他筆
 私記

明して能觀を成せんとす。これ能觀とは三尊、十一觀は三尊を觀するにあれば、佛の丈六八尺を能觀と釋す、これ所觀の佛像に大小不同あるも俱に眞實身也と願力不思議を明された曰く能觀の機方に滿虛空中の所觀を收む。能觀は定散所觀の佛像已下は念佛とす。意は大身を現するも小身を現するも能觀者の機の差別にて法體は唯一の慈悲なり俱に眞なりと。

秘決 他筆等は能觀所觀を科とし佛像の下を釋とす。意は經に佛像を説く大小あるも皆眞なりと明す、これ能觀を成せん爲に所觀を定む、能觀は丈六、所觀は滿虛空中の大身、この大小あるも俱に眞の來迎離れて無しと。

大……能譬(極樂)……眞 來迎(體)……慈悲 所觀 (極樂)
 小……能譬(娑婆)……假 念佛(名)……智慧 能觀 (娑婆)

此差別を作り一位ならしめむ、要点は 阿彌陀佛の體に衆生の智慧を攝す、此を所譬の體に能譬

の衆生の智慧を具すれば即ち彌陀より顯るなりと示された。秘決(三四)に此を彼此三業不離と釋し彌陀の身業と衆生の意業と不離なれば能觀所觀一連にて難想せしむるが當觀なりと知れど。

經は眞、釋に佛像とは所譬を能譬と爲し、三身門の功德を此凡夫に證せしむと秘決にあるは佛は凡夫を佛に同じ、釋は佛身を凡夫に同する衆譬の二義と知るべし。

義山師の意は正く行者能く所觀の佛像を觀すと科すは、能所は前に同す。私記の意は能所俱に佛像に約し、其佛像に能觀所觀の義を具足するを示された。其意は觀の體は本佛の願智に在り、佛智は念佛衆生を照す。衆生は光を蒙て佛境を照せばなり。

○即有其三一明等 二釋

神通は神境通で六通中餘五を兼ぬ、下に六通自在と云ふ。無礙獨周は法界身を顯す。問經は神通釋は身通の違如何、答釋は變現身相の方を云ふ五六六大に具する有情の方、經は變現の德を云ふ言如意者有二種 阿彌陀佛神通如意的德にて在す、自利利他の功德を他方に成じ給へるを二種の如意と云ふ、又前の能觀所觀の二意に合す。如衆生意は所觀の義に合す、隨念皆應は其義也、

如彌陀意は能觀の義に合す、五眼圓照觀義是也。皆應度之とは願力の故九品來迎す。

一者如衆生意とは凡夫も厭欣心ある、されど自力難成なれば、彌陀は其願力を以て其厭欣心に應じて念佛せしめて來迎し給ふ也、即ち九品來迎の面にて大乘の人は其に應じて度し、小乘及世善十惡等の人にも其に應じて攝取し給ふは衆生の意の如くならば如意と云て利他の方を示す。此一者の下は大慈を機の方に取る。二者の下は衆生の機を大慈にモタヌ、第一の意は衆生能觀の意の如く所

觀の佛に應じて度し給ふ。佛が衆生の意の如くなる意味とす。意とは識知で衆生識知の意が六十
万億の大身を觀すれば万像の上に於て風に説法の意を爲し三角と顯れて身轉來迎と爲り、生滅を見
て口轉説法とす。第二義は衆生識知の意が佛の慈悲の如くなる。第一第二互に機法を明す。秘決
參照(全書一三四二)

二者彌陀意 佛の自利々他の功德、一念之中無前無後等とは、十方より來生の衆生暴風駛雨の
如くなるも、無前無後なるは彌陀神通の徳とす。私記五七下 此下を即便往生とし、今經を開く時十
人百人同時に願行具足するが神通如意なりと。

五眼圓照六通自在 一肉眼人の眼は不正見、遠は小に見、小も近くは大と見る。此に對し肉眼
の功德を明す。二天眼 諸天の見の如く障外の事を見る、而し諸天は下天は上天を見ず、佛は上下
自在に之を見る。三法眼 乃法悉く衆生利益ありと照す。四惠眼 一切諸法悉く空と照す。五佛眼

諸法實相を見て中道の理を照すを云ふ。圓照 佛眼の功德不闕を示す。
六通 一天眼現在を知る通力なり已下可知、此等一切法に於て自在なれば意の儘に度衆生せらる
三輪開悟他筆下 二丁 には身口意、輪は説法とし攝取を引用す。觀門義 十三 三身と見るは七八

九の三身と顯、轉惑利生と開悟せしむる意、三身化用皆立淨土の意とす。各益不同 大小身と現
じて一代の本意も今經に顯る義と可見。
二明或現大身或現小身 秘決(三四)は小文を三尊に配し此文を隨機分身の意と見てある。
三明身量雖イ大小等 所觀大小身の上に第九真身觀の佛等の真金色なるを釋す。此所現之形の上

に圓光化佛及寶蓮華如上所説と説は其意である、八万八千の相好の中に圓光化佛と云ひ又寶蓮華と
云ふは、上華座觀の體を大小の身俱に座すべしと云ふ意なり、如此意得れば上大身にも依報互り小
身にも具足し圓光にも亦異り無しと顯す故に下に光明與身無異と云ふは攝取不捨の光益迄も互る意
と見るべし。

問 當段に丈六八尺に至る已來とある。第七段に所現之形皆真金色とある、何ぞ第七文段の所現
之形皆真金色の文を此第六段中に釋するか。答 私記五八下 第六段は觀佛三昧、第七段は念佛三
昧と云云。他筆五丁 正因正行を以て辨ず。秘決(三四)三小段を三尊に配し當文を勢至念佛とし、念
佛は色なれば下文を引上て釋すと。觀門義 十四 二義、一云丈六皆真金色の意を顯す。二真金の相
真身觀の身色と同なるを明すと。楷記三義 前(第六)明真體同真報身、今明 身相同真金色 後
明(第七)身相同真身相、何由三義次第説者 經言所現之形皆真金色、現文(經)正明真色同義、
而望前後文相 意通兩向云云。已上大略諸末釋義意同とす。第七段下參照。

此即定其邪正也 真金色を正と定む、正身は正 小身は邪、機方で小身と思ふが本來大身の真身不離
小全大と顯れば小身と思ふ情は邪也大小俱に真と見るは正也又小身は身觀故我功にて觀ずと思ふは
邪也他力より而らしむと我功に非すと知らば大小俱に正となる大小俱機方にて見ると思ふは邪也
○七從所現之形——與身無異 七與身無異

所現之形の句を第七段に屬するは、如上所現は真身觀を指す故に此文意を得て、所現之形皆真金
色も同じく真身觀の攝取の光とし、圓光化佛も佛第九の攝取の光なりと顯す。若し前科のみに所現

之形を屬せば只雜觀の眞金色にして、第九の攝取の光と云ふが顯れず、前の或現大身も一觀に局る。今第七に屬する上は或現大身も上の七八九觀の攝取の佛なりと云へる。如上所説の文あればなり。故に上へ屬せば三尊皆眞金色となり、下に屬せば上の三觀を離れて大小身の佛なりと明す。如上所説は第九觀を指せば此文に同じ、第七に屬せば第九の眞金色と云ふが顯れて三尊全く上三觀の佛なりと知らる。此は觀門義の意、

秘決云 所現之形皆眞金色は念佛なれば上に屬し三尊一體の念佛が顯る、勢至獨り念佛ならず、三尊合し念佛なれば、或現大身の觀音は身相を勢至の身相とし、其皆相より放つ光明なれば觀勢不離にて上へ屬し、勢至の所現之形となるなり。三尊一體なれば眞金色が三尊へ互る、佛と觀音離れて勢至無くば第七へ屬するは來迎を顯すなりと云云。問或現大身等と彌陀の身なるに二菩薩の身とするは如何 答三尊一體とし念佛なれば彌陀獨りの念佛ならず、故に一佛の身相に二菩薩の身自ら備るなり。身雖大小有殊等 先文意此文段にありて然も眞身に同すと釋す。與眞無異とは眞身同じと釋す即ち第九の光明攝取の身と見る

○八從觀世音——指同前觀 八指同前觀二 一標

指同前觀 九十一の前觀に三尊の身量を説くが如くに今雜想觀も准じて知るべしと

問二菩薩は何より出るか、前にも觀せず今出すは云何、答三尊一體ならば自ら二菩薩にある、上の或現大身の句より二菩薩出づ、於一切處身同の故に、

○佛大侍者大等 二釋

觀音八尺ならば勢至亦八尺なり身同と説故と、又三身等同なりとの二義ありて後義正とす。

觀門義十五云 於一切處身同の文を彌陀の身量に同すと心得釋し給ふ也と。秘決(三四)是三尊長一同せしむる也。非脇士之義、無三角形 非因果 體長一位 而無差別也とありて、一佛の上の身相光明が二菩薩と顯れ只一の名號とす。變相に等身の三尊と現す、されど三角なり身長同なるも連座大小ある故三角とす。此は第七住立三尊なり、等身は來迎に非ず、唯一の名號唯一の慈悲と見るべし。

○九從衆生但觀——正明勸觀二別二 一標

衆生は能觀の人を擧ぐ、首相は所知の境を辨す、上は等身三尊を明し、今は二別を明し同の上の不同とす。

○云何二別——有一寶瓶 二釋

二菩薩特殊の相を釋出し因果依正不二を示す、此三尊利益一同なるも司る處、悲智定惠の二別不同なりと明す。

○十從此二菩薩——遊法化益 十遊法化益

助阿彌陀佛普化一切の意を釋す。これ三尊同益を顯す爲也。宿願緣重 因位の誓願成じ衆生稱念必得往生す。其願に應じ俱に彌陀を助顯し自念救他す。之を三尊宿願緣重と云ふ。又悲化經に依れば同時發心と説く 誓同は因行同、等至等は果報同、影響等 助佛普化の義を釋す。發心既同なれば證果亦同じ、されど願力を以ての故、已得菩提捨不證と常修梵行し。影の形に響の聲に應ずるが

如く常隨し佛の教化を助け、一切の處に於て身同の義を顯さる。

○十一從是爲下總結 十一總結

○上來雖有十一句不同廣解雜想觀竟 三結
定善の大科四段中第一に正しく別釋竟る

◎上從日觀下至雜想觀已來——思惟正受闕句

二總結成

上來觀を委釋すれど今重て十三觀の起る本意を述す、これ一一の文相不同なるも此十三觀は韋提の行門、自力の執を改て而も其請を開顯す。第四請とは欣淨緣の唯願世尊無憂惱處は第一請。教我觀於清淨業處は第二請、我今樂生等は第三請、教我思惟正受は第四請也。

第四請は行門なるも、觀門に依て開悟すれば法體更に無別、十三觀皆此第四請に酬ふる義となる。又能請定善教は通門の方、自開散善教は別門の方、二俱に韋提の請に酬ふ、何とならば思惟無不足なれば定散平等なり。善體全く弘願別門の定散と顯ればなり。別行請をば又顯彌陀願意と釋する故、第七觀の未來衆生の請も示觀の滅後の請も、欣淨の別行の請に攝し、思惟正受の見が即所求を見る時行成の定善と云はれ、所求去行一體と云ふ所を十三定善と説きたれば、上從日觀——思惟正受兩句と釋された。

◎總讚云初教日觀除昏闇等

三總讚

總者上の別讚に簡ふ、水觀等に偈讚を説が如し、讚意は 爲遊心故 爲助念故 爲顯證故 爲總

持故、八頌三十二句を以て十三觀を頌す。秘決集云 總讚は歡喜也、衆皆皆衆生の爲め出離成佛を教ふ故歡喜踊躍の相貌也。

初教日觀除昏闇、日觀也、三識知中第二義を執る。障を知りこん闇を除く故、佛日の光に遇て往生の一路を覺る也。想水水想淨内心 水觀也、水觀二義中初義を取る。

地下等の四句 地觀也。水觀に依て讚す、水觀中三種莊嚴を説く故。

寶樹 垂瓔間雜菓は寶樹觀、觀の本意菓に佛事を現するを所説とす。池流德水注華中寶池觀也、

水德水を湛て衆生の樂事を示す。寶樓寶閣乃至等 無蔭寶樓觀也 光々相照とは淨土莊嚴無量なる

も光明を證とす。三華獨廻等二句 華座觀、三華は三尊の座、獨とは三尊の功德衆譬に勝れて、獨

り其德一切に蒙らしむれば座する處の華も餘に超えたり。四幢承曼 華上の四柱寶幔を受て釋す。

冥識心述等二句、像觀也。凡夫は眞佛觀難成なれば假觀無差別し、其上に眞を觀するに難からず

と。一念心開等の二句 眞身觀、攝取不捨と知れば六十萬億の身量憚り無し。身光相好等は眞佛を

見る、詮は光明にありと定むる意也。

救苦觀音等二句 觀音觀、光中に五道の苦相を緣し、之を救ふ救苦の菩薩也。救苦の衆生は娑婆

にあれば菩薩常に娑婆に在す。勢至威光等二句 勢至觀。威光は威德勝れた光也。

歸去來極樂乃至說法聲 普觀、觀の本意往生極樂にあれば特に歸去來の三字を置て、法性常樂の

都へ歸らしむ、出離の門多くも往生極樂を詮要とす。正念西歸等は正しく普觀の行相を讚す。見佛莊嚴は觀成就し說法を聞を讚す。

復有衆生等の六句は雜想觀也、心帶惑は上の觀々皆眞身觀に歸し、念佛不捨と知れば疑雲除て大身を觀するも難きに非ず。然るに猶疑惑者の爲に重て大身は凡夫心力の不及處也、丈六八尺を觀せよと當觀に勸めたる事を示す。

眞上境、第九觀とす。恐難成は疑心ある故。漸觀雜想觀の丈六八尺を云ふ。小身成すれば大身成する故漸觀と云ふ。華池丈六等は所現之形皆眞金色の文意とす。

變現、或現大小身の文意にて像即眞也、靈儀は佛身を指す。

應物時宜度有情眞假俱に法界身也、物の時宜に應じ普く有縁を攝す。

普勸同ヲ知識等、再び十三觀の意を讃じ、我等を勸め弘願一乘に歸せしめ念佛いべしと結讚す。

曰く日觀に觀於西方と説て、此意を十三觀の觀々に説く、これ能讚の觀佛三昧は念佛に歸す。定善の總體は願行具足の名號を説たる經文なりと知るが能讚佛語にて、是が即總讚の義と知れ。

○又就前請中——廣明定善一門義竟 四結成
前請は第四請、此請中依正を分別し重て結する意は、觀境は十三を出せず、彼十六定善と固執する義に簡はん爲めである。として

〔章提能請……定善——願所求——所入身土——廢立
佛自開……散善——調衆機——能入万機——傍立——攝取法門

此時 能請定善は自力とし——定散俱に廢す——定散顯行
佛自開の時攝取なれば——定散俱に攝取す——定散示觀

故に定善一門之義中に散善をも含み、思惟正受の二句を以て依正分別し、所入の身土を定め、此土へ生ずる機は散善一門の機あれば、今は所入の身土を定むるにあれば雖有二義依正二報不同、廣明定善一門之義竟と結釋し給ふ也。已上

(大正十一年十一月三日 福井市綠町 安養寺にて 畢了す)

◎ 結 文

上來日觀已下十三觀は 釋尊が序分欣淨の第四の請に酬へられた即ち 即便往生の時土と行と別なり。(未だ往生せざる故願生極樂と云ひ、得生之行を請すと云て、平生に約しては各別なるべし。)當得に約する時は行の外に土無し、彌陀來迎を以て往生の行とし、以て他力の行と云ふ。これ行に土を收むる意にして、第四の思惟正受の請を答ふと結し、十三定善は凡夫所入の身土を説明したるも 今此私考畢すに際し再び十三觀の大要を取て結文とす。

第一日觀 思惟正受を教へては三障のこん闇を除かしめ、次に水を思ふては内心を清め、三種莊嚴は入天の說法(音樂)を聞き、寶樹は華上自然有七寶菓の理を知り、極樂池水は娑婆に流れて三心開發の華中に注ぐ、我等本家の寶樓は眼前に拜し、三尊華座は獨り圓かにして衆座に越たりと云へども、凡夫境大心小く迷て、其を覺らざれば迷悟一致、眞假一同の像を觀せしめ給ふ。現身中得念佛三昧と一念開發すれば、一切万像皆法界身にして、衆生を攝し給ふと知り、光明不捨と信じ上る。悲の觀音は光中に五道を現じ、念佛行者即ち定散の機に代て苦を受け給ふ。勢至菩薩の威徳は

百八十
 三途の苦を離れ、名號を教へて彌陀に歸せしめ給ふ。平素我等の信仰する別所求の土は、實に身心を安托するの處なり。唯想ふ繋念一處想於西方に住せん事を。我等未だ當得往生せざれば現に華合の障あり。然りと云へど法界の依正、能譬の觀門たる水鳥樹林は説法の聲と聞ゆるあり。六十万億滿虛空中の眞身觀難ければ形像あり、等身の三尊ありて我等の機に應じ給ふ。此變現の靈儀を拜するを喜び、同行同縁の知識と共に専心念佛向西傾の想に住せん事を念願するものなり。
 (已上は大正五年度祖山にて曼陀羅定善の零講了の際の結文の一節なれば附記す。佛乘)

既刊 深草叢書

- 第一編 研覈鈔 大正九年三月發行
 - 第二編 賢問愚答鈔 大正十年三月發行
 - 第三編 息諍解誘編餘意 大正十年六月發行
 - 右は幡豆郡味濱滿國寺音空上人の著 本年より六十餘年前に原書成る
 - 第四編 深草鈔 上 大正十二年七月發行
 - 第五編 同 中 大正十三年三月發行
 - 第六編 同 下 大正十三年三月發行
 - 右は深草立信上人所談 顯意上人筆受なり
 - 第一編品切 第二編以下殘本若干あり
- 本書に引續き 石黒若 散善(再版)玄義 序分
 刊行す

大正十四年九月二十日印刷
 大正十四年九月二十五日發行

深草叢書 第七編 【定善義私考】
 會費金壹圓五拾錢也



編輯兼 深草叢書刊行會
 發行者 太田 準 悟
 右代表者 太田 準 悟
 印刷者 都築 福太郎
 岡崎市魚町四拾貳番地
 振替名古屋六五四九番
 印刷所 都築 印刷所
 岡崎市材木町百五十三番地

發行所 岡崎市魚町 安養院内
 深草叢書刊行會

終

